「もう少しだ！頑張れ！」

（日立浜　60 代　女性）

午前中に仕事をして、遅い昼食をとった後地震。こたつに掴まっていたが、なかなか揺れが収まらないので勝手口から外に出た。そこに来た浜の人と「まさか此処まで来ないよね」と話しながら、しばらく海を眺めていたが、道路に流れた船が引き始めるのを見て、「大きいのが来るぞ、逃げろ！」と言われた。慌てて靴を履き直して外に出た時には、もう次々波が来て後の山に上がる階段に間に合わなくなった。

近くのフェンスに掴まり立っていると、首まで波が上がって来た。私は、海に背を向けていたので、あまり津波の恐怖というのは無かったが、背伸びしても水がどんどん上がってくる恐怖の方が強かった。水は口ぎりぎりまで上がって来た。

初めは、1 回目の波が船上げ場前から道路に来て、さっぱ船が動いて流れていた。揺れが収まった時に「あ、入れなきゃ」と思い、持ち出しリュックに財布も全部入れて車に置いていた。でも、まさか此処まで来ないよなと車で逃げずに眺めていた。だから車も全部流されてしまった。

警報は、防災無線がすぐ脇にあるから全部聞こえる。でも、今まで大きい津波が無かったし、3m ぐらいでは大丈夫と思っていた。生きていれば 100 歳ぐらいになるおじいちゃんも「今までチリとか昭和 8 年の津波でも家の石垣の途中まで来たくらいだ。」と言っていた。

結局、自宅は 2 階まで波が入ったが、波が当たったというよりジワジワ上がって来た感じで建物はそのまま残った。でも、なかなか水が引かなかった。私が立っているフェンスの向こう側の階段に居た漁師さんに、「まだ水が引かないの？！」と騒いで「もう少しだ、頑張れ！」と声掛けしてもらったから助かったと思う。1 人であそこにいたら、あきらめたかもしれない。

ようやく水が引いてから上に上がろうとしたが、寒くてどうしようもないので、2 階の部屋で濡れた服を全部脱いで、がたがたと震えながら幸い押入れの上で濡れていなかった服に着替えてそれで助かった。そうでなければ寒くて大変だった。

近くのアパートは、2 階部分だけが隣の倉庫の上にポンと乗っていた。中に足の不自由なおばあさんが居たまま移動していた。おばあさんは、

波が来ていた時から、「助けてー、助けてー」と手を振ったり騒いだりしていたが、どうにもできなかった。水が引いてから、近所の消防の人達と手伝って降ろし、担架で連れて行くのを見てから私も山に上がった。まだ、足元が見える明るさだった。

市の避難所は鍬ヶ崎小学校だったが、低い土地を通って逃げる事になるので、数年前に日立浜町内会で浄土ヶ浜のホテルに「何かあった時はお願いします」と頼んであった。ホテルは自家発電もあるため、快く引き受けてくださり、皆で 1 ヵ月間お世話になった。他地域の方に「避難所は寒かったでしょう？」と言われたが、1 階大広間と 2 階ロビーを開放していただき、掛け敷き布団と枕、座布団も使えたので寒くなく過ごすことが出来た。町内で以前から危機意識を持って受け入れのお願いをしていたことが幸いしたと思う。食べ物も「いっぱいは出せないが」とそれでも小さいおにぎりを出してくれた。

夫は、仕事で岩泉に行っていて 2 日間連絡が取れなかった。3 日目の昼頃にホテルに来た。以前からホテルに避難する事を知っているのに鍬ヶ崎小学校、第 2 中学校に行き、熊野神社にも回ってから来たので遅れたようだ。夫もパニックでホテルが頭に無かったようだ。

ホテルには、100 人以上いたと思う。4 月 10 日からは、総合体育館に移り、6 月 26 日に仮設住宅に入った。皆知っている人達だったので安心だった。体育館では、マットや布団など支援物資も沢山頂いて、私達は本当に恵まれたと思う。暖房も効いて寒い思いもしなかった。

今のところ思い出す事はないが、水に入った時に恐怖を感じるかも知れない。命があって良かったと思うしかないが、やはり時間が経つとあれもこれもあったのにとなる。「命が助かっただけでいいんだよ」と言われて、「そうだね」って言うけどつい、今まであったものが全部流されたという思いが湧きあがる。

元の場所に住みたいが、新しく出来る道路に関わってくるので、再建と言ってもなかなか前に進めない。早く決まってほしいと思っている。

「津波対策で１階にトンネルを通していたが」

（日立浜　60 代　女性）

自宅で地震。すぐに外に出て、近所の方達 4、5 人で肩を組んで駐車場にしゃがんでいた。しばらくして、漁業をしている方から「津波が来るから逃げろ！」と言われたので慌てて逃げた。普通の地震と違うと感じたし、北海道からも「6m の津波が来るから逃げろ！」と電話があった。

私は、普段は逃げずに逆に海を見に行く方だったが、今回だけは逃げた。逃げろと言われて家に入り、裸足で逃げようとしたら、皆に「靴を履いてきて」と言われて、一番古い靴を履いてしまった。

道が混んで走れなくなると困るのですぐに車で避難した。その時、位牌を持って逃げる事が出来た。以前、向かいのおばあさんが、津波の時に「何が無くてもこれだけは宝だ」と言って位牌を背負ったのを見ていたので私も思い出した。

車で浄土ヶ浜第１駐車場を回り、高台の実家に車を置いてから、また走って降りて津波を見た。魚市場に波が来て観光船が流れ、何秒もしないうちにがれきがガーっと来た。

少し前にニュージーランドの地震があったので、大事な物をバッグに入れていた。それを片付けていなかったので、そのまま持って逃げた。2 日前の地震でも逃げている。

家の後ろが山なので、あまり訓練には参加していなかった。家は 3 階建てで、夫が津波対策のため 1 階をトンネルのように通していたので私の家は絶対大丈夫だと思っていた。家そのものは残ったが、壁も崩れて後ろもメチャメチャになり、家の庭にさっぱ船が 4 艙並んで立っていた。

夫は、出張中で自宅に私１人いた時だった。母はすでに亡くなっていたので良かったと思う。生きていたらとても逃げられなかった。数年前の地震でも逃げようとしたら、「おれはここで死ぬ」と頑張ったから。それでもその時は背負って逃げたが、今回は間に合わなかったと思う。それに夜の地震だったら私も逃げなかったと思う。

防災放送は、あまり聞こえなかった。第 3 駐車場で皆と津波が来るのを見ていた。蛸の浜に砂島（さごじま）というのがあるが、そこまで水が引いていた。私は砂島まで水が引いたのは初めて見た。

その時は、自宅がまだ残っていたので、私が見に行こうとしたら、「や

めどがん、やめどがん」と止められた。津波を見て怖いというのは無かった。泣くこともできないし、笑うしかなかった。

家も無くなり、どうにも出来ないので実家に戻った。翌日から毎日歩いて必要なものを取りに自宅に通った。大津波警報が鳴ったので、何人かで時間を決めて行くようにした。

避難所に行かないので、物資面の支援は少なかったが、幸い夫の勤務先本社から物資が届いて助かった。6 月 24 日に仮設の鍵を貰った。

今回は、揺れがいつもと違った。津波が来る時は、シーンと音が無くなって風がある。地鳴りなのか山が鳴っていたような気もする。今思えば、ここはカラスの山だったのに数日前からカラスが居なくなっていた。

「すぐ取りやすい所にリュック」

（日立浜　70 代　女性）

港町の実家に寄って、コーヒーを半分ぐらい飲んだ時に地震。自宅に息子が居たので、揺れている中で電話をした。「私は、実家のおじちゃん達と逃げるから、1 人で逃げてちょうだい」と言った。その時はまだ電話が通じた。

その後、弟夫婦と一緒に車に乗って浄土ヶ浜第 1 駐車場に避難した。揺れで動けなかったが、わりと早い時間に出たので渋滞もしていなかった。警報はわからなかったが、地震ですぐに津波が来ると思った。

車で向かうとちょうど歩いている息子に会ったので、そのまま拾って駐車場に行った。

家ではいつも、訓練に参加していたし、第 1 駐車場に避難していた。普段から避難リュックを置いていたので、息子に「もし持てればそれを持って、無理だったら体だけでもいいから逃げるように」と伝えていた。息子に聞くと「母さんがすぐ取りやすい所に置いていたから」と持って来ていた。仏壇に上がっていた果物なども持って来たようだった。

駐車場では、ずっと車内に居たので津波を見ていないが、車のラジオで情報を得ていたし、息子と弟が高台から海を見に行ったので、いつもは見えない海の底が見えていたと聞いた。

避難して来る車がどんどん増える中、暗くなるので鍬ヶ崎小学校に行くと体育館も濡れて誰もいなかった。それで第 2 中学校に行き、その日から 5 カ月間お世話になった。中学校に行った時は、とても寒かった。案内された闘技場で畳がある所だったが、毛布も何もなくて紅白幕や柔道着などを借りた。最初は、食べるものが無かったので、近くにあったりんご園から買ってまわりの皆と食べた。

8 月に仮設住宅に移り、今は皆さんと談話室でおしゃべりや織物をして過ごしている。

「病人やペットがいるので遠慮した」

（日立浜　40 代　女性）

勤務していた長町の店舗で地震。事務所から出て棚を手で抑えながら、お客さんに「皆さん、外に逃げて下さい！」と言った。私も驚いて一旦駐車場に出た。2、30 人は居たと思う。店内のお酒や缶などが落ちて散乱する程のかなりの揺れだった。

停電でレジが使えないため、お客さんに謝り帰っていただいた。片付けていると余震で出たり入ったりの繰り返し。私の家が海に一番近いねと同僚に話しながらも、まだ津波とは思っていなかった。でも、古い住宅だったので地震で壊れたかもしれないと思い、帰ることにした。

津波が来るのも知らずに車に乗って自宅に向かった。停電で何も情報がない。車のラジオを点ければ良かったが、動転して気がつかなかった。防災無線放送も場所によって大きさが違うし、車の中なので途中で何か言っているような気がしたがよく聞こえなかった。何であの時ラジオをつけなかったのか、今でも不思議だ。

106 号線を走り、市役所前を通って帰るつもりでいたら、南町のドラッグストア前で「通れない」と言われたので、その時初めて津波で封鎖なんだと分かった。そこから左に入り踏切を渡った。突き当りで宮古駅に曲がろうと思うが、信号が停電でどの車も止まってくれなかった。坂本眼科の方から、車がビュンビュン来て、多分津波が近づいていたから皆が逃げていたんだと思う。波が町に入っているとも知らず、停電で混んでいるんだなと思っていた。

何とか曲がり、今度は末広町から入ろうとすると、また止められたので、魚菜市場の方に向かい、二幹線道路を走った。その頃、大通りや末広町に津波が来ていたのかもしれない。走っていると向こうから何百という人がワーって逃げて来た。お年寄りが 3 人ぐらいずつ手を繋いで歩こうと一生懸命引っ張っていたり、常安寺の下では、白衣を着た人達が「早く早く！こっちに早く逃げて来て！」と叫んでいた。人が飛び出すのを車で避けながら走り、仏具店の角から南を見たら、その先でもう沢山の車が自分より上の方に浮かび上がっているのが見えた。「あー、私、このまま此処にいたら死んでしまう」と思ったが、何とか常安寺方面に上がることが出来た。本当にぎりぎりだったと思う。

私は、茨城生まれなので津波を見たことがない。地震があってもいつも数cmばかりで変化が少なかったので津波をなめていた。義母は、昭和35年のチリ地震で宮古港の水が引いたのを見ていたので、「いつか来る」と言っていたが信じられなかった。

家族は、私がまさか自宅に戻ると思わず、長町に居て一番安心だと思っていたようだ。でも私は、揺れで家が潰れていたら助け出さなきゃならないという思いがあった。

結局、混んでいる常安寺の道を初めて上がり、国道45号線に出ると下に向かう車が何十台と繋がって宮古病院まで渋滞していた。反対車線は空いていたので、宮古病院前のスタンドまで行った。その時スタンドのお兄さんから、市役所の周りが海になり、歩道橋の上だけが島のように出ている写真を見せられた。ネット等でスタンドに配信されたようだ。「もう下はこうだよ、行けないよ」と言われた。

とにかく何とかして自宅に行かなければと思い、スタンドに車を預けて歩いた。沢山の人が避難して来るので、「どうなったんですか？」と聞くと「測候所まで歩けばそこから見えるから行ってみろ」と言われて行って見たら、もう町がぐちゃぐちゃになっていた。これはもうどうしようという感じ。仕方なく、また来た道を戻った。

いつも家族で、何かあった時は浄土ヶ浜第1駐車場に集まることにしていたので、一応行ってみることにした。歩いていたら、ちょうど夫と息子と犬が車に乗って走って来たので会うことが出来た。そのまま崎山に勤めていた娘も迎えに行った。

夫と息子は、自宅に居て地震にあったが、義母は鍬ヶ崎の姉の家に行っていて別行動だった。逃げたかわからなかったので、行方を捜そうと1回田老に出て箱石地区から山を通って山口方面に抜けた。普段は交通量が少ない道も渋滞していた。途中親戚の所に寄ると津波が来た事を知らないようだった。内陸の義母の実家に行ってみたら、義母が避難していたので、安堵して皆でそこに泊まった。

義母は、鍬ヶ崎から慌てて車に乗り、市役所前を通った時には、「早く逃げろ！」と叫ばれていたそうだ。夢中でアクセルを踏んで坂を登ったらしい。車の後ろに誰も居なかったので本当にぎりぎりだったようだ。

私の家族5人は揃ったが、今度は義母が行っていた鍬ヶ崎の姉が心配になった。義母は気が動転して姉を乗せずに家に置いてきてしまったの

で安否が分かるまで気が気じゃなかった。後でそのお姉さんも息子が迎えに行って避難していた。

親戚では、漁師だった義父の弟が津波で亡くなった。地震の後、船を結わえて作業をしていたので、皆が「逃げよう！」と言ってくれたらしいが、「大丈夫、分かってっから、すぐ後ろが臼木山だから自分で登るからいい」って聞かなかったらしい。それで、あの人は泳ぎも達者だし、大丈夫だろうと皆はそのまま避難したようだ。

私の勤務先は、震災翌日から開店した。勤務日だった 13 日から仕事に出たが、停電なので電卓を使った。皆食べ物が無いので、普段の客層ではない方々も家族で大量に買い占めに来た。冷凍食品は、駄目になって 50 円、100 円で処分したのでかなり殺到したし、品物が片っ端から無くなった。すぐ売れるのは味噌。醤油と塩じゃない。米も精米しない玄米まで全部売れた。

私の夫は病気で犬もいたので、迷惑をかけるのが分かっていたから、避難所には行かなかった。しばらく親戚宅にお世話になった。
同じように被災しても動物や病人がいると行きづらいし、遠慮して入らないようにしたが、情報もあまり入らないし、もらえない物資もあったので後で少し後悔した部分もある。

仮設住宅には 6 月中旬に入った。やはり、いくら親戚でもお世話になるとだんだん辛くなる部分もあるので、移った時はほっとした。お互いに遠慮があるし、受け入れる方も 2，3 日ならいいが、自分達の空間に他人が常時いるのは大変だと思う。私は、説明会があったその日に引っ越した。

夫は、今まで 1 回も避難したことが無い人だったが、今回は逃げたので異常な揺れだったのだと思う。ただ、家がなくなるとは思わないので、位牌も持たずに逃げた。訓練にはあまり参加していなかったが、家族で逃げる場所だけは決めていた。

以前自宅があった場所に道路が出来るようなので、もとの場所には建てられないが、家族が無事だったのでそれだけでも良かったなと思う。

「初めて 2 人で逃げた」

（日立浜　70 代　女性）

自宅で地震。養殖ホタテ小屋から帰り、ご飯を食べた後だった。夫は、4 歳で昭和 8 年の津波に遭っている。あまりに大きい地震なので、「逃げねーば！」と直ぐに位牌と薬を持って逃げた。

昭和 35 年のチリ地震でも家の前の道路が半分濡れただけだったし、避難してもまたすぐに帰られるかなと思っていた。

いつも孫から「逃げる時はおじいちゃんと一緒に逃げてね！」と言われていた。今までは、私が臼木山に上がっても夫は家に残っていた。でも今回は、「孫に怒られるから一緒に車に乗って！」と言って、初めて 2 人で逃げた。水産科学館に車を置いた後、夫は自宅後ろの臼木山から家が浮かんで流れるのを見たようだ。

私が軽トラックに居ると、近所の若い親子が泣きながら歩いてきた。心臓が悪いお母さんが青い顔をしていたので、水産科学館の方のご厚意でライトバンを借りて休ませてもらった。お礼を言われたが、その親子に遭わなければ私は降りて行って流されたのではないかなと思い、却って助けてもらったみたいだよと笑った。

科学館は停電で水も止まったので、浄土ヶ浜のホテルに移動した。私は、仕事着のまま塩水で濡れていたのに、お陰で羽毛布団に寝させてもらい本当に有難かった。

2、3 日すると、女は何でも仕事を見つける。ホテルでご飯を出すにもカップラーメンのお湯を準備し、「おにぎり作りを手伝って」と声が掛かれば喜んで行った。最初は何処にも出られないので、ホテルの中で仕事を見つけた。トイレは 1 か所だけ借りて、水が出ないので湯船から大きな樽に汲みあげて使っていた。男性は、仕事や片付けで外に出ていたので、私達のような年寄りでも手伝って役にたった。私は、普段それ以上の重い物を持って仕事をしているから苦にならない。長靴でホテルの絨毯を汚すので、拭いたり掃除機をかけたりして身体を動かすようにした。

夫は、84 歳になったが、今まで働いていたのが急にパタッと何も無くなったので、座って横になっているだけでも疲れがどっと出て、肩が上がらなくなってしまった。子どもと孫が来た時、一緒に家の片付けに行ったりはしたが、毎日「痛い、痛い」の繰り返しになった。

私は腰が抜けていたのだろう。ホテルの仕事はするが、自分の家を見に行くことが出来なかった。そんな生活が 1 ヵ月経ち、総合体育館に移ってからも、私はそこら辺を掃除したりして少し身体を動かした。

夫は、あらゆる接骨院や整骨院などを回ったが治らなかった。歩くと響いて痛いので可哀そうだったが、歩かないと足が動かなくなるので、無理やり体育館の周りを歩くようにしたが、寝ていることも多くなった。

病院では「手術しないと治らないが、高齢だから今さら痛い思いをするのはどうか」と言われたが、本人は手術を決めた。でも、周りの漁師さん達から、手術をしても治らなかった話などを聞いて、2 日前に急に辞めてしまった。整形外科で電気をかけたり、シップを貼ったりしてどうにか過ごしたが、知人から聞いた病院の先生が言うことがすごく分かりやすく、「頑張りましょう」と言ってもらう事が有難くて何となく痛みが落ち着くようになった。

仮設住宅に入り 1 年以上経つが、家の中で何もしなかった夫が、棚や織物を飾る台も作るようになった。漁師だがもともとは船大工だったので、手をつけたら嬉しかったのだろう。痛いことは痛いが、作業が出来るくらいに今は落ち着いて暮らしている。

船も養殖いかだも全部だめになったから、やはりショックだったのだろう。普通の家にしては大きい方で頑丈な家だったが、それも流された。

以前は、息子夫婦と孫と 5 人で暮らしていたので、孫がいる北上に私達も一緒に行くつもりでいた。でも、体育館に居た時、水沢に避難した方が宮古の様子が分からないため、また戻って来たことがあった。やはり、町の様子や今後の情報が分からないし、仮設住宅に入ることも考えるともう少し様子を見た方が良いと残った。息子夫婦は孫のいる北上へ行き、今は別々に暮らしている。離れたので少し淋しくなったが、周りが皆知っている人達だから安心だ。宮古を離れた人達から、やはり子どもの側より近所の人達と一緒の方が良かったと聞く。私も、こうやって暇さえあればここでお茶を飲んで、お喋りをしている。

夫は痛みも和らぎ、たまに 1 人で臼木山を歩いたりしているようだ。前は私も一緒に歩いたが、今は織物を楽しんでいる。お互いに元気でいるのが一番かなと思って暮らしている。

「地域の人を覚えているのは分団員」

（新町　60 代　男性）

新町の自宅事務所で地震。随分強い揺れだなと感じた。以前から、あのぐらいの地震だと分団員は水門を閉め、屯所に集まる。私も第 1 分団なので屯所に行かなければならなかった。

分団員は既に水門を閉めていたので、私がちょうど出ようとした時にポンプ車が来た。「もう水門を閉めて、今広報して回って来た所だ」と聞いた。後は避難しようと決め、皆に避難するように指示して別れた。それで末広町の方に下がろうとして見たら、いつもより向こうの地面が高く見えた。それが津波だった。流れてくる車などを初めて見たので、驚いた。

屯所に行けないので、そこら辺の人を早く避難させる事を考えて行動した。「上に逃げなければ駄目だ！」と叫び、皆で横町に向かった。我が家もブレーカーを落として取り敢えず避難した。

そのうち、下の方から「赤い車が流されている」と聞こえ、正直な所 1 分団のポンプ車だと思った。別れてすぐの事だったので、「あー、これは流されたな」と諦めていたが、一石山に走り助かったと連絡があった。真っすぐ西側に走ったので、無事だったようだ。

避難訓練の時は、皆さん宮古小学校に行っている。突然の事なので、一時的に高台の石崎神社（おしん山（さん））に逃げた。この辺りは、中央公民館が避難所だが、一次避難所なので後に裏山を上がって第 2 中学校に行くことになる。神社には 15、6 人が避難していて、余震が落ち着くまでしばらくそこに居た。常安寺に逃げた方も多いようだった。

新町近辺の家は無事だったので、夜に懐中電灯などの必要な物を取りに戻る事もあった。食べ物は近所から頂いたり、中央公民館に届いたりした食料を分け合った。落ち着いたら、大槌から帰って来ない従業員の事が心配になったが、翌日無事に帰って来た。八木沢までは来て、そこから通れなかったようだ。

12 日に分団員は中央公民館に集まり、全員の安否確認を取った。第 1 分団員は、30～60 代の 22 名。お陰様で全員無事だったが、家族が亡くなったりしている。結果的には、自宅に居た人は屯所にも来られないので、辺りの人達の避難を考えて行動した。それぐらいしか出来なかった。分

団としては、水門を閉め、皆さんに避難勧告をして逃げるのが精いっぱいだった。まさに助かったというのが、実際だ。

自宅の片付けを始めたのは、1 週間後くらい。どこから手をつけていいかわからなかった。本団からの指示があれば分担して行い、行方不明者の捜索も行った。無線は正直言って駄目だった。ポンプ車は大丈夫だったが、屯所にあるハンドタイプの無線が津波で駄目になって結局使えなかった。自転車で連絡するような感じ。本団からの指示がもっと早ければ良かったが、混乱状態だし、優先順位もあるから思うようにいかなかったのだと思う。命令指揮系統がはっきりするまでは、自分達の判断で動くしかなかった。後は、やっぱり行方不明者を捜すことが先だった。管轄の行方不明者は全員見つかったので安堵している。

捜索では、地域の人を覚えているのは分団員だということで、自衛隊や警察と確認を取りながら一緒に動いた。隣の 2 分団や 5 分団とも一緒に協力して歩いた。

一番感じたのは、思ったより皆が逃げなかったという事。何だかそんな気がする。揺れが強かったので津波が来るとは思ったが、あそこまでとは思わなかっただろう。津波が目と鼻の先に来てから慌てたというような感じだと思う。

また大きい津波が来たら、建物も無いし障害物も無いからもっと奥まで津波が来ると思う。今回よりひどい事になる。今は私も自宅に避難用リュックサックを 2 つ準備している。

「海端と町場では感覚が違う」

（南町　50 代　男性）

第 1 分団屯所の 2 階で作業中に地震。最初は地震だなという感じだったが、長いし揺れが強いので「まずいな、ポンプ車を出さなければならないな」と立ったら、今度は縦揺れになって動けなくなった。あんな地震、味わったことがない。立てなかったのでこれはやばいなと思った。

畳の上を這って下に降り、ポンプ車に向かうと今度は横揺れになった。シャッターを無理やり開けてポンプ車を出し、他の団員が来るのを待っていた。先に部長が来たので、広報する前に水門を閉めに行った。それから、ポンプ車で広報に回り分団長に連絡したら、1 回来いというので新町に行った。その時、ポンプ無線に「山田に 10mの津波が来た！」と連絡が入った。それで「もう屯所に戻れない、分団員にも避難命令が出たから、常安寺かどこかの高台に逃げろ！」となり、何処に行こうか迷っていると佐藤靴店の方から何かがワサワサと流れて来るのが見えたので、右折して二幹線通りを「津波が来たから逃げろ、逃げろ！」と叫びながら走った。そのまま、真っすぐ走って一石山に上がった。ポンプ車には 4 人乗っていた。

水門を閉めた時、私は海の様子を見ていなかった。水が引いていたと後から聞いたがどのくらい引いたかは分からなかった。後日テレビで閉伊川の様子を見て「あー、これじゃ駄目だ」と思った。大きい地震でも、まさか堤防を越える津波とは思っていなかった。越えたとしても、水門の上から洪水みたいにあふれて床上浸水くらいかなと感じていた。

いつも報道機関が水門に 2、3 社来る。あの時、カメラマンが閉伊川を映すとすごい勢いで逆流していたそうだ。水門を閉めて広報に回り、市役所前でポンプ車が撮影された時に逆流していたので、それから 10 分ぐらいで津波が来たことになる。3 時 10 分過ぎまでは、ポンプ車で回っていた。新町の分団長の所から、一石山に向かう途中で津波が見えたので、津波と追いかけっこのような感じだった。

管轄は違うが、走りながらずっと広報していたら、保久田のケーキ屋から 3、4 人のおばあさんが、「やー大きい地震だったがねー」とのんびり出て来たので、「津波が来たが、逃げろ！」と怒鳴った。「えー？津波？本当に？」という感じでもたもたしているので「こっちは、今津波見て

言ってんだ！速く逃げろ！」と叫んだ。広報してわかったことは、海端の住民と少し町場の離れた方では、感覚が違うということ。逃げろと言っても逃げないし、いくら怒って怒鳴っても「ふーん、本当に来んのすか？」と言われた。だから、随分感覚が違っているなと思った。

私は何も持たずに逃げた。自宅に寄ったのは、水門を閉めてからお袋の避難確認に寄った時だけ。居ないのがわかったので、そのままポンプ車に乗った。そんなに大きな津波と思ってないし、家が流出するとも思ってないから、着の身着のままだった。

自宅も無いし築地に戻れなかったので、団員の実家に世話になり、公民館を被災した１分団の拠点として活動した。今回の津波で死なずとも懲りた人はいるだろうから、次は皆逃げるだろう。

「これまで団員に退避指示が出た事は無かった」

（築地　50 代　男性）

築地の自宅で仕事中に地震。揺れが収まると、たまたま休みだった息子も出て来たので店番を任せ、すぐに第 1 分団屯所に向かった。
水門を閉めて常備（消防本部）に報告し、ポンプ車に私ともう 1 人が乗って広報していた。

大津波警報と聞いてはいたが、前年の津波も 50 ㎝ぐらいだったし、どのぐらいの波かは全く分からなかった。カメラマンが屯所の前で撮影していて、団員もインタビューを受けていた。

しばらく広報していたら、無線に「団員は水門から退避しろ！」と入った。今まで団員に退避という指示は無かった。同時に「山田に 10m の津波！」と無線が入った。水門に居た団員 3 名を退避させ、1 人は一旦自宅に戻った。退避命令が出たので、カメラマン達も市役所に行って上から撮影していたようだ。

ポンプ車で回る途中、自宅前に寄ると仕事から帰った妻が来ていた。息子も携帯電話を見て「何だかすごい津波が来ている！」と言うので、「店はいいから逃げろ！」と言った。2 人とも歩いて公民館に逃げた。

堤防があるので、どのぐらい波が来ているのかが全く見えなかった。後日、広報しながら市役所付近の堤防前を通った 10 分後ぐらいに波が堤防を越え始めたと知った。数分の差だった。もたもたしていたら、ポンプ車も流されていた。

新町の分団長の所にポンプ車をどこに避難させるか相談に行った。「中央公民館に避難」ということで走り出したが、目の前に波が来たのですぐに右折した。今考えれば、その後曲がって常安寺の方に避難すれば良かったが気がつかず、西を見たら一石山が一番高いので真っすぐ向かった。山口川もあと 1m ほどで水があふれたので自分達も危なかった。

保久田、和見町、舘合町の辺りは、津波が来ると全く思っていないから逃げる時も余裕な感じに見えた。ポンプ車なのでサイレンで避けてもらいながら走った。

一石山から海を見ていたら、缶詰工場の辺りからガーガーと波が上がって来て、もう少しであふれそうに見えた。女性達がトイレを捜していたが、3 月なのでカギがかかっていた。非常時なので、カギを壊して使え

るようにして、様子を伺いに常備に行ったが、魚菜市場の組合まで水が来て、前の道路も側溝からあふれた水で通られなかった。まだ水が引かないから行けないと聞いて、また泉町の実家に戻り、とにかく空腹を満たそうと他の分団員とカップラーメンなどを食べた。

夜 7 時頃、団員の 1 人が家の様子を見に降りて行った。その後電話で、常安寺の通りしか通られないと聞いた。それから、残っていた 3 人で中央公民館裏山の上に車を置いて山を下りて来た。

時間帯もあるだろうが、前年の大津波警報では、市役所前のラーメン店が満員だった。道路が封鎖されて行く所がないため、かなり混んでいた。今回はどうだったのかと思ったが、皆避難したようだから、あの強い揺れで感じ取ったのではないか。この辺は山が近いから、逃げた人達は助かったと思う。

地盤の関係なのか、自宅は鍋が落ちる程度の揺れだったが、広報した時に辺りの蔵の壁が壊れていたので、これはよっぽどの揺れだと思った。

「どんどん引いていますよ！と騒げば」

（新川町　60 代　男性）

仕事を終えて帰宅後に地震。茶箪笥が倒れそうになった。テレビでは 30 ㎝の縦揺れと言っていたが、体感は 15 ㎝ぐらいだと思う。新川町生まれの新川町育ちで、昔から地震があれば即津波と教えられていた。自宅も今回の津波で早い段階で流出していた。

私は分団員ですぐ番屋に行くことになっていたので、普段から家族にもあてにするなと言ってあった。揺れが落ち着いてから第 3 水門に駆け付けたら、閉め終わっていた。それで本部であるポンプ車には、何人もいなければならないので一緒に乗りこんだ。町内を回り、屯所で降りて第 3 水門から海を見ると水が引けていたので、報道機関にも「これは来るぞ、お前達も逃げろ！」と言い聞かせた。

前年の 2 月 28 日、チリ地震津波の時も 3 月 11 日と同じように引いたが津波が来なかった。何故来ないのかも研究が必要だ。縦揺れということは震源地に近いということ。昔から、縦揺れの時は津波が来ると聞いていた。ここら辺は津波銀座だから、それは当り前のことだったが、皆忘れている。

今思えば防潮堤が 5mだと、どの程度水が引いているのか見えない。高いのも善し悪しだ。引くということは来るということだから、市役所の屋上から「どんどん引いていますよ！」と騒げばいい。鍬ヶ崎でも魚市場前の湾の底が見えたのですぐに逃げたそうだ。そんな情報も放送すれば分かるはずだ。それが一番悔やまれる。

デジタルは意外と駄目。ちょっとした事で故障する。消防の上部団体や地方自治体や県担当から「ちゃんと大津波警報を聞きましたか？」と聞かれたが、自分達は、それよりも周知徹底が大事だ。分団員は、恥ずかしくない行動をした。

漁協ビルと市役所の屋上で連携して、潮が引いているかどうかを知らせて騒げば、この辺りの人達は分かる。結果論だが、後で写真を見て思うのは、あと 2m防潮堤が高いと溢れなかったのではないかということ。第 3 水門は直接波がぶつかる所ではないので、漁師もさっぱ船を置いている。1 分団も 1 階の天井まで波が入ったが、基礎、大引き、根太にアンカーボルトが入っているし、波が直撃ではないからこの番屋は助かった

と思う。河口から定規で直線を引くとちょうど船場にぶつかるので、波が直接当たっている。

今回の地震で、まだエネルギーが残っているのが北の方という話だ。そっちの方でとんでもないのが来たら、まともに来てもおかしくない。

非科学的だというが、地震前兆について私も調べている。宮古の漁師が、震災前日の漁で潮が速すぎてナマコが獲れなかったそうだ。それぐらい速かった。あんまりおかしいので、市役所に電話をしたが取りあってもらえず、翌日地震が来た。関東大震災の時も 3 月からそういう前兆があった。相模湾の漁師たちは、安政の地震前にもそんな事があったようだと気づいていた。

2010 年の夏ぐらいから、漁で海に出ると先輩漁師が経験したことが無いくらい潮が早かったと書いていた漁師のブログもある。

私は、沖のカニ漁の陸周りをしていた。漁は順調で潮が速いような話も出なかった。ナマコ取りは、岸で漁をしていたので、沖ではなく岸の方が速かったということだ。後は、長沢の辺りで山から石が転がって来たと聞いた。地盤が動いているからだろう。今後、様々な話が出て来るのではないか。

今後は、本部である市役所は情報を出すようにして、消防と同じように女性も炊き出しなど部隊編成することが必要。自衛隊が来るまで交代で川の状態を見て、潮の引き具合を漁業協同組合と市役所で連絡し合うようにして欲しい。出来れば発電機を使いサーチライトで照らすと良いと思う。

「逃げろー！逃げろー！」

（築地　50 代　男性）

自宅でパソコンをしていたら地震。一旦外に出たら、地面がグニャグニャと軟らかいので、「まずい！」とサンダルを長靴に履き替えた。分団員なので、車に乗って第 1 分団屯所に向かった。銀行前の交差点では信号が点滅していたので、クラクションを鳴らしながら屯所に走った。

シャッターを開け、第 3 水門を閉めて次に行こうとすると、他の団員が来ていて全部水門を閉めた後だった。後は、1 分団としてやることは広報だけだったので、言うと怒られるが「よし津波見物だ！」と思っていた。

しばらくして、市役所の上から「逃げろ、逃げろ！」と声がするので、一般人に対して言っているのかなと思ったら、どうやら自分達にも言っている事に気付いた。「大津波警報が出ているから避難しよう」と言うので、私は上着を取りに歩いて自宅に戻った。上着を着た時、不安な気持ちがあったのだろう、仏壇の位牌を内ポケットに入れていた。

中央公民館が待機場所なので、走って向かうと途中で保健センターの職員 2 人に会った。私が消防の半纏を着ていたので、「独居老人がまだ来てないので家を教えて欲しい」と聞いてきた。分団では、いつも火防点検などで何処に独居老人がいるかわかっている。

その家に着いたら、おばあさんも逃げようと荷物を持って玄関に出ようとしていた。こっちも焦っているので「急いで!急いで!」と言うが、「バッグの中に鍵が」と言って捜している。「鍵はいいから急いで！」と促した。既に危ない時間帯になっていた。市役所でも「逃げろ、逃げろ！」の連呼が始まり、辺りでは、ザーザー音がして「逃げろー！逃げろー！」の声のテンションが上がっていく。最初は冷静だったが、堤防から波が溢れると絶叫調になってくる。

後にテレビで、「逃げろ！」と言ったのに皆逃げなかったので、空しいと話しているのを見たが、そんなことはなかった。声は聞こえていたし、ザーザーという音も分かった。路地の間から黒い水が溢れるのを見て、海に近い自宅がどういう状況なのか分かっているから覚悟を決めていた。

道路を見ると黒い水がサワサワーっと近づいてくる。もうこれはダメだと思って、皆を隣のアパートの階段に上がらせた。最後に状況を見よ

うとしたら、さっきまで静かに来ていた水が、白い泡をたててザバン、ザバンと来ているので「あーやばい！」と階段を上がった。上がった瞬間にこれはしまったと思った。廊下だけで行き止まりなので、何処にも逃げられない。裏通りを見ていると家々は流され、4ｔトラックも簡単に浮かんでいた。自宅もアパートにぶつかり屋根が落ちて止まっていた。どんどん水が上がり、どうしようと思っていると床面の10㎝ぐらいまで来て止まった。「あー、止まった」と安堵したが、今度はなかなか引かない。考えたら、堤防の中でいっぱいになったからそんなにすぐ引く訳がない。

そこに居たのは、保健センターの2人と80歳過ぎのおばあさん。周りに「誰かいませんか？」と声を掛けた。保険会社に人が残っていたので、「暖かくして食糧と水を確保して待っていろ、後で絶対助けに来る」と言った。屋根の上にも20代ぐらいの女性が乗っていたので、隣のベランダに渡らせて、中で待つように指示した。あの時は、完全に水に囲まれていたので、もっと大きい波が来たらということだけが不安だった。

私は、隣の屋根に登って数軒飛び移り、近くの山の下に降りた。何かないかと捜したら運良く、壊れたはしごがあったので、屋根にかけて皆を逃がそうと思った。すると、もう1人「助けて！」と声がした。皆も聞いていたが、水は真っ黒だし、見られる範囲は限られるので何処なのか分からなかった。

保健センターの職員が「頑張ってこっちに来て！」と声を掛けた。するとその人が突然水の中から浮き上がった。逃げる途中で何処かの家の中にドサドサと流されたようだ。水が天井近くまで来て、僅かな隙間で呼吸をしていたようで、声がしても外からは全然見えなかった。こっちに来てと声を掛けられたので、頑張って水に潜って出てきたと思うが恐ろしい事だ。水も真っ暗で何処だか分からないし、潜っても下手したら空気が吸える所に出るか保障がないのによく潜って出て来たと思う。その人を引き上げて、アパートの中に入り着替えさせた。冷たい水なので顔面真っ白。私が見た人間の中では死んだ人以上に白かった。後で気づいたが、そういう時は皆の人肌で温めるのがいい。多分、そうやって貰ったら相当助かったと思う。でもその時は、気づかなかった。

その女性を待機させて、4人で渡したはしごで屋根に移り山に上がった。水面より少しでも高くと上に登った。更に登れば道に出るが、高齢のお

ばあさんが一緒なので行けなかった。保健センターの 1 人に壁伝いに電力会社の方に逃げられるか確認してもらい、私は暖をとれる物を捜した。灯油はあってもファンヒーターばかりで使えず、仕方がないので近くの家に入り雨風を凌ぐことにした。

私は、長靴を履いていたので、電力会社の駐車場まで行ってみた。まだ道路は水で一杯だったが、電力会社に人が残っていたので水を頼んだら、容器を捜して詰めて投げてくれた。

午後４時前になると長靴で歩けるくらいに水が引いたので、皆で泥道を歩いて愛宕小学校に向かった。途中で、何台もすき間なく重なった車が道を占領して通られなくなった。そこは子どもの頃からの遊び場だったので、山から家の裏を通り愛宕小学校に着く事が出来た。

体育館には、沢山人が居て、5 分団がドラム缶で火を焚いていた。無線を借りて 1 分団に自分の無事を伝え、皆さんと別れて中央公民館に向かった。

公民館に着くと、中は同病相哀れむという感じで動きが止まっていたように感じた。情報交換をして、分団員や市役所の人と一緒に残っている人を助けに向かった。歩道橋にいた鍬ヶ崎に向かう途中だった夫婦や待機させていた女性達をピックアップした。屋根にいた女性は、車で走っていたら津波に遭い、屋根の上に乗り上げたそうだ。

余震が何回もあるし、中央公民館も古いので心配だったが、夜中でも誰か来ていないかと人々が捜しに来た。

数日、辺りを回ると声を掛けても返事が無かった所に人が残って居たこともあった。近所でも数名亡くなっているが、老夫婦だけだと動かない方がいいと思ったり、足が不自由だったりすると逃げたくても逃げられない場合がある。

自宅もないので、2、3 日おばの所に世話になり後は弟の所に移った。昼間は人を捜したり、片付けたりしていたが、仮屯所になった公民館には、安否確認に来る人が多くなった。名簿をコピーして愛宕小学校と鍬ヶ崎小学校に持って行き、そこで避難者名簿を交換して張り出した。

いつもサンダルからスニーカーに履き替えるのを長靴にした。訓練では長靴だったので咄嗟にそうしたが、それで良かったと思う。

「逃げ遅れた時の判断」

（大通 60 代 男性）

大通りの自宅に妻といて地震。テレビを茶の間で見ていた。揺れ始めてからテレビに案内が出た。１回目の揺れで強いなと感じ、表に置いていた車が邪魔になるかと思って少し離れた駐車場に移動した。信号は記憶にない。家に戻ると、近くの道路が混み始めていた。歩いているとまだ揺れていた。それが無駄足だったと思う。

余震があったが、家の中にいて放送は聞こえなかった。普段から戸を開けないと聞こえない。家の物は全く落ちなかったが、また強い地震が来たのでこれはおかしいなと思い、立ち上がってガラス越しに裏通りを見た。

何だか風がバタバタする感じで胸騒ぎがした。裏の道路が茶色くなっていて、「あれ、何だ水じゃないか？」と思い、「おい、だめだ逃げよう！」と薬などを持って逃げようとしたら、玄関のドアが押されて開かない。そのうち鍵穴から水がピューッと入ってきた。長靴を履いて逃げる気でいたが、隙間からも水が来た。茶の間の二重サッシの大きな窓が波でバーッと持っていかれてしまった。もうだめだと思い、長靴のまま 2 階に上がった。たちまち水が階段の踊り場まできた。1 階の天井には浮き上がった物がぶつかって穴が開いていた。2 階に上がった頃には、家の前の通りは川のようになっていた。まだ、午後 4 時前だったが、暗くなる前にろうそくなどを用意した。

夜 9 時ごろに宮古小学校に避難しようと外に出た。まだ、水が少しあったが、真っ暗な道を犬を背負って歩いた。伊藤歯科の所に船があって通れないし、“あんばいや”の辺りも車が通られなかった。側溝のふたも上がっていて危ないので、あきらめてまた自宅 2 階に戻った。ラジオを聞きながら過ごし、毛布などで暖をとった。

家の前の電柱には船の網が流れつき、そこに物がひっかかってどんどんたまっていた。夜の 12 時頃まで家に居たが、もっと大きな津波が来ると聞いたので、避難しようと外に出た。石川医院の所に誰かが開けた穴があったので、そこを抜けて八幡通りを歩き、宮古小学校に向かった。その頃には水が引けていた。泥で歩くのが大変だったし、途中で電灯が消えてしまい大変だったが、何とか辿りついて一晩過ごした。

私は、不幸中の幸いだったなと思う。タイミングがずれて玄関の外に出られていたら、逃げる途中で後ろから波に追いかけられたと思う。出られないから助かった。近所では、逃げた人もいるが寝ていた人もいた。私が 2 階から外に声を掛けると、何人かが 2 階から顔を出したので、逃げない人もけっこういたようだ。

最初の揺れでは、津波が来るとは思わなかった。自宅に戻って余震があったので津波が来ると思った。近所同士声掛けしたかもしれないが、聞こえなかった。避難訓練に参加はしていないが、避難場所については確認していた。震災後の訓練には参加している。

翌日、息子のアパートに移り、40 日くらい世話になった。自宅に通いながら片付けて、家を修理した。床下の泥も大工さんに洗ってもらい、6 月ぐらいには自宅に入ることが出来た。

早く逃げるに越したことはないが、逃げ遅れたときのタイミングが大事で、見極めが生死を分ける。本当は、すぐに逃げれば良かった。すぐに外に出て辺りの様子を見ることも判断材料になる。

今は少し落ち着いてきたが、津波の映像などを見るのは嫌だ。地震の時の警報音を聞くと思い出して嫌な気分になる。

「走る私達を見て近所も逃げた」

（藤原　70 代　女性）

午前中出掛けていた山田から自宅に戻り、昼食後テレビを見ていたら地震。山田の道の駅で、いつもなら私の方から言うのに、その日は夫に「蕎麦でも食べようか」と誘われたが何となく食べたくない感じで自宅に戻っていた。

強い揺れなのでとにかく戸を開けようと手をかけたが、どうにもならずにしばらく掴まっていた。戸棚の物もガシャガシャと落ちて、収まったかなと思うとまた揺れた。

夫に「これではダメだ、娘の所に行こう！」と言った。夫は鍵を掛けたりしようとしていたが、「こんな大きい地震の時は、鍵をかけてもどうしようもない、盗られる物も無いから！」と準備した。

私は、常に貴重品などを入れていたリュックサックをそのまま持ち出した。夫に「行くべす、行くべす！」と言うと、「なあに、大丈夫だ、持っていく物はないか？」とまだ車を見に行ったりしていたので「早く！早く！」と気が気じゃなかった。

隣の奥さんにも「車で行くから一緒に行こう、乗って！」と出ようとしたら、その方の親戚が来たので避難所に行く話になった。「その人も一緒に乗せていいよ」と言ったが、お父さんもまだ帰ってこないからということでそこで別れた。

私達は車に乗り、どっちの道を行こうかと考えて閉伊川沿いの道路を選んだ。後から聞いたら、もし宮古大橋を渡っていれば波に追いつかれたのではないかという時間だったようだ。宮古大橋を越えれば終わりだった。私は、水から離れて市街地に行けばいいかなと橋を渡るつもりだったが、夫は「そっちはダメだ」と言って、川沿いを走ったのでそれが良かった。

警報で津波の事を聞いたのは、車で缶詰工場の前を走っているとき。その時、車の後ろから満潮時より水面が高くなっているのが見えた。波が大きくはないが、白くなって来ていたので、夫が「これは津波だ！」と叫んだ。それで逃げて来て良かったのだなと思った。

まだ車があまり走っていなかったが、信号は止まり警察官が数人で誘導していた。小山田橋の交差点で「津波だー！」と叫ぶ声も聞こえた。

橋は、車が渋滞してなかなか進まない。津波が閉伊川を越えてきたらどうなるんだろうと思い不安だったが、何とか進んで橋を越えた時には安堵した。忘れてしまいたいなと思っても絶対に忘れられない。

近所の方は、比古神社に逃げて助かったそうだ。でも後で聞いたら、国道 45 号線を越えた時に水が足元に来たのでぎりぎりだった。私達が逃げたから自分達も逃げる気になったので良かったよと言われた。走って逃げたので、近所も負けずと逃げたらしい。

私達が山手の方に着くと、辺りの人が皆外に出ていた。逃げて来る人もいるし、様子がわからないので見に行ったらいいのか、自分の行動を自分で判断出来ないような状態だった。

携帯電話を持ってはいたが、孫は学校に行っているし、娘からも電話が来ないので掛けなかった。安全な所で娘へ電話をしたらやはり学校に居て「電話を掛けて話をしているうちに逃げ遅れたら駄目だし、お母さんの事だからさっさと来ると思って掛けなかったよ、ごめんね」と言われた。私は、「それでいいんだよ、お互いに揺れで大変だったし」と話した。無事に逃げる事が出来て孫にも会えたので、私達は幸せな方だと思う。

皆さんは、避難準備をして大荷物を持ち歩くのでえらいなと思うが、私はそういう考えはなかった。津波の被害にあっても 3、4 日経てば支援が来ると思っていた。常に年寄り 2 人で、若い人が居ないから持ち出すにも限りがある。水や食料品と言うが、背負って歩くのは出来ないし、時間も限られている。だから、貴重品だけで何も持たず、常に取りやすい所に置く事を心掛けていた。

夫が川井に住んで居た頃、ちょうど宮古に来ていた時にチリ地震があった。藤の川の高台で津波の様子を見てから川井に戻ろうとしたら、国道 106 号線の茂市の鉄橋あたりの山が崩れて大きい岩が道路に落ち、通行止めになってしまった。困っていると、向こうから警察と岩手日報が走って来て、緊急だからと夫の車に乗せて宮古の警察まで送った事があった。かなり大きな岩だったので、もし走っている時に落ちてきたらどうなっていたかと思う。今度の地震では大丈夫だったので、救援でも道路が役立ったのではないかと思う。

私は、昭和 8 年 7 月の鍬ヶ崎生まれ。3 月 3 日の大津波の後なので、母親からも「津波の時は、お腹が大きくて逃げるのが大変だったよ」とよ

く聞かされた。お腹の中で体験したからだろうか、地震の時や津波と聞くと何故だか肌寒くなる。

川井出身の夫は、本当の津波を見たことがないので、藤原に住んでいてもまさかと思い、何かと言えば騒ぎだす私を“ズグナス”と言っていた。それでも私が逃げろと悲鳴を上げて引っ張るから逃げた。そうでなければ水を被ったかもしれないなと言われた。

早く逃げた私達は何も知らずに後で状況を知った。私は、何も目に入らない状態で、翌日になっても嘘だろうと言う感じだった。娘達にも「嘘なんだがね、大きい地震だったけど」と言っていた。

翌朝、夫が歩いて見に行くと、栄町の郵便局前まで泥があったようだ。末広町、中央通りには船があって、どんどんがれきがひどくなり、長靴も泥であがらなくなった。何とか自宅までたどり着いたが、とても説明出来ない状態だった。戻った夫に「母ちゃん、お前さんは行かねー方がいいよ、狂う」と言われた。

4、5 日目ぐらいに、ご近所も来ているからと私も行ってみた。泣くにも泣けない感じ。畳が一番上に浮かんで下に家具があった。毎日のように通って皆大変だった。

千葉に住む娘は、テレビを見ても連絡が出来ないし、お母さんとお父さんは死んだんだと思ったらしい。婿も会社を休んで連絡を待ち、テレビで津波の様子を見た娘は、「あれでは両親が助からないから、居ない所に行きたくない」と言っていたようだ。お母さんのことだから逃げたと思うが、お父さんが出掛けていれば待っていて逃げ遅れたかもと心配したそうだ。その娘との最初の言葉は、「生ぎったーね、生ぎったーよ」だった。

惨状を見て片付けてもダメだと思い、写真以外は諦めた。冷蔵庫だけは、斜めになっても、水が入らず中身を使う事が出来たので良かったが、自宅に通ってもただ見て黙っているだけ。解体をお願いした。

避難所や仮設住宅に行かないので、支援物資はほとんど無かった。情報も入らないし、市役所からはがきが来たのはストーブの配布だけ。家は全壊だったが、娘がいてある程度生活に困ることは無いので、何もない人に渡った方がとも思った。お金は頂いたが、遠慮もある。

ある時、避難所に入っていた方に偶然会い、何処に居るか聞かれたので「お陰さまで娘の所に行っている」と言うと、「いーね、お前さんだけ」

と開口一番言われた。「寒い思いもしないで、風呂にも入って」と言われ、知人からまさかそういう言葉が出ると思わず胸に刺さった。それから、誰かに行き会って何を言われるかなと思うと、家の外に出るのが嫌になった。そういう精神的な面でまいってしまった。

自分は、何があっても人様に対して心ないことを言わないようにしようと思った。「まるで仮設住宅は寒い」とも言われた。私達は、たまたま行く所があって行ったが、家を無くしたのは一緒なのにそこまで言われなくてもと思ったりもした。

今は、孫の世話をして助けあいながら、娘達と一緒に住んでいるが、先日、大船渡まで行ったら全然復興が進んでいない。陸前高田も本当にひどい。地震が来たらすぐ逃げる。津波が来たと気づいてから逃げては遅い。100 年に 1 回、1000 年に 1 回といってもいつ来るか保障はない。思い出したくない、忘れたいと思ってもやっぱりこれを教えておかなければならないと思う。

「訓練には、10 名ぐらい」

（上村 50 代 女性）

仕事が休みだったので、朝から佐羽根の実家に行っていた。いつもより 1 本早い列車で宮古駅に戻り、末広町で店に入った。すごい揺れで店員さんも皆外に出て騒いでいた。パニックで他人同士、手を繋いで「どうしよう、どうしよう」と騒いでいた。建物が崩れて来たら逃げ場が無いし、もう終わりだと思った。

揺れの凄さで津波とかは、全く考えなかった。揺れが収まると「さてどうしよう、バスが来ないのは確かだ」と思い、歩いて帰るしかないと思った。

末広町の裏を通り、宮古橋に着くと工事をしていた宮古橋の作業員がザワザワしていた。とにかく自宅に戻らなければという思いで、自転車を置いていた磯鶏駅まで歩いた。藤原の国道 45 号線と線路の間の道路を通り、歩く途中でもかなりの揺れを感じた。信号も止まっていた。皆が海側から線路の方に逃げる中、それを横切って磯鶏に向かった。石切場で山が崩れ、誘導していた警察官から「避難勧告が出ているので早く逃げてください！」と言われた。逃げなきゃと思いながらも、こんなに大きな津波が来るとはピンと来ず、石崎に着く頃にはお店のシャッターが閉まり誰も居なかった。磯鶏駅に停めていた自転車に乗り、急いで上村の自宅に戻った。

自宅では、義母がラジオを持って玄関に立っていた。2 人で、「どうしよう、ここは大丈夫ですよね」と言っているうちに、自宅前の線路近くまで水が流れて来ると、分団が「早く避難しろ！」と廻ってきた。それで慌てて、近くの修道場に寄り、磯鶏小学校に避難して夕方まで居た。小学校はすごい人数だったので、修道場に戻り 3 晩くらい泊った。

3 日目で上村の一部の電気が点いたので、自宅に戻ると隣の家の前まで津波が来ていた。すぐそばまでプロパンガスや丸太が流れて来ていて通れる状況では無かった。それから、皆で片付けを手伝った。

宮古駅から磯鶏駅まで 30 分以上は歩いたと思う。自転車で自宅に戻った数分後に水が来たので、ぎりぎりだった。地震直後、末広町で会った友人は、私が歩いて帰ると言っていたため、気になって数日後に安否を訪ねて来てくれた。

私は、ヨットハーバー付近で仕事中だった夫の事を心配していたが、後に磯鶏小学校で再会する事が出来た。青い顔をして、様子を聞いてもしばらく何も言わなかったが、無理やり聞いたら話しだした。

夫は、仕事中に津波に遭い、松の木に登ったそうで体中傷だらけだった。ガーッと海水が引き、慌てて松の木に登ると足元まで水が来て、生きた心地がしなかったと言っていた。黒い波が来て会社の車は皆流された。自分が使っていた車もヨットハーバーから磯鶏に流れて何処かの家の屋根の上にあがっていたそうだ。そこから免許証などを取り出したようで、自分の荷物を取っていたのに不審者だと思われたそうだ。

夫は、河南中学校出身だったので、昔、波が引く様子を見た事がある。それで、波が引くと危ないなと分かったらしい。山に向かって必死に走ったが、登っても登っても波が来たそうだ。体力があるから助かったが、高齢者や子どもなら大変だったと思う。本当に危機一髪だったようだ。

避難後に物を取りに戻った自宅では、ガラスが 2、3 個落ちて壊れていたので、スリッパを履いてカップヌードルや食べ物を確保し、暗い中手探りで 2 階から毛布を引っ張り出して来た。包む物が無く困っていたら、普段から仕切り代わりに掛けていた大きなふろしきが目に入り、それにまとめて包んだ。それ以来、枕元に電燈を置くようにして、水も準備している。

毎年 3 月には、避難訓練に参加しているが、いつも 10 人集まるぐらいだった。小学校より高い所に住む方も参加していたので、津波ではなく、地震の訓練だったのだろうか。私自身も自宅まで津波が来るとは思わず、避難用物品は準備していなかった。2010 年にも地区で市役所から津波の話があるというので、行こうか迷って初めて参加したら役員を入れて、10 人ぐらいしかいなかった。他の地区でも同じぐらいの参加状況だったようだ。

「避難場所への道のり表示」

（上村 80 代 女性）

磯鶏公民館で卓球をしていて地震に遭った。慌てて階段を降りようとしたがなかなか降りられず、落ち着いてから外に出たら、隣の文化会館の職員も外に出て騒動していた。

公民館では、ガラスも鏡も割れず、2 階に戻ると仲間が卓球台の下に逃げ込んでいた。余震が収まってから自宅まで急いで歩いた。近道を通ると 10 分ぐらいかかる。自宅に着いたら、また大きな余震が来た。ラジオを聞いて、避難しようかなと思った。警報などは聞いていない。以前から、津波警報が出ても 10、20 ㎝程度の津波ばかりで、だまされたような気がしていたので、今回もそうだろうと思ってしまった。

しばらく玄関にいると嫁が戻り、ラジオを持って避難所に向かった。ラジオの電池切れが不安なので、予備電池も持ち歩くようにした方が良いなと思った。

磯鶏小学校は満員で入られず、外で椅子に座っている状態だった。直ぐに毛布が配布されなかったので、知り合いの方から借りて外に待機していた。寒くて震えていると町内の方から修道場へ案内された。そこは、畳でストーブもあり暖かかった。

初めは、修道場も空いていたが、やがて人でいっぱいになった。お葬式用の太いろうそくを灯して過ごしたが、トイレが 1 つしかなくて大変だった。側にあった井戸で水を確保し、近所から食料を持ち寄って食べた。

修道場は避難施設になっていないので、避難者名簿に載らなかった。それで、自分達で名簿を作り小学校に知らせて安否確認になった。正式な避難施設ではないので、各自毛布も持参した。物資は、2 日後ぐらいから配布された。

磯鶏のスーパー近くに避難地図表示があり、上村公園まで 500m と地図には書いてあるが分かりにくい。途中にも表示があれば良いが、地元以外の人が見たら行き方が全く分からないので、もっと親切に案内表示を増やす方が良いと思う。避難場所を知っていても道のりが分からなければ逃げ遅れてしまうので、もっと危機感を持つべきだと思う。

「非常持ち出し品には、筆記用具も」

（磯鶏　80 代　女性）

磯鶏公民館で卓球をしていた時に地震。すごく揺れた。9 日に地震があった時は盛岡にいて知らなかったが、周りから様子を聞いて普段から準備していた貴重品バッグを前日までに点検し直していた。

揺れている最中だったが、「昔から大きな地震の後には津波が来る」と言われていた事が心の何処かにあって、家に帰らなきゃと上履きのまま走り出た。パチンコ店前の信号は止まっていた。防災無線などは聞こえなかった。普段から何を言っているか分からない。携帯電話のブザーが鳴って宮城県沖で地震と知った。

走って自宅前に戻り、揺れが一旦収まった時に中に入った。近所の方は、河南中学校や商業高校に避難しているようだった。食器棚も倒れず、2、3 枚落ちていた皿を片付けた。それからまた余震が来たので、「これは津波が来るかもしれない」と思い、リュックを持ち防寒着を着て戸締りをして中学校に向った。途中で会った近所の方にも避難所に行こうと促した。走っている途中、仙台の娘から電話が来て「今避難するところ・・・」と話す途中で切れてしまった。それで娘は、避難したのかしないのかどこに避難したのか分からなくなったようだ。

中学校前の坂には、4、50 人立っていた。側にいた町内会長さんから双眼鏡を借りて海の方を見ると船が右往左往して、堤防のすぐ下の家が曲がっていたので、もう第 1 波が来た後だったようだ。見ていたら、真っ黒い山のような波が来た。先が白くなっていた。8m の堤防なので、普段から「これを越えたら宮古は全滅だ」とよく言っていた。堤防より高い黒い山のような波が堤防に当たって波しぶきを上げていた。その後、海員学校と水産高校の間の道路を赤や青やピンクなどの物がダーッと流れてきた。1 週間前に開店したドラッグストアの品物だった。車も船も流れて校庭まで水が入って来た。

避難していると海員学校から毛布が届いた。夜は、数百人が居たと思う。河南中学校の避難所は格闘技室で畳マットが敷いてあったので良かった。その晩、おにぎり 1 個と紙コップでお汁をいただいた。市の方から食事が出たのは、2 日目の夜だったと思う。若い夫婦は、3 ヶ月の赤ち

ゃんを泣かせてはならないと交代で抱っこしていて、とても大変そうだった。横になっても寝られず、誰にとっても長い夜だったろうと思う。

翌日、雪の中を自宅に向かうとひっくり返った車が自宅前の大きなびわの木に引っかかって止まっていた。車が止まったお陰で家が壊れなかったが、畳の敷居まで濡れていた。水は出ないし、電気も点かない。一人暮らしで片付けるのは大変だったが、2 週間ほど中学校で避難生活をしながら通った。

当時、宮古病院では、軽い患者を退院させたので、退院して間もない避難者が急変したら、どうするかが問題になった。誰が連れていくのかなどを確認し合い、お互いに助けあいだなと感じた。

避難後に残念だと思ったのは、筆記用具をリュックに入れなかったこと。避難所で何日目かに電気が点いて、皆で立ち上がって拍手をした。それが何日目だったのか書き留めておけば良かったと思う。新聞も何日目に来たのか覚えていない。それから避難持ち出し品には、筆記用具を必ず入れるようにした。ウエットティッシュも必要だ。もう 1 つ残念なのは、避難者名簿を作る時、確かに自分の名前を書いたが、誰かが変換する時に〇子としたため、孫や子どもが探すのに苦労した事。

今回命が助かった事だけで、何もいらないなと思うようになった。今でも物を新しく買おうと思わない。ある物を使い、集めないようにしようという気持ちだ。

今 30 代になる孫が、子どもの頃植えたびわの苗木を私がもらって庭に植えていた。十数年で実が 1 個なり、翌年 3 個実がなった。それから、なるなる、何百個となった。近所にも分けて、孫や妹にも送っていた。多分、このびわが北限ではないかと思う。その木が 15 センチ径ぐらいまで大きくなって、私の家を守ってくれた。津波後に枝を払って芽吹くのを待っていたが、塩水の影響で幹が裂けてきたので、この間切ってもらった。生垣も無くなり、庭が淋しくなった。

「ここに津波が来るくらいなら宮古は無くなる」

（神林　80 代　女性）

警察署近くの自宅に 1 人で居た時地震。揺れている間のことは覚えていない。

堤防の上の人達が「津波だ、逃げろ！神社に上がれ！」と叫んだ。見ると堤防の上に船が浮かんでいて驚いた。着の身着のままで神林の神社に向かい、階段を 3 段ぐらい登った時に「バリバリバリ！」というすごい音が聞こえて、「はあ、終わりだな」と思った。神社の裾まで波が来ていたので「危ないから商業高校に行け」と言われた。高校に向かい一晩そこに居て、翌日から妹宅に 3 ヵ月世話になった。

神社に上がった時にはケガをした人も居て、とても見られる状態ではなかった。全身血だらけでどこの誰だろうと思い、パンツだけ履いている姿は、とてもかわいそうだった。

自分ではあまり逃げる気が無かった。昔から「ここに津波が来るくらいなら宮古は無くなる」と言われていたから。神社を避難場所にしていたわけでもなかったが、声を掛けられたので慌てて逃げた。神社の階段は急で登るのがとても大変だった。

「印象は波がピチャッと来るぐらい」

（高浜　70 代　女性）

花輪から大根を届けに来た姪と自宅で話をしていると地震。私は足が不自由なので、姪に戸を開けてもらい一緒に庭に出た。そこは車庫の上のコンクリートなので割れるかもしれないと思い、近くの空き地まで這って行った。家が崩れたらここに居ても下敷きになると思い、とても不安だった。自宅周辺は岩盤であまり揺れない所なので、他はもっと揺れたと思う。

寒かったので、揺れが収まってから姪にシートやダウンを持って来てもらった。ストーブも消すように頼んだが、既に停電で消えていたようだ。今回皆がえらいと思ったのは、「この地震では津波が来る」と判断した方が多いと聞いたこと。テレビで放送される体験談を見聞きしても、皆さんえらいと思った。

夫は下校つきそいのため、高浜小学校に行っていたので心配だった。外で聞いた放送は「大津波が来ます、大津波が来ます」とゆっくりした放送で緊迫感がなく、はっきりは聞こえたが 1、2 回しかサイレンが鳴らなかったような気がする。放送の印象としては、波がピチャッと来るぐらいにしか感じなかった。

去年のチリ津波の時の放送は、今回とは違って怖かった。サイレンがガンガン鳴って「津波が来ます！津波が来ます！」と聞こえ、これは座っていられない、逃げなくてはと感じた。

今回の地震で、姪は何度も携帯で私の夫に地震を教えようとしていた。「この地震なら誰でもわかるので教えなくてもいい」と言ったが、姪もパニックになっていたのだと思う。防災放送が聞こえたので、姪に「急いで行って！」と家に帰した。その後夫が戻り、山沿いに児童を避難させたことを聞いた。5，6 分後に津波が来たようだ。地区の指定避難所は自宅より下の公園なので、私は訓練に 1 回も出たことはない。あの日は下から来た 20 人位が避難しており、車も 30 台程並んで通れないくらいだった。

海を見ると工事用の台船が引き波でサーッと流れていくのを見た。あんな重いものが笹船のようだった。「来た来た！越えた、堤防越えた！」という声や避難している人達の悲鳴のような何とも言えない声がした。

忘れられない声だった。この辺りは春になると海の色が青くなる。とてもきれいな色。その色の波頭がレースのように白かった。それが堤防を越えてザ―ッ！と来たのが見えた。ここまでは絶対来ないと思い、大惨事が起きたとも全く思わなかった。

しばらくして、夫が近所の方を避難させて来た。停電なので反射式ストーブを使い、食料は買物に行く前でほとんど何もないので、近所の方が持ってきたカンパンと小さいおにぎり 2 個、自宅にあった 2ℓのペットボトル飲料 1 本を 4 人で分け合った。水には限りがあるので、薬を飲むにも苦労した。ろうそくを灯し、これまで一面識もない方達と一晩過ごした。何が起きるかわからないので寝るわけにはいかないなと思い、カギもかけなかった。怖いし、寒いしとても寝られなかった。翌朝は、家中からかき集めたバナナとりんごを分けあい食べた。

翌日、知人がずぶ濡れになって「助けてくれ」とやって来た。水門の近くの家の方だったが、自宅を見に行く途中で水たまりに全身はまってしまったらしい。着替えさせると、ブルブル震えてストーブに抱きついた。その方はもらってきたばかりの薬を缶に入れていたため、浮かんで発見できたと話していた。

親戚も避難してきたのでお互いに服や下着を分けあい、米はあっても水が出ないので困ったが、この辺りには使える沢水や井戸があったので十分確保できた。

15 日に隣から借りた新聞を初めて読んだ。それで初めて様子が分かった。ラジオでは大船渡で遺体がある所に赤い布をつけた棒を立ててあると話していて、そんなに人が亡くなったのかと思った。尋ね人ばかり放送するので聴いていなかったら、隣の人から娘が探しているようだと聞いて驚き、振興局の電話に並んでやっと連絡を取ることが出来た。

「裏山を歩いて道を覚えていた」

（高浜　80 代　男性）

学校支援隊で児童の下校つきそいのため高浜小学校に行き、校長先生と話をしていたら地震にあった。普段妻から津波のことを聞いていたので、地震直後に「津波が来る！」とひらめいた。それで「児童を外に出せ！校庭の真ん中に出せ！」と叫んだ。

校庭まで波は来ないと思ったが、更に上の老人福祉センターに避難するように指示した。ただ、二通り道があるので「絶対下に降りるな、一番無難なのは、学校の裏山に逃げるのがいいと思う」と伝え、急いで帰宅した。あの時、自分が児童を引き連れて歩いていたら津波で全滅だったと思う。あと 5 分も違えば危なかったかもしれない。児童は裏山で助かったそうだ。校庭で津波にあった高齢者もあったという。学校では、津波という意識は薄かったようだ。

普段から家族で、時々津波の話をしている方がいいと思う。妻はチリ地震で津波に遭い、寝巻だけで山に上がったら家が波に飲まれた。

私は定年後に退屈なので、裏山を歩いて道を覚えていた。避難所を決めても、そこに行く道を教えておかなければならない。高浜から山を越えて八木沢の短期大学に抜ける道がある。近所の方が「河南小学校に孫がいて会えない」と言うので案内して歩いた。他の人も案内して、1 日 5 往復することもあった。

しばらくして、避難所などから食料を調達したが、あんな時は人を変える。皆、人を疑う。近所の盲目の方や体の不自由な方に配るために食事を運んでいたが、それを見た人に多く食料を持って行くと言われたりもした。親戚に物を運ぶために何度も山道を歩いて通っていたが、心ない噂に一時は怖い思いをした。

「長い揺れで津波が来る予感」

（金浜　70 代　女性）

自宅で昼食後、一休みしていたら地震。心配で家から出たり入ったりしていたが、揺れがとても長かったので津波が来るような予感がした。一緒に居た孫から「逃げよう！」と言われたので 2 人で逃げた。

防災無線から「宮古地方に 20 ㎝の津波が来ました」と聞こえたが、それ以上の波が来るだろうと思った。バッグ 1 つとラジオ、コートを持ち、いつも避難する高浜小学校に歩いて向かった。小学校には歩いて 5 分もあれば着く。その時はこんなに大きい津波が来るとは思わず、直ぐに戻れると考えていた。

金浜の避難所は、江山寺の上と高浜小学校になっている。これまでにも避難訓練はあったが参加したことはなかった。自分なりに逃げる所を決めてはいたが、まさか津波がこんなに大きいものとは思わなかった。

逃げている最中はその後の無線放送を聞いていない。小学校に着く前の小高い所で立ち止まり、孫は家が波に押され、土埃を立ててどんどん上がってゆくのを見て泣いていた。

校庭にも沢山人が居た。児童は、裏山に登ったという。津波は国道 45 号線まで上がり、消防団から「もう少し上がれー！」と言われたので更に上まで上がった。分団の方から「老人福祉センターに入ってください」と指示があり、行ってみると人がいっぱいだった。その夜から 1 ヵ月くらいそこに居た。その日は、一度も自宅方面に戻ることは無かった。

翌日、金浜の温泉施設から布団などを持った従業員らが避難してきた。避難所では、12 日のお昼頃にご飯が出た。水は近所にきれいな沢水が出る所があったので順番に汲んだ。古い家の井戸水もあり、お陰で助かった。

「物に名前を書いていた」

（金浜　70 代　女性）

自宅に 1 人で居て地震。階段の辺りにいて、余震の度に外に出たり中に入ったりしていた。その間に時計やラジオ、薬などを持ち出し、ご先祖様も背負って外に出た。それから自宅近くの昔避難所としていた高台の畑に向かい、親戚らと 5 人で居た。

上から見る波は黒かった。2 回目の波が堤防を越えたのでこの畑まで来ると思い、皆で走り上がったが 3 人遅れて亡くなった。そのうちの 1 人だと思うが、「おーい、おーい、おーい」と 3 回叫ぶ声が聞こえた。波が線路まで来ると思い、逃げるのに手いっぱいで、後を見る事が出来ず上の山に走り登った。そして宮古道路に出て、階段を登り線路に上がった。私は道路にある階段の場所を知っていたが、親戚は知らなかったと思う。道路の階段がもう少し下にあれば皆が助かったかも知れない。

宮古道路に立っていると、どこのトラックか分からないが、避難していた皆を花輪まで運んでくれた。3 往復したそうで、ガソリンが無い時なのに知らない人が乗せてくれて本当にありがたかった。花輪の鉄鋼場に連れていかれ、そこでは本当に良くしていただいた。

私は、昔津波にあった方から物に名前を書いておけば良いと聞いていたので、鍋釜や指輪など家の物ほとんどに名前を書いていた。それで見つけた方が持って来てくれた。昔の銭やべっこうのかんざしなどビニール袋に入れていた物も濡れずに戻って来た。

逃げる時に聞こえた親戚の声が何ヶ月も耳を離れなかった。食欲も無く、すっかり痩せてしまい、2 ヶ月経った頃にお茶などを持ち拝んできた。

当時、宮古道路には金網が張られ、入られないようになっていた。それで皆上がれなかったようで、避難道路としての機能は不足していたように思う。後からお寺の近くの金網を誰かが切って入れるようにしたようだ。そこから道路に避難した方もある。

「津波のことは全く頭に無い」

（金浜　70 代　女性）

山と麓に 2 軒自宅があり、山にある明治に建てた古い家に居る時に地震。電信柱が動き、周りの木も倒れそうなすごい揺れだった。ガラスの木戸はなかなか開かず、ようやく外に出た。揺れが落ち着いた頃、食料や水などを持ち先祖代々の物を取りに麓の家に下った。その時は、倒れた物で道路が塞がっては大変だとばかり考えて、津波のことは全く頭に無かった。

途中で高台に避難する知人に会い、少し話をしてそのまま下ったので、すれちがった方は、後で私を心配したらしい。江山寺の入口で「はてどっちを廻ろうか、国道に出ようか？」と迷っているうちに波が堤防を越えるのを見た。船が乗った黒い波がガッパリ口を開けて、知り合いの家々を飲み込んだ。見ているとお寺の鐘つき堂が倒れて、これはだめだと思い、歩いたのか這ったのか、お寺の観音様の後に上がって見たら下が海になっていた。すごかった。

本堂には車が突っ込み、驚いて腰が抜けて骨堂に座り込んでしまった。お寺の位牌堂の 2 段目ぐらいまで波が来たようだ。近くにいた男性は「何が起きたか」と男泣きに泣いていた。骨堂裏から道路に上がり、麓の家に居るはずの夫を待っていたがとうとう登ってこなかった。その時は麓の新しい家はちゃんと建っていた。

しばらくして、親切なトラックの方に乗せられて花輪の鉄鋼場に降ろされ、夜中に消防署の車で花輪伝承館に連れて行かれた。寒かったが、地元の方が野菜や味噌など沢山持ちより炊き出ししてくれてありがたかった。あの夜は胸がいっぱいで食べられなかったが、感謝している。

翌日、何処を探しても夫がいなくて、家は道路の方に動き横転して 2 階が自動車の上に上がっていた。堤防が崩れた後から来た波が大きかったのかもしれない。あの黒い波は、今も頭から離れない。

「避難しないと決めた」

（金浜　70 代　女性）

自宅で地震。一緒にいた夫は 2 度脳血栓を患ったため、右半身に後遺症が残り不自由であった。

私は先ず戸を開け、夫に「宮古に来てこんなに長い地震は初めてだ」と喋りながら、家から出たり入ったりしていた。横になっていた夫は起き上がろうとせず、「お父さん、皆が逃げたようだから逃げよう！」と言っても返事をしない。3、4 回言っても何も言わない。

夫は普段から「俺はこんな病気になって生きていても何も良いことが無い」と言い、私はその度に「そんなことはない、今はこんな病気が多いのだから自分だけじゃないんだよ。」と励ましていた。そのことを思い出し、夫は多分家と一緒に逝く気だなと感じた。

何も言わずに横になっているので私は考えた。その時、70 までも生きたし、一人寝ている夫をここに置いて自分だけ命があっても生き地獄だと思った。目に焼き付いてきっと命があるよりも辛いだろうと思った。短い時間に決断しなければならなかった。「よし、夫と一緒に逝こう」と決めた。死のうと思ったから、荷物を持つ必要もなく、何にも手をかけずに炬燵に入っていた。

周りはどんどん車で逃げる様子で、私達夫婦だけがポツンと残ったような感じだった。「どんな形で波が来るのかな、波に家が浮かんで段々水が入って来て沈んでいくのか、それもいいか」と思っていた。

その日は、たまたま病院の帰りだったので波が来るのを待ちながら、たくさんある薬をもう飲む薬でもないだろうと思いながら袋に入れていた。すると、宮古橋付近で仕事をしていた孫が吹っ飛んできた。「何やってるんだ！多分こうだと思った。逃げていないだろうと思ったら本当に居た！」。

私が気づいたら、夫は既に助手席に乗せられていた。急な展開で私の気持ちは元に戻れず真っ白で、何だろう何であそこに座っているのかという気持ちだった。「何やってる、もう津波がそこまで来てるんだから早く乗れ！」と言われたがそれでも理解できなかった。切り替えがきかないものだ。それからああ逃げるのかと思ったが、孫があれこれ持って来

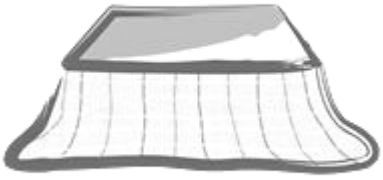
いと言っても手に着かなかった。ただ、孫が小学生の時に高浜小学校に避難して、朝まで泊って寒かった事を思い出して毛布を２つ車に投げ込んだ。

孫に乗せられて老人福祉センターに行く途中で何故か降ろされた。高浜小学校とセンターのどちらに行くか迷っている車や人で道路がごった返しだったため、孫は「交通整理をしてくる！」と行ってしまった。それで、夫とセンターに歩いて向かうと「更に上の山に上がって下さい」と言われた。急階段で大変だったが若い人の助けもあって何とか上がった。座布団 1 枚ずつと毛布を頂いたが夫は弱っているのでこのまま朝までもつだろうかと思った。寒さで震えながら、朝 5 時ごろにやっとセンターの部屋に入れるようになった。

3 ヵ月センターにいたが、最初の夜は大変だった。小学生も先生が責任を持って一晩預かりますということで全員避難していた。満員でトイレに行くにも人の頭を踏まないように、明かりがまぶしくないようにと気を使った。沢山ストーブを焚いていただいたので寒くはなかった。

以前から夫の身体のこともあり、私たちは足手まといになるのではと思っていた。でも、後で知った事だが、2 日前の少し長い地震の時も、孫は私の留守中に夫の様子を見に戻っていたらしい。普段から孫と地震や津波のことを話してはいなかったが、小学生の頃に避難した経験を覚えていたのだと思う。孫は私達の事を見ていて多分逃げていないのではと思ったようだ。赤ん坊から育てた孫なので、とにかく私達を死なせてはならないという意識があったのかも知れない。孫は宮古橋から車で飛ばして八木沢を通って帰宅したそうだ。逃げた数分後に自宅は津波に飲まれた。屋根だけが国道の方に掛かっていた。

落ち着いてから自宅を見に行ったら基礎だけしかなかった。「何これ」と言ったきり言葉も出ない。涙もでない。どう考えたらいいのかわからず、どこにいったのか？と思うだけだった。



「津波を見た事がないから見よう」

（金浜　60 代　女性）

天気が良かったので午後から宮古の街に行こうと思っていたが、娘に「今からでは帰りも遅くなるし、明日という日があるでしょ」と言われたので、やり残していた雪かきをした後に昼寝をしていた。下からの揺れを感じて地震だなと思った。私の家はあまり揺れなくて冷蔵庫の上の紙袋が 1 枚落ちただけだった。

余震があるのでテレビを押さえながら、妹と娘と 3 人で炬燵に入っていた。その時、誰かに声を掛けられたような気がしたので外に出たが誰もいなかった。すると前の家の奥さんだったようで、「これ、逃げねえすか」と声掛けに来た。それでこれは津波が来るから逃げようと思ったが、妹は「ここまで来ないよ」と言って逃げようとしなかった。

呼びに来た奥さんが「津波を見た事が無いからそこに上がって見よう」と言うので、一緒に線路に上がり海を見ていると藤の川の方に黒い波が見えた。誰かに「津波が来た！降りろ！」と言われ、妹を 1 人残していたのが気にかかり家に向かった。

途中で転んだりしたが何とか家に着き、「津波が来たから逃げよう！」と言うと妹は「それなら逃げようかぁ」という調子だった。バタめかず、腰が抜けたのかもしれない。そうして 2 人で走ったが、途中でまた転んでしまった。そうこうしているうちに後を見たら、波が線路を越えていた。私は急いで走ったが、首まで水に浸かりようやく何かに掴まった。でも、妹は帰らぬ人になってしまった。体格も良かったので逃げ遅れたのだろう。

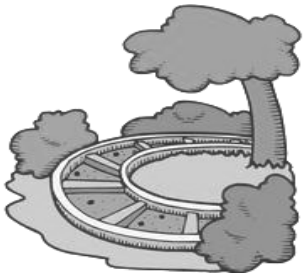
やがて波が引いたので、「あー自分は助かるなー」と思った。おそらく足が土に着いていたのだと思う。そうでなければひき波で流されただろう。

上で見ていた人達は、２人とも流されたと思ったそうだ。水に浸かりながら後を見ると自宅が動き出していたので、「妹は流されたし、家も終わりだな」と落ち込んだ。

その晩は、高台の家から服を借りて泊らせていただいた。翌朝、避難所に行くために下ると辺りががれきで歩けなかった。浜仕事をしている人達のロープを使って線路に行き、1 時間かけて老人福祉センターに向か

った。チリ地震も経験したが、これほどではなかった。あの時は、1ヵ月もしないうちに家を建てて良いと言われて再建した。

今回私は、あまり揺れを感じなかったので、近所から声を掛けられなければ家に居たと思う。津波が線路を越えるとは思わず、波を見ようと井戸端会議をした事も時間ロスだった。そのまま上に逃げれば良かったが、妹を1人残すわけにもいかないと思い自宅に戻ってしまった。



「孫らに助けられた」

（金浜　70代　女性）

自宅で地震。外に出たりしていたが、2人の孫を迎えに夫と高浜小学校に向かった。地震直後、何か物を取りに家に入ろうとしたら夫に「命と孫が大事だ！」と言われたので何も持たずに車に乗ると、夫はいつの間にか家に入ってたばこを持って来ていた。やはり地震が大きいので大きな津波が来るかもしれないとは思っていた。

小学校に着くと学校から「今日は児童を帰しません」と言われた。どうしようかと思ったが、「老人福祉センターに上がりなさい」と聞いたので上に避難した。

自宅は津波に遭ったが、車は水に濡れずに助かった。老人福祉センターから見ていたら真っ黒い波が見えた。

孫を迎えに行ったのが良かったと思う。家を出る時は、孫を自宅に連れ帰らなければという気持ちだけで行った。今でも夫と「孫らに助けられたな」と話している。

「津波が引いた後に黄土色のもや」

（金浜　60 代　女性）

夫、次女と 3 人で自宅にいると地震。夫に「地震だ、逃げろ！」と言われたが「大丈夫、津波は来ないから行かなくてもいいよ」と家の中に居た。すると夫に「小馬鹿もの、何してんだ！逃げろ！」と怒られたので、準備をしに 2 階に上がるとテレビが落ちていた。仕事が休みだった娘に「大きな津波が来るかも知れないし、どうなるかわからないから着替えして」と言い、逃げる前に台所のドアを開けた。夫もガスを止めて一緒に近くの江山寺に上がった。貴重品は全部持って逃げたが、こんなに大きな津波が来るとは思っていなかった。

お寺の人が「水が引いた！引いた！」と言うので、見に行こうとお墓に上がった。間もなく、「あー堤防を波が越えた！」と言う声がして、ゴーゴー、バリバリという音とともに一瞬のうちに何も無くなった。泣きながら「家が！家が！」と騒いで半狂乱になった私をどうしたらいいか困ったと後で娘に言われた。

お墓を通って三陸縦貫道に向かうと、そこに運良く宅急便の車が居て、松山の中三機械まで乗せられた後、分団の車で花輪の伝承館に案内された。三陸縦貫道があったお陰ですぐに花輪方面に逃げる事が出来たのは良かった。猫も 2 匹かごに入れて連れ歩き、避難所には置けないので困っていたら太田の動物病院で 80 日ぐらい無料で預かってくれた。本当に助かった。

自宅が流される前、長女が市内の会社から車で自宅に駆け付けた。途中で知らないおばあさんを乗せて逃げ、後から感謝されたらしいが、混乱で記憶にないようだ。自宅に駆け付けると次女が「大丈夫、来ないよ」とのんびり歩いていたので、「何やってる！早く歩け！」と怒ったようだ。

防災放送は、わからない。家族の車をお寺に上げたがそこも波に飲まれてしまった。ただ、家族 4 人とも怪我無く無事に助かった事は良かった。

津波が引いた後、何もない所に土埃なのか煙なのか黄土色の「もや」が水蒸気みたいにあがってすごかった。塩の煙なのか。金浜老人福祉センターから見た人もいるようだ。

以前、自治会から避難場所は高浜小学校だと言われて、高齢者は間に

合わないからお寺じゃないかと意見したことがある。今思うと浜どころにいるので、もう少し避難場所について確認しておくべきだったと思う。

八王子にいる妹に連絡が取れないので、次女が災害伝言ダイヤルに「車も家も無くなった」と載せたら、それを姪が見てわかったらしい。当時は電話も通じないし、情報がなくて本当に困った。

震災後、川崎から来てくれた娘の友人からは、「すごいね、テレビで見る以上だ、頑張れとは言えない」と言われた。

「入り口が１ヶ所だった」

（金浜　80 代　女性）

地震の時は自宅に居た。かなりの揺れでテーブルに掴まったまま動けなかった。天気が良くて昼寝の後に干していた洗濯ものをたたもうとしていたら地震だった。落ち着いてから、また洗濯ものをたたみ直した。いつもなら、そこら辺に置いておくのだが、その日はなぜか箪笥に片付けた。

「大きい津波が来るから高い所に早く逃げなさい」と放送があったので娘と義姉と 3 人で車に乗った。後の放送は、ぷっつり消えた。

夫は、家の前で作業をしていたので放送を聞くとすぐに自宅後ろの高台の畑に上がっていた。私が外に出て避難する時に上に居る夫に「高浜小学校に行くべす！」と騒いだが聞こえなかったようだ。高台にいるので大丈夫だなと思って、置いて逃げたがそのまま亡くなってしまった。まさかあの高さまで波が来るとは思わなかった。

車で高浜小学校の校庭に上がり、沖を見ているとあさり掘りする時のように海に水が無くなっていた。私は、まさかこんな津波が来るとも思わず、「あさり堀りが出来るなぁ」と言った。そうしているうちにいつもの波が来た。あら、きれいな水だなと思っていると、次に来たのが真っ黒い泥水と何処を通って来た波なのか、がれきが混ざっている波が来た。家が流れて皆パラパラに壊れていた。「あー流れた、流れた！」と言っているうちにやはり校庭にまで波が来た。

娘は先に山に上がっていて、私は直ぐに逃げる事が出来ず、どうしようも無かった。波がひざまで来る中、91 歳になる義姉を連れて逃げた。辺りの人から「走れー！走れー！」と言われたが、高齢の姉を連れて逃げるのは大変だった。本当に心細かった。ようやく引っ張って歩いていたら途中で転んでしまった。起こそうとしたら波が来て倒され、老人福祉センターの山にぶつかった波の勢いでまた反対側に倒れてすっかり頭からびしょ濡れになった。姉とはずっと手を繋いで、波で転んだ時も水を飲まないように口や鼻を押さえていた。

学校の校庭には、沢山の車が来ていたのに辺りを見たらそれまであった車や人が誰も居なくなっていた。騒いでも何も聞こえなかった。児童も校庭の端に丸くなっていたが、先生の一声で山に上がったようだ。2 人

だけ残って「あー終わりだな」と思ったら力が抜けて全然動けなかった。

後日、「あんな時には、親も子も無い、命はてんでんこなのによく 91 歳になる人を引っ張って歩いた」と皆に言われた。

しばらくして、上の方から若い人達が 2 人水を漕いで走って来た。姉を引きずって山に上げてもらった。自分もそのまま山に上がり、又波が来るかと思い、暗くなるまで山にいた。下着や布団を借りて姉を寝かせたが、私も体中濡れて寒かったので、一晩寝ないで過ごした。

翌日、老人福祉センターに行ったが、何も無くて座布団 3 枚ぐらいを敷いて寝ていた。こたつ布団 1 枚を 10 人ばかりで使い、翌日にみかんやおにぎりを半分ずつ頂いた。

夜明け頃、気になってがれきを乗り越えて自宅を見に行ったが、何も無くてがっかりして腰が抜けてしまった。どうやって生きて行こうかと思った。

私は、夫も花輪伝承館の方に皆と避難しているものと思い、夫が亡くなっていた事を 4 日間知らないでいた。いつも津波警報では、夫が逃げた自宅裏の高台に上がっていたが、そこで夫と近所のおばあさんら 3 人が亡くなった。普段からおばあさんらも杖をついてそこに避難していた。線路に上がれば助かるが、宮古道路に柵が出来たので、行くことが出来なかった。1 か所しか入口が無かった。夫はそこの入口で亡くなっていた。本当に頑張ったと思う、口を噛みしめた状態だった。戦争で助かり家に戻ったのに津波で亡くなってしまい残念だ。

「中国で日本の東北に 3m の大津波」

（金浜　70 代　女性）

大きな地震が来て、「これは大変だなぁ、でもなぁ」と思っているうちに揺れが収まった。近所の方 3 人で「地震が大きいから、ガスの元栓だけは閉めよう」と閉めた。

しばらくしてまた余震が来た。2 回目の揺れで電気が消えたと思う。階段の入口にある電話も停電で通じないなと思っているといつもと違う音で電話が鳴った。あれ電話かなと受話器を取ると、中国にいた次男から「お母さん！中国で日本の東北に 3mの大きな津波が来ると言っているから早く逃げろ！」と言われた。中国では騒動だと言う。「何で中国でそんな事わかるの？」と言うと「中国では大きな津波だと騒いでいるよ！」と言われたが、「3mといっても堤防もあるし」と思っていた。

息子に逃げろと言われたので、救急リュックを取りに 2 階に上がろうとしたが、揺れでなかなか上がれなかった。この揺れでは、本当に津波が来るかも知れないと思い、通帳や印鑑などを入れたバッグを持ち、孫に会った時のためにと仏壇の前で先祖代々の物は持たずにおやつだけリュックに入れた。なるべく厚着をして、そばにあった綿入れを持って近所に声を掛けたらもう誰も居なかった。これでは大変と慌てていたら、外では長男が会社から戻ってのんきに車を洗っていた。私が逃げる時に洗い上げていたので「津波が来るというから逃げよう！」と言うと、「寒いから着替えするので、待って」と家の中に入ってしまった。私は、待っても居られないと思い、逃げたのが良かった。息子は、体力があるので、波が来ると柵を越えて真っすぐ三陸縦貫道に上がっていた。危なく波に追いつかれる所だったそうだ。

私が逃げる途中で、上に避難している人達が騒いでいた。何で騒いでいるんだろうと思いながら、ゆっくり歩いていると「来たよ！来たよ！早く逃げなさい！」と言うので後も見ないでそのまま上がった。後を見たら、家が無かった。息子も津波に流されただろうと思った。

柵を越えた息子は、材木と一緒に手を上げて流れて来た男性の腕をつかまえて助けたそうだ。とても大変で、離そうかとも思ったらしいが、助けてやれば良かったと後で後悔すると思い、何とか引き上げたそうだ。その人は立てなかったが、すぐにその男性の会社の車が来て、宮古病院

に運んだ。内臓破裂だったが、盛岡の病院で助かったそうだ。その方は、とても喜んで、後日息子の会社にお礼に来たという。

長男は、私に「待って」と言った事がとても心配になったらしい。流されただろうと思っていたので、道路の上で再会してお互いに喜んだ。

近所の夫婦も 2 階に上がったまま家と一緒に流れてきた。そして 1 回目の波が引けた後、窓から顔が出たので、「だめ、だめ、後 1 回大きな波が来るから早く上がれ！」と息子が声を掛けた。ずぶ濡れだったが、2 人とも引き上げて助かった。それから道路にいた保冷車で花輪まで乗せられた。私は、厚着をしていたので、濡れたご夫婦に着るものを分けた。花輪の中三機械でしばらく暖を取り、伝承館に避難した。

当初、伝承館には 100 名ぐらいいたようだ。停電、断水なため、津波被害の無い方も来ていた。

地域の方が、発電機で灯りを点け、ストーブも 3 か所焚いてくれた。夜ご飯も出してくれ、野菜や米、手作りのみそ、梅干しなど、たくさん持ち寄って 3 日間炊き出ししてくれた。そのうち、当番を決めて自分達で自炊するようになったが、伝承館の管理人さんは、様子を見に毎日来てくれた。炊飯器も洗濯機も提供してくれた。水も地下水を運び、トイレにも使うことが出来た。本当にありがたかった。花輪の方々に本当にお世話になった。

今年の 5 月には伝承館で交流会をしてお礼をすることが出来た。本当に感謝している。

「泥の中から見つけた自分の物」

（金浜　70 代　女性）

金浜の自宅に 1 人で居て地震。表に出ると、2 回目の揺れで戸が勝手に開きだしたので、こんなに力があるのだなと驚いた。余震が続いていたが、家の中に入り戸のカギを掛け、腕輪、時計などを取り出した。高い所に置いていた鉢植えが落ち、絨毯が土だらけになったのを見て、帰ってきて掃除するのが嫌だなと思い、隣の部屋の鏡台を割れないように下に伏せた。

印鑑も持ち出したが、後で再会した娘に「お父さんの位牌よりもお母さんには印鑑が大事なの」と言われて今でもそれがせつない。月日が経つと冗談に変わったがその時はとても胸が痛かった。戻れると思っての行動だったので、いくら親子でもドキッとした。

3 月 3 日の避難訓練には毎年参加していた。大きな避難リュックには、袋を 3 つ、はおれるもの、懐中電灯、サンダルを入れていた。その他、野宿なら寒さが大変だと思い、綿入れとコートを持って外に出た。家を出た時、放送で「3m の津波が来る」と聞いたので、「金浜の堤防は 5，6m だから戻れる」と思った。一緒に避難しに来た知り合いは薄着だったので、「もっと厚い服を持って来て」と一旦帰した後、一緒にいつもの避難所である金浜の江山寺の後ろに行った。そこには 5、6 人ぐらいは来ていた。

疲れたのでその場に腰を下ろしていると、真っ黒い津波が見えた。津軽石と赤前の堤防を何倍もの高さで越えて、テレビや記録映画でも見ているような感じだった。そうしているうちにバリバリと板が倒れる時のような音がして、見下ろすと自宅に 2、30 ㎝水が入ったなと思ったらすぐに倒れた。津波は勢いがある。「ここに居ても危ないからもっと上に逃げよう！」と言う声がしたので一緒に逃げた。上の線路や道路に行くには、お寺を降りて少し下に下がらなければならず、私達が宮古道路に移動した後、通った道に屋根が流れて来ていたので危機一髪だった。

道路に立っていると、ずぶ濡れのスーツを着た男の人が半泣きで線路を歩いて来た。その方は、自動車で津波に遭い、車ごと線路の法面に上がったので、「今だ！」と車から降りたそうだ。言葉の感じから、この辺の方ではないようで、次の駅まで歩く途中だった。私達は、宮古の鉄橋

が壊れている事も知らず、線路伝いに行けば大丈夫だろうとそのまま分かれてしまったので今も気がかりだ。

娘は、職場から被害のない道路を通り、線路を歩いて私を捜しに来てくれてそこで再会した。その後、道路に運良くいた宅急便のトラックに乗せられ、本当にあの時は涙が出るくらいうれしかった。15、6 人を乗せたトラックは、花輪の中三機械で降ろしてくれた。皆さんとても震えていたので、停電でも発電機でヒーターを点けてくれた。トイレも水が出るようにしてくれ、本当にありがたかった。

2 時間ぐらい世話になり、消防の自動車で伝承館に移動した。畳の部屋でストーブもあり、自治会や婦人会の方々が、温かいうどんとおむすびを出してくれた。今までで 1 番のごちそうだと思った。野菜、お米、梅干しなどの差し入れや見ず知らずの私達にお風呂を貸してくれる方もあって、本当に感謝している。

避難した数日後、金浜に行ってみると自宅は元の場所には無かった。捜しまわり、それらしいものを見つけたが、家は 8 か所ぐらいに分散していた。屋根の上を歩くと足が滑り、自衛隊の方がパッと来て後と前に着いてくれた。素手で雪に手を着いたら手袋までくれて、ありがたかった。縦になっていた自動車の上に見覚えのある宝石箱が載っていた。何とかよじ登り、下に落とすと水で木が膨張して開かなかったが、こじ開けると中から自分の物が出て来た。もう、うれしくて。高価な物ではないが、今見ても自分の物があっただけで可愛い。

金浜には、2，3 日おきに娘と 5 回ぐらい通った。着る物も少し持ち帰り、サイズが合わなくても可愛いので持っている。自衛隊から頂いた手袋も今でも大事に持っている。家族は、皆元気なので良かったと思うことにしている。

その後、徐々に仮設住宅への移動が始まり、最後まで残った 7，8 人のグループは、金浜老人福祉センターに移ることになった。花輪には、80 日間、金浜老人福祉センターには、20 日間ぐらいお世話になった。センターに移ると当番で川井から来ていたらしい職員の方は、精神的にも辛かった私達を気遣い、色々と話を聞いてくれて、本当に助けていただいた。

以前通っていた公民館のサークルに通い始めたのは、津波に遭って半年後ぐらい。仮設住宅に居ると、当初は福祉協議会や警察、保健師など

毎日巡回があり、サークルの皆さんに会うのも気が引けるような気がしていた。そんな時、仲間が食事会を開いてくれて、その数ヵ月後ぐらいからまた公民館に通いだした。

今回のことで、人の好意のありがたさを感じた。自分は阪神や新潟の災害を人事のように見ていたので、今引け目を感じている。チリや三陸大津波の時は、何も支援が無かったというので、今は本当にありがたい。

現在、八木沢の仮設住宅に入り、ここの生活が気に入っている。八木沢自治会や楽書倶楽部（書道）の皆さんにも良くしていただいて、本当に感謝している。

「絶対堤防を越えないと思った」

（金浜　50 代　女性）

午前中に友人と会い、帰宅後に地震。家の中の物を押さえながら揺れが落ち着いた時に外に出て道を下った。近所の奥さんには「何、この間も波が来ないから逃げなくても良いが」と言われた。

私の周りの家は、日中 1 人で過ごす人が 4、5 人居る。普段から交流があったので、さっきの地震で皆が腰を抜かしているだろうなと思い全員に声を掛けた。自宅に戻る途中で知り合いのおばあさんに声を掛けると「おめさんに声掛けられて良かったが」と出て来て、別のおばあさんと世間話が始まった。私は「寒いから家に戻るね」と言い、上着を取って家の前の道路に上がったら、津波がダダダーッ！と来て「あれ、何？」と言う感じだった。だから堤防を越えてくる津波を見ていない。その前に近所の方が家の前を車で逃げて来たので「何で逃げて来たのかな？」と思っていたら、その後波がワーッと来た。

いつも「自宅に津波が来たら全滅だ」と言われていたし、自宅はわりと高台にあったので逃げるつもりはなかった。下に留まっていれば私も流されたと思う。おばあさん 2 人は亡くなった。5 人ぐらいに声を掛けたが 1 人だけ助かり、後は皆だめだった。

「3mの津波」という放送は聞こえたが、3mは絶対越えないと思っていた。だから「何これ？」と言う感じで状況が飲み込めなかった。堤防が 4mなので絶対堤防を越えないと思った。私は田老出身なので本当は逃げなければならないと知っていたが、その放送を聞いてしまったがゆえに絶対越えないだろうと思ってしまった。それに何日か前の地震で 10 ㎝の津波があったのでおばあさん達も油断して逃げなかったと思う。

その後は田老に行っていた夫が戻って来ると思い、自宅近くで火を燃やして暖を取り待っていた。自宅は階段を支える柱が無い状態で、今思うと危険だが暗くて分からないので 2 階から布団を持ち出して車の中で待っていた。やがて 20:30 頃に夫が歩いて戻り安堵した。寒かったので火が一番ありがたかった。裏道や水場の存在を知っているのも大事だと思う。

「冷蔵庫は浮かんで水が入らなかった」

（金浜　60 代　男性）

田老の水産加工関連施設の事務所で地震。使っていたパソコンは停電で仕事にならず、揺れが落ち着いてから皆で外に出ていた。防災無線では「3mの津波が来る」と聞いて、その後は何も聞いていない。工場長らと話をして現場の女工さん達 30 人程は帰した。どうしようかと外で 30 分ぐらい話している時に「津波が来た！逃げろ！」と言う声が聞こえた。それでサンダル履きで国道 45 号線に向かって斜面を駆け上がった。振り返ると防波堤、防潮林の方から土煙が揚がった。事務所の上には丸太が乗り、冷凍工場の壁もねじ曲がって水が入っていた。車もどんどん流され、1 台の車のクラクションがずっと鳴りっぱなしだった。そのうち田老の荒谷と青砂里方面 2 か所から煙が出始め炎まで上がった。国道 45 号線は田老の町中には入れない状態。国道の後ろの川沿いの家も全部水をかぶっていた。田老の駅舎にも水が入った。線路の斜面の 3 分の 2 ぐらいの高さまで水が来ていた。

車を流されたのでしばらく待っていると宮古に向かうという町内の方の車に 4 人乗せられた。16:30 近くだったと思う。途中、早稲栃の辺りで車が並んで動かなくなったので脇に寄せて皆で歩き始めた。常安寺の方に降りて横町の道路を歩くと高京前まで車が全部流れて来ていて通られない状態だった。間の道路も全部車で塞がっていた。サンダル履きなので歩くのも大変だった。宮古小学校が避難所になっていたが入ることは頭になく、知人の所で連絡が取れるか、自転車でも借りられるかなどと考えていた。

宮古小学校の角で他の人と別れ、知人の所に行くと停電のため真っ暗で誰も居なかったのでそのまま山口川沿いを歩き始めた。小山田橋を渡り、交通整理をしていた婦警さんに「金浜に行きたいが行けるか？」と聞くと「行けるかも知れないが、行かない方が良いです」と言われた。本当は宮古小学校に居れば良かったのかも知れないがここにいてもしょうがないし、とにかく家に帰らなければというのが頭にあったので進んだ。途中で会った知人から「金浜の下の方は全滅だぞ」と聞き、まさか自分の家も？と思った。私は普段から「自宅まで津波が来るぐらいなら宮古事態が全滅だろうし、ありえない」と話していた。とにかく帰ろう

と八木沢街道を歩いていたら、自宅に辿りつけずに職場に戻ろうとしていた近所の息子さんに会った。私は裏道を知っていたので一緒に連れて歩いた。

宮古道路の下の細い道路を歩いて家に着くと、真っ暗だが家の格好は残っていた。着いたのは 20:30 頃。3 時間はかけて歩いたと思う。白い自家用車が見えたので近づくと妻が車から降りて来た。それから付近のドラム缶で火を燃やして暖まった。運が良かったのは車が残った事と冷蔵庫と冷凍庫が浮かんで、中に水が入っていなかったこと。水や食料を出して焼いたり水を飲んだりした後、3 人で山の方の道路を廻って老人福祉センターに行った。一晩センターに居たが、入るのが遅かったので入口付近で余震の度に出たり入ったりするので寝られなかった。

翌朝すぐに避難所を出た。焚き火で暖を取り、冷凍してあった食料を出して何日間か過ごした。水は金ヶ沢から汲んで沸かして使った。自宅は住める状態ではないので、たまたまカギを預かっていた留守中の親戚宅を使わせていただいた。そこの家は流されなかったが、庭にあるがれきを乗り越えないとトイレに行けない状態だった。トイレにも海水は入っていた。運良く反射式ストーブがあり、被害の少ない部屋も使うことが出来たので助かった。そこには 4 月末ぐらいまで居たが、電気水道が 3 月末に復旧するまで、ろうそくを使い水汲みに通った。

避難所に居なかったので、物資はしばらく頂けなかった。ラジオも無く、情報が無いのも大変だった。最後の方に老人福祉センターで食料を頂いたが、冷凍庫の物は解ける前に皆さんに分け、隣近所の方や友人も色々と持ち寄ってくださり助けてくれた。片付けが落ち着いた頃、久慈の息子の所に世話になり 6 月から仮設住宅に入居している。

宮古道路が出来て助かった人もあるが、私の自宅は、水の逃げ場が無くなり被害に遭ったと思う。また、妻は声掛けに下の家を廻って歩いたようだが、あれくらいの地震であれば下に降りるのは間違いだった。すぐに高い所に上がるべきだと思った。

「常日頃の避難意識と判断力」

（宮町　80 代　男性）

その日は、幸か不幸か沖に行く予定を変更し、山田町の織笠川から数百m程離れた自宅の 5、60m脇にある養殖用資材置き場で作業していた。自宅は低い土地なので常日頃から津波を意識し、避難訓練にも参加していた。チリ津波も体験していたが、とにかく防潮堤も完備されたし、浸水したとしても自宅に帰られる程度だろうという気持ちを持っていた。

これまで津波注意報や警報があっても、潮位変化が 2、30 ㎝で大きな被害が無いことを頻繁に経験しているために、甘い気持ちもあった。しかし、今回は 80 年も生きてきて体験した事のない大地震で、何が起きたって不思議はない事態だと思った。そのため家族に、「何も持たなくていいから高台に逃げろ！走れ！」ととっさに騒いだ。

地震が来る 2、3 分前のこと。自宅の前に繋いでいた犬が、作業している自分の所に綱を切って走り寄って来た。太さ 15 ㎝の棒に、12 ㎜径程の綱で繋いでいたのに、何故かほどけていた。その犬を連れて自宅に戻り、不思議な思いで結わえ直している所で地震が来た。考えてみれば、犬が物を言わずとも何か感じて教えに来たのかもしれない。あれほどの津波が来るとは思わず、普段食料や下着などを入れて準備していたリュックを持たせて、先に息子と犬を逃げさせた。

訓練では車を使うのは良くないと指導を受けているので、本当は後ろめたかったが、私は歩くことが容易ではないため車で避難した。乗用車で織笠小学校の校庭に上がると、妻と息子は先に学校に到着していた。車を山裾に移動させた後良いことではないが、去年買ったばかりだった軽トラックを取りに自宅に戻った。2 台目を上げた時には、校庭に 5、60 台車が停まっていた。

軽トラックも山裾に置き、避難所に戻ろうと 5 分ぐらい歩くと、すれ違った方に「津波が来やんしたな」と言われた。「あれっ？」と見た時、第 1 波なのか異常な潮が見えた。校庭に降りて少し間があり家の方向を眺めていると轟音というか高い音がして、家屋、船舶、養殖施設、漁協の油タンクなど一瞬のうちに織笠橋を越えて来た。濁流なのか崩壊する建物の煙なのか水しぶきなのか、織笠駅の対岸が見えなくなった。あっ

けにとられて言葉も出ない。悲しいというのか無念というのか、私は涙もろいが涙も出ない。たまげてしまって声も出ない。一瞬で部落、町がなくなった。

いたしかたないという気持ちとショックで、いたたまれなくなって実家を見ようと漁協近くの高台に降りた時、第 3 波なのか蜃気楼のように波が高くなり、黒い土手のようになったのを見て「何で地平線があんな所にあるのだろう。」と思った。それが津波だった。防潮堤の門扉は 1 波か 2 波で全て壊れて、何十 t あるかわからない鉄の扉が海岸の方に落ちていた。

反省するのは、車がもったいないと自宅に戻ってしまった事。それも時間が早かったので助かったが、やるべき事ではなかったなと強く反省している。それに日常の避難訓練には積極的に参加して意識を高めなければならないと感じた。

校庭では泣き叫ぶ人も多く、むなしく悲しいという気持ちで周囲を見ると、部落でも日常の避難訓練に参加している人達の顔が多く見えた。その半面、命を落とした方々には失礼になるかもしれないが、途中で立ち話をしていたり、「チリ津波の時、自分の家には来なかった」と家に居たり、誘っても「ここまでは来ない」と、人の言うことを受け入れない方の姿はなかった。

妻は最初「3mの津波」と放送が聞こえたらしいが、自分は運転で聞こえなかった。立っていられないくらいの揺れだったので「津波が来る！」と思った。妻も近所の方と立ち話ししていたが、逃げるのが早かったので助かった。

途中で近くの方に「逃げべす、早く行くべす！」と言うと、その方は「まだカギをかけていないから、かけてから行く」と言い、結局は助からなかった。他の何人かにも「ただの地震じゃないよ！」と声をかけた。妻はカギをかけなかった。5 分も違わなかっただろうと思う。

私は危なく沖に出る予定もあったが、犬のお陰で自宅に戻ったところで地震にあった。「何も持たないで逃げろ！」と騒いだのも 1 回目の地震が収まるか収まらないかで、車もすぐに車庫から出していたから早かった。余震が数回あったし、揺れが収まってから出すよりは早かったと思う。

自分の船は 2 隻あり、1 隻は国道沿いに上がっていた。残りは行方不明

だったが、7 月末に北海道の苫小牧に漂着したと連絡をもらった。船は大破し、高齢で漁師も廃業するので苫小牧で処分してもらった。

長年沖合で操業していたが、気象庁の予報が出るのは遅い。自分で危険だと判断して港に帰る途中で、前後して警報や低気圧注意報などが出るのを何十年と体験しているので、自己流で行動するようになったし、家族にも大声で伝えるのにつながったと思う。風や雲の方向や、波のうねりなどから判断して仕事をすることが身についている。数十人の船員がいれば、その家族についても自分の肩にかかってくる。だからこそ気象の勉強もしながら 60 年やってきた。無線で入る注意報は参考として受け止めて、自分なりに行動するようになった。とにかく、強く感じるのは常日頃の避難意識を高く持つこと、人の声にも耳を傾けることも大事。

障害がある息子と私達高齢の夫婦にとって、避難所での生活は我慢の日々だった。妻は、ペースメーカーを入れているため、国道が走られるようになってから薬をもらいに宮古の薬局に行った。私達のみすぼらしい姿を見た店員さんは、自分がお昼に持って来たというおにぎりとお茶を出しくれた。「小さいけど 1 つずつ食べて下さい」と本当にありがたく、そんな親切な方もあった。

仮設住宅は高齢者優先と聞いたが息子に障がいがあっても全然だめだった。若い人達が抽選に当たり出て行くのに、私達は最終 7 月にようやく避難所を出ることが出来た。仮設住宅には 2 カ月入ったが、小さくても気兼ねなく家族 3 人で足を伸ばして暮らせる所を探そうと思い、宮古に自宅を建てて 10 月には引っ越すことが出来た。「山田を捨てたのか」とも言われたが、高台に土地を見つけられなかったので仕方がなかった。

今は健康のために買物にも歩いて行ったり、9 月には地区の敬老会に誘われて参加したりと少しずつ落ち着いた生活が戻ってきている。

「地震が来たら津波と思え」

（津軽石　70 代　男性）

地震の時は、津軽石の職場で決算の作業をしていた。すごい揺れで、緊急地震速報を聞いて外に出た。私は、チリ地震津波の時にも自宅が流されている。住まいが法之脇で、揺れも大きいので大津波が来ると思い、車に乗り込んで自宅に向かった。

国道 45 号線に上がった時には、停電で信号も止まり渋滞していた。交差点では信号も役にたたず、車が停まっていた。このままではまずい思い、戻って馬越を回ろうとしたが時間がかかると考え、ちょうど対向車がなかったので、法之脇まで対向車線を走って家に着いた。常に 98 歳になるお袋には、「強い揺れの時には、外に出ていろ。」と言いつけてあったので玄関先に出ていた。間もなく近所から戻った妻と、家の中から大事な物を持ち出した。薬と通帳などをかき集めて車に積み、3 人で避難した。30 分ぐらいはあったので、法之脇から馬越へ抜ける集落道を車で上がった。

この辺にいれば大丈夫かなと途中で停まっていると、何分もしないうちに「あっ！」と言う声がした。驚いて川の方を見たら、水門からあふれた水がドーッと来た。「うわっ、これではだめだ！ここに居ては危ないから上にあがれ！」と皆で一時避難所となっている道路脇の高台に逃げた。山に上がっていた人達が降りてきた時、「家が皆無いよ」と言われた。金浜マース近くの防波堤が決壊して、そこから帰ってきた波がローラー式に法之脇の家々をさらっていったようだ。JR 線も川のようになった。私の職場もだめだった。金庫も流され、何百メートルも先で見つかった。惨憺たる物。事務所の柱は残っていたが、サッシや壁が皆壊れていた。

法之脇の高台に避難していたが、暗くなる前に丈夫な人達は、山道を歩いて津軽石小学校に避難した。私は、98 歳のお袋がいたので、ここで一晩過さなければならないと覚悟した。赤前から流れていく屋根を見ては、何とも言えないような気持ちになった。私は、たまたま午前中にガソリンを満タンにしていたので助かったが、一晩で半分ぐらい減っていた。分団から炊き出しのおにぎりを 1 ついただき、一晩過した。薬を飲むにも水がないので、翌朝水をもらいに馬越の友人宅に行き、一晩泊まった。翌日、別の友人宅にお願いして二晩くらい世話になった。そのう

ち、迎えに来た娘と北上に行ったがそちらも大変だった。内陸でもガソリンは配給のようだし、店には物が無かった。店頭にあるべき物が空になっていた。半月後、仕事の復旧もあるので、ようやく高速道路でガソリンを分けてくれるようだと聞いて詰めて宮古に 4 月 2 日に戻った。

あの揺れで経験上、津波が来るなと感じた。逃げるが勝ちと考えた。もっと、大切な物が家にあったが、それを戻って取りに行くとは考えなかった。

放送は、「3m の津波」から始まった。次は「6m」で「大津波」になった。最初 3m と言った時には、水門付近に見物客が居た。大津波警報になったので危機一髪で助かった人達がいる。この辺は、津軽石小学校が避難所になっている。法之脇高台は一時避難所で、波は来なかった。

今回はチリ地震津波より大きい。JR 線がグニャグニャにはなったが、波そのものが今度の方が大きい。大きな地震が来たら何も持たなくても逃げる。欲張ってはだめ。私の避難は早い方だった。良い経験ではないが、「地震が来たら津波だと思え」だ。見物するような事はしない。

以前から、消防も警察も川を見に行って避難しろと言っていたが、当人達は大丈夫なのかと思っていた。このような大きな災害があって活動に制限をつけたようだが、油断があったと思う。

法之脇の自宅は、全く何も残っていなかった。金浜から来た波の威力が凄かったのだろう。水門を作る時に説明があって、地元では津波を遮断すると盛り上がってあふれるので、国道沿いの望楼提を高くしてくれと言っていた。水門から水を少しは逃がすという話もあったが、どうだったのか。

津波の時は歩いて避難しろと言うが、今の高齢社会ではナンセンスだと思う。どうしても、年寄りを車に乗せて避難せざるを得なくなる。そうなるとおのずと道路の整備が必要になって来る。津軽石の橋も狭くて、自衛隊も苦労したようだ。今は、車社会なので最低でも 2 車線あるように整備しなければだめだ。まして、夜だったらもっと動きが悪くて犠牲者がより多く出たと思う。おそらく逃げようと考えないのではないか。家の中で様子を見るくらいだろう。そうなれば、かなり犠牲者が出ると思う。

「内陸出身なので津波は頭になかった」

（音部里　60 代　女性）

11 日は、病院に行き買物をして、13 時 40 分のバスに乗り、重茂の自宅に戻った所で地震だった。家にいた息子は消防で出かけ、私は揺れるので柱に掴まっていた。警報が鳴ってはいたが、私は内陸出身なので、こんな大きな津波が来ることは頭になかった。それでも普段から避難訓練には参加していた。

片付けをしていると、嫁が「警報が鳴っているから、逃げよう！」と言い、逃げないと言う夫を車に乗せて笹見内の地区会館に逃げた。逃げて何分も経たないうちに「南堤防、加工場が流されたよ！」と聞いた。驚いたが、全然本気にしなかった。そのうちに「音部の部落は無くなった。」と聞いてびっくりした。

その日買った物は持たずに、携帯電話１つだけ持って逃げてしまった。どこかの災害で携帯電話を持っていて助かったという話を聞いていたので、それが頭にあったのかもしれない。嫁は、印鑑なども持って逃げたようで、私はそんな事も全く頭になかった。

警報の内容については、覚えていない。また、戻って来れるとばかり思っていた。避難訓練では、近くの神社に逃げるようにしていた。今回はその辺にも波が来ていたようだ。その日はたまたま、嫁がいたので車で笹見内に避難することが出来たが、神社に行ったら流されたかもしれない。

家業は漁師だった。明日からわかめを取ろうと準備していた矢先の事だった。船も何一つ残らない。自宅は影も形も無かった。音部地区だけ一部落全部無くなった。

一晩妹の所にいて、笹見内会館に戻った。私と夫は足が悪いので、半月ぐらい会館にいて、盛岡に半月避難した。宮古の市営住宅には、高齢者や障害者が申し込めるというので、待っていたら数週間で入れることになった。部屋は 4 階だというので、私と夫は足が痛いために迷ったが、断ったら入る所が無いと思い決めて、今は何とか生活している。息子夫婦は仮設住宅にいるため、離れて暮らしている。

「避難所は情報が集まる所」

（重茂里　50 代　女性）

自宅の加工場でメカブを刻む作業をしていた。最初は、大丈夫かなと思っていたが、かなり揺れるので外に出てしゃがんでいた。車も浮き上がり、電柱も揺れていた。その時、津波が来るとは感じたが、こんなに家が流されるほどの津波が来るとは思わなかった。堤防もあるし、湾内に波消しブロックもあるので、玄関に入るくらいかなと思っていた。

揺れが一旦収まった時、家の中に入り台所の散乱物を片付けていたら、おばあちゃんが、宮古市街からバスで戻ってきたので、「おばあちゃん、地震だから避難しよう！」とそれぞれで準備した。2 階では、鏡が落ちていて、また大きな地震が来たので「これはだめだ」と思い、「一旦避難しましょう！収まったらまた大事な物は取りに来ましょう。」と話した。

2 日前の地震でも避難はしていたので、またそんな感じかなと思い、車で重茂出張所まで避難した。今思うと自宅の周りには、全く人がいなかったので既に皆避難していたのだと思う。走っている車も無く、人も見えなかった。放送は、全く覚えていない。消防団が「避難してください」と回っていた。犬 2 匹も一緒に逃げるため、歩いて近くの白山神社に上がるか、車で舘に行くか迷った。歩くのも大変なので車にシートを敷き、犬を乗せて舘に着いたら、「津波で里の人の家はないよ」と言われた。逃げた直後に津波が来たらしい。

舘の様子を見に行ったら海中に色々な物があったが、家が見えないので更に下のお墓に降りた。堤防も何も見えず沼のようになっていた。そばに居た人が「あー、何も持ってこなかった、財布ぐらい持ってくれば良かった」と言ったが、私はこの状況に驚き、声も出なかった。2 日前の地震もたいしたことがなかったので、一旦避難してという考えでほとんど何も持たなかった。

避難所には、近所の方が米や食料を持ち寄っておにぎりを作ってくれた。避難者と近所の方達で炊き出しが始まり、200 人ぐらい避難していた小学校にもおにぎりを届けた。出張所で炊き出しをしていたが、避難者が炊き出しをするのは良くないということで、後は地区のお母さん達が当番制で炊き出しをしてくれた。水道は止まらなかったし、発電機も持ち寄って協力的に過ごした。避難所対応職員は来ていなかったので、

所長と職員が対応してくれた。情報は、出張所から聞くという感じで、私は、所長から避難者との橋渡しをお願いされた。自治会や消防団、女性部など色々な方達が入って助けてくださり、市や漁協や自衛隊などからも支援が来た。

翌日から 2 週間、自宅の 2 階だけでも何処かにあるのではないかと探しに通った。2 階部分が粉々になっているのを見つけたが、1 階部分はみつからなかった。毎日を過ごすので精一杯で、これからどうしようと考える余裕がなかった。とにかく食べる事の心配が一番だった。

避難所には、赤ちゃんから高齢者まで居たので大変だった。食材も各自で自由に作ると不足するので、調理関係で仕事をしていた方と相談してメニューを決め、当番の方に作っていただくようにした。そのうち、食材が限られるため、ご飯と味噌汁だけ作り、おかずは自分達であるものを工夫して用意してもらうように変えた。最後の方は、ご飯を炊くだけにして、支援物資には、お米を依頼するようにした。

数日経ってから、避難所に入らず倉庫に避難していた方も物資を貰いに来た。その方は、震災に遭えば自分から言わなくても市が把握をしていてくれると思っていたようだ。だから、今までもらってなかったと言っていた。その方には、「情報を得る為には、自分から避難所に来ないともらえないですよ」と伝えた。避難所は、避難するためだけではなく、情報も集まる場所。それで、途中から入った方もある。

私は、自衛隊が来る度にダンボールの仕切りとお風呂を要求した。お風呂は、設備環境の関係で津軽石小学校まで行かなければならなかった。2 ヶ月後くらいにやっと仕切りをいただいた。

避難所ではルールを決め、変える時には、一家族から 1 人ずつ集めて話をした。毎日、家族単位の当番制で掃除もした。重茂は、組織がしっかりしているし、皆が何かの組織に入っているので、お互いそれぞれの立場で助け合いながら協力出来たと思う。里地区が同じ避難所に入ったのも良かった。お互いに規則を守れないと此処を出なければならないのでそれぞれ我慢したと思う。団体は、嫌だと言う人は初めからこなかった。

私は、3 ヶ月避難所にいて仮設住宅に移った。重茂地区の仮設住宅は、3 箇所に別れてしまった。集会所がある棟には若い世帯が入り、高齢者が多い棟には集会所がない。おばあちゃん達が集まってお茶飲みする場所

がなく残念だ。小さくても良いので集会所を作ってもらいたいとお願いしている。

毎年の避難訓練には参加していた。夫は仕事でダイバーもするので、ここ何年か海の様子を見て、「海の中がおかしい、絶対大きい地震が来る」と言っていた。私は、堤防もあるしまさかと思っていたが、夫は「絶対来る」と言っていた。

生かされたというのか、こういう運命だったと思うしかない。

現在、重茂地区は 3 学校（重茂、千鶏、鵜磯）一緒になっている。職員室などは別棟だが、体育館などは時間調整して共同で利用している。重茂小学校の子ども達は津波を見ていないが、鵜磯、千鶏小学校の子ども達は見ている。その辺で気持ちが違ってくると思うし、先生の配慮もあると思う。学校にいるうちは皆元気だし、明るい。休み時間や行間体育も学年ごとに一緒に活動し、クリスマス会など 3 校での交流会も行っている。

「民生委員の活躍は津波後」

（重茂　70 代　男性）

妻と一番下の孫と父 4 人で自宅に居た時に地震。嫁と 2 番目の孫は児童館に行っていた。息子は、養殖で沖に 1 人で行っていた。屋根瓦が落ちるかと思うような凄い揺れで、孫を抱いて家の前に立っていた。

地震があった時すぐに、大津波警報があった。その後、「6m の津波」と聞いたような気がする。放送が鳴る前に電話がだめになった。息子は沖に行っているし、嫁は児童館から宮古に行くと言っていたので、時間的にどちらも終わりだろうと思った。嫁は児童館の会議が延びたので津波に遭わず、息子も船が揺れ、崩れている丘を見たので、真っすぐ丘に戻って来た。息子が船を繋ぎ、急いで自宅に戻ると間もなく津波が来たようだ。地震から 20 分以上あったので助かったと思う。

私は、自分も逃げればいいのに追切の浜に行って、船を陸に上げて結わえた。津波でも小さい波なら、ロープで抑えれば大丈夫かなと思っていた。海を見たら、すごく凪が良くてピタッと沼のようだった。昔の人から津波が来る時は、そういう凪の時だと聞いていた。まさにと海を見ながら思った。砂利浜の水位が上がって、岸壁の方もガーっと上がってきた。「まさに来た！」と思い、車に乗って走った。その時には、低い砂浜も見えなくなった。途中で止まって見ていると、沖の島も白くなって渦を巻いていたので、あーダメだと思い自宅に上がった。

3 人孫の 1 番上が鵜磯小学校に行っており、妻に迎えに行くように言われたので向かった。自宅から学校までは、車で 10 分もかからないし、低い道路はない。学校までは津波が来ていないだろうと思ったが、着くと道路の上で、皆がかたまって泣いていた。児童を体育館に避難させていたが、校庭まで水が上がったので脇のドアからそのまま山に駆け上がったそうだ。波は 1 階の 1m50 ㎝ぐらいまで来ていたので、2 階にいても大丈夫だったようだが、男の先生 2 人が泣きながら、「もう津波来ましたよ、だめだと思いましたよ」と言っていた。先生達は、津波が来ると思ったらしいが、今まで学校までは上がった事がないから油断していたようだ。放送は聞こえる場所だが、ここに居てもまた大きな波が来たら危険なので、車 2、3 台で乗り合わせて北公民館に向かった。

北公民館には、4、50 人集まっていた。子ども達もいて、初めは迎えに

来ても帰さなかった。公民館も停電のため、ストーブを持ち寄って過ごした。自主防災の発電機や道路がダメで帰られない建設業者の発電機も借りた。古い発電機で故障ばかりだったので、ろうそくも使った。ラジオ、テレビで情報を得たが、大まかな情報ばかりで重茂の詳細が分からなかった。

公民館にいる間に、追切、浦の沢の家が全部流出、荒巻にも犠牲者が出て全部で7人、1人は、千鶏で働いていて亡くなったと知った。私も浦の沢、追切に2回ぐらい降りて捜索し、暗くなってきたので引きあげた。

近所の方が女の人の声がすると、公民館に助けを求めに戻って来たので、自分も軽トラックに人を乗せてその場所に向かった。家があった所から50mぐらい上の沢で、乗用車の下敷きになっている女性を見つけた。体中泥だらけだし、寒さで後2，3時間遅ければ、助からなかったかもしれない。肋骨が折れて、肺にも水が入っていたようだ。北公民館に運んで寝かせたが、このまま置けば危ないと思い、車に乗せて消防車と一緒に山道を通って病院に向かうよう指示した。

水道は、荒巻の浜を通っている本管が大丈夫だったが、停電でポンプが止まり、3日目に水が出なくなった。その後市役所に行って、発電機を借りて動かした。自宅にあった発電機も公民館に持ち込んだ。公民館には、デイサービスの風呂もあるので、故障もあったが1回ぐらいは使うことが出来た。

震災後、何日も経たない内に漁協で対策本部を作ることになった。その後、いつまでも漁協がやっていると漁港の復興が遅れるので、地区ごとに分かれた。重茂は、漁協が主になって、盛岡までトラックで走って調達してきたので、油や食べ物には困らなかった。

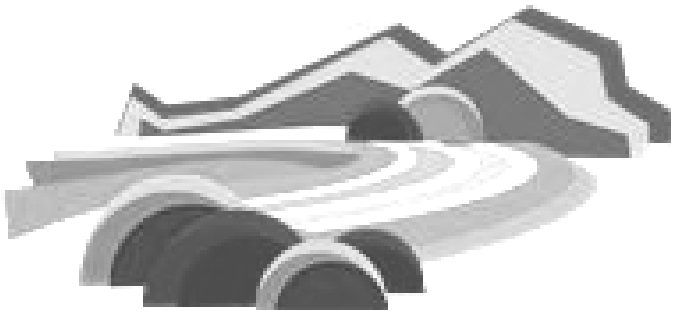
船は、800隻のうち、約18隻しか残らなかった。ほぼ全滅。もう少しで2年経つが、約80%回復している。今年の7、8月ぐらいまでには、全復旧するだろう。青森、山形など日本海を全部歩いて中古品を集めて配った。今思えば、毎日何から手をつければ良いかわからなかった。

当時は、どれが、誰の仕事かはわからないが、皆無我夢中でやった。道路も田圃の中を走るようだったし、電話1本の用事も車で市役所に行かなければならなかったのが大変だった。

先日、民生委員の研修会があった。私はその時、民生委員は自分も危険な目にあってまで人助けのために動くのかと話した。あんな時は、家

を投げてまでとは考えられないと思う。身近な所にしか行けない。ここら辺は、近所も遠いし、そこまで車で行ってとなると大変だ。

民生委員と言われても、申し訳ないが余裕がある人しか行動できないと思う。自分が大変だと動けない。てんでんこで逃げると言うのは、本当だ。土壇場になれば最後は、1 人 1 人の判断ということなんだと思う。民生委員の活躍は、避難が終わった後になってくる。地区のこれからの生活のために様々な事に取り組むことだと思う。



「地区全員が１か所、昔の家の並びに入居」

（音部里　60 代　男性）

音部漁港近くのガソリンスタンドで地震。放送で「3mの津波」、後はラジオで「6mの津波」と聞いた。

私は、ちょうど 1 ヵ月前に水門閉め係として、分団から辞令をもらったばかりだった。普通の分団員ではなかったが、皆さんが浜に居た場合の係ということで近くの店屋さんと私が依頼されていた。11 日もほとんどの団員が皆沖に出ていたので、一番先に水門を閉めに行った。すぐに他の団員も来て「もう大丈夫だろう」と海を見ていた。めったなことでは、消防団員に高い所に逃げろという指示は出ない。そこに 30 人ぐらいは居たと思う。団員のほとんどが防潮堤の内側にある漁村研修センターの階段で沖を見ていた。

ワカメの収穫時期だったので、初めはボイル釜やドラム缶が浮いて流れて来た。既に地震から 20 分程経っていたので、それで終わりだろうと思っていた。岩の陰で、南から迫る津波も見えなかった。

地震後 30 分以上過ぎた頃、少し高い所に居た副分団長が「逃げろー！」と叫んだので皆が逃げた。沖にスーッと白い線が見えたので、あれは津波だと思ったそうだ。それが何秒か遅ければ何人かが犠牲になったかもしれない。2、3 歩遅ければ流された団員もあった。近くに高台があって助かったが、平地だと逃げても間に合わなかっただろう。

沖で作業していた船は、20 分経っても津波が来ないので港に戻り、船を繋いで車で上がって助かった。

私が笹見内に向かう道路の途中で降り向いたら、もう部落が海になっていた。津波は川を昇り奥まで入って、屯所もスタンドも全滅。

上の方の家の息子さんが屋根の上に乗って流れてきた。最初は 2 階のベランダにいて、家が沈むので最後は 3 階の屋根に上がっていた。水門に集まる引き波で他の家がシュレッダーのように粉々になっていたので、そこに流れて行かなければいいなと思っていたら、うまい具合に水が止まった。その男性は、屋根から防潮堤にポンと飛び移り走って高台に上がり助かった。

今度防潮堤を作る時は、下にいると影になって見えないので間に穴を開ければ水が入るのが見えると言う人もいる。写真で見るようにヘドロ

が無いのできれいな青色の波だった。

そのうち、林の方で車から出火したので、川から出水して消火活動にあたった。その後は暗くなったので笹見内会館に向かった。その日から音部里地区、約 80 人の避難生活第 1 日目が始まった。子ども達は学校に泊っていたので安心だったが、着替えも何もないので、盛岡までトラックなどで買い出しに向かった。行ってみると内陸の店も、皆並んでいる状態だったが、「宮古から来た方がいるから先にお願いします」と通してくれた。宮古の半纏を着ているので、並んでいる人もティッシュやトイレットペーパーをくださり、買った食べ物も「これを使ってください」と渡されてとても有難かった。消防団が中心となりお金も準備してくれた。他の助けを待つより、いざという時は自分達も動かなければならないと思った。

炊き出しは、音部部落のお母さん達がしてくれた。停電でストックしておいた魚介などの冷凍品を使うので高級品ばかり。温かいご飯で普段よりも御馳走をいただいた。洋服も地域から沢山戴き、他の避難所より幸せだったと思う。音部はまとまりがあって本当にすごい所だ。会館には、毛布があり旅館から布団も届いた。水道は出ていたので、発電機でお風呂を焚いて順番に入らせてくださった家もあった。

地主さんのお陰でここの仮設住宅は、音部里地区全員が 1 ヵ所に、昔の家の並びに入れてもらった。だから、昔の隣組が残っていて誰がどこに居るのか直ぐ分る。バス停も近いし、便利で恵まれて地主さんには本当に感謝している。

昭和 8 年の津波の時は、岸壁はなく砂浜だった。その時は、自宅前の家までピチャピチャと波が来たそうだ。姉吉では、漁協の定置網の番屋があったので 50 人ぐらい亡くなり、生き残ったのは 1 人だったという。

今は港があり、更に防潮堤も出来たので「まあ、少々の津波では大丈夫だろう」という頭があった。おじいさんも「10m の津波では越えない」と言っていた。普代村は、高い防潮堤で助かったし、姉吉には、過去の津波があるので「ここより下に家を建てるな」という石碑がある。ここも何か考えなければならない。

今回、里で亡くなったのは 2 世帯。3 時 24、5 分で止まった泥だらけの時計がある。昼間なので良かったが、夜なら消防団もほとんど全滅だったろう。子ども達も学校にいたし、日中は辺りが見えるから良かった。

沖に船を出そうとした行方不明者がいる。重茂漁港に大型のイカ釣り船を停めていたので、ここから車で走って行った。10 分以上かかるので、すぐに行けばよかったのだろうが、家の中を片付けてから弟と 2 人で行ったそうだ。弟は助かったが、お兄さんだけが行方不明。船は、重茂港から出ていて一晩エンジンがかかったまま見つかった。人も助かったと思ったら誰も居なかった。振り落とされたのかもしれない。津波が来たら船は沖の方に逃げろが決まりだった。すぐであれば良かったが、音部地区の犠牲者はその人を含めて 4 人。歩くか車で逃げるかと同じで船を沖に出すか、あきらめて自分だけ逃げるかは、やっぱりその人の判断だ。

前の津波から 5、60 年間隔ならこんなに大きくならなかったと言う人もある。それが、80 年経っていたので、エネルギーが大きく溜まっていたのだろう。

「盛岡に買い出しに」

（音部里　60 代　女性）

自宅の庭で洗濯ものを取り込み中に地震。揺れは、大袈裟に言えば地球全体が動いているように感じた。家の前を通った大きいトラックの運転手さんが走っていられないと停まって降りたくらい、山も見事に揺れていた。家に入り「3m の津波警報」と聞いたが、それより高い堤防だから来ないだろうと思い、訓練で自宅のすぐ上のお墓に逃げていたので、一応避難しようとした。前に地震の時は、車で避難するなと言われていたが、歩いて 2、3 分の距離でも何となく面倒くさくて車で行った。

津波が来る様子も無いし、一緒に避難していた隣の方が、「ガスの元栓を閉めてない、閉めて来っかな」と言ったので「あー、そうだ、私も閉めてこないと」と家に戻った。結局、ガスの元栓を閉めずに薪ストーブにやかんで水をかけて、またお墓に戻った。後から考えたら何をしに戻ったんだろうと思う。

10 分ぐらい経った頃津波が来た。後で、夫に怒られたが、もう少し遅く戻っていたら津波に遭っていた。戻ったなら何か貴重品を持ちかえれば良いものを何しにもどったのか。ほとんど何も持たずに普段持ち歩くカバンを持っただけ。たまたま財布に薬の明細を入れていたので、避難 3 日後に頭が痛くなった時、宮古病院に行くという方に、一か八か明細を持たせて薬をお願いした。そうしたら 1 週間分持ち帰ってくれてそれを飲んで助かった。明細があったので、同じ薬は無くても成分が同じものを出してくれた。

沖から波が立ってくるのが見えたが、「あー来た!来た!来た!」と見ていた。堤防の漁協施設が流されても、まさか堤防を越えるとは思わなかった。波の上に船がぷかぷか浮いたままサーフィンのように越えてきた。すぐそばの家が流されるのを見ても自宅まで来るとは思わなかったが、あっという間に全部流された。いつも避難訓練に参加していた近所の方が来ていなかったので出掛けているのかなと思ったら、逃げ遅れて亡くなっていた。

映画のワンシーンの様に波が近くなると口を開いたように立ちあがり、堤防をワーッと越えて建物を押し倒した。隣の若い人は「家が流れたー」と涙ぐんでいて、年寄りはペタッと座って溜息をついていたが、私はピ

ンとこなかった。変な感じで説明できないが、実感が無かった。目では見ても頭に入らない。皆と一緒に避難しているが何処か夢のようで受け入れられずに変な世界に居る感じがした。その後、笹見内会館に入った。

「3mの津波」にはだまされた。そうでなければもっと物を持って逃げた。津波が堤防を越えると分かれば、市街地と違い渋滞もないので皆車で逃げただろう。

数十年前の警報で子どもを背負って逃げた時、お墓の辺りが崩れた事があった。落石もあり、その時はやっぱり車はダメだなと思っていた。車に乗って助かった方もあるが、道路事情もあるので一害に車で逃げろとも言えない。

学校から引き取った子ども達は、3 月いっぱい児童館で預かりますというので子ども達と大人は別々にいた。それで大人は助かったようだ。ご飯は、会館から 3 食児童館に届け、自衛隊の炊き出しも来た。

私達は、音部の皆さんのお陰で、寒い思いもしないし、食べ物も豊富で布団もあったので全て良かった。

気転が利いてびっくりした事は、翌日分団長が、「おい、お金は消防団で出すから盛岡に何人かで買い出しに行って来い！」と言ってすぐに車を走らせた事。ちょっと他の所では出来ないのではないかと思う。連絡を取って優先的に買うことが出来た。帰りは国道 106 号線が途中で通行止めになり、「自衛隊を先に通してからでないとダメです」と絶対通さなかったそうだ。夫達は消防の半纏も着ていたので、交通係に「津波に流され、今買い出しに来て夜までに皆に届けなければならないのに何で通さない！」と必死で交渉して通してもらったようだ。一般の人は通すなと言われていたようだ。

気転が聞いて、やはり消防団の親分達は凄いもんだなと思った。だから、他の所の話を聞くと歯がゆい部分もあった。

この辺でも夜中に大きい波が来たと言う話がある。がれきですごい道だった所が、波でさらわれて物が無くなっていたようで、そこを歩いた時間によって話が合わない方達が居た。それに 1 回沖に流れていった家の一部が、夜中の波で防潮堤の海側に寄せられていたので、本当だなと思った。

仮設住宅に入ったのは 3 ヵ月後ぐらい。ここは、本当に恵まれていると思う。仮設は寒いと聞くが、ここは暖かい。日当たりも良いし、建物

も一般住宅のような作りで - 10℃でも凍った事が無い。親戚も寒いでしょとカーペットや暖房用具を送ってくれるが、使わずに済んでいる。他ではいろいろな要望があると聞くが、そんなに不満はない。

仮設住宅完成後に初めて入居した時、それまで全然涙も出なかったのが、薄暗い流しで水を出したら初めて涙が出て来た。以前のお勝手が広かったことを思い出し、何でこんな所に居るのかと思った。それまでは、全然涙も出なかった。今は慣れたら住みやすい。この頃は、今の方が狭くてすぐ手が届くので良いなと思ったりして、慣れって恐ろしいなと思う。

おばあちゃんは、小学生の時に重茂の里で津波に遭い、家を流されて波に追われながら走り逃げた経験があるので、20 年前から「大きい津波が来る」と言っていた。生前は、子ども達の枕元にも懐中電燈を置いて、夜中に地震があると「大きい地震だが、起ぎどがん！」と地震の度に避難していた。明治 29 年、昭和 8 年と間隔を見て「数十年後、また次に大きいのが来るからな」と話していた。少し上に土地があるので、「小屋を建てて大事な物や食料品も置いておけ」と何回も言っていた。「そうだがね」と言って何年もそのままで終わってしまった。おばあちゃんはよくそう言っていた。

「3m の津波で何故？」

（音部里　50 代　女性）

笹見内に倉庫があってそこで、ワカメの芯抜き中に地震。家に居た夫は消防ですぐに家を出た。携帯電話はまだつながっていたので、2 階に寝ていた息子に電話をするとパニックになっていた。自宅に向かい、息子に「車に乗って逃げろ！」と言った。私は、また取りに来るつもりで自分の車から娘の新しい車に乗り換えて倉庫に移動した。

再び自宅に戻ろうとしたら「家も部落も無いよ」と言われて、津波も見ていないので 3mの津波で何故家も部落も無いのかなとピンと来なかった。そして河原商店の所を下がった学校道路で惨状を見て泣き騒いだ。建てて 9 年の家だったので、物凄いショックだった。結局、軽トラックと自家用車 2 台も流された。

その後は、流されて助かった方の応対などで無我夢中だった。笹見内会館には、小中学校の養護教諭の先生がいて、マッサージをしたり、お湯を沸かしたりと本当に大変だった。その人は、救急車を待っていられないので、自家用車で山道を通り、すぐに盛岡に搬送されて助かった。怪我人はその人だけだった。病院でもよく自分達でここまで連れて来たと言われたようだ。

ここの海がきれいな水だから助かったと言っていた。市役所前のようなヘドロだったら一口飲めば危険だった。水中も明るくて上が見えたので泳いで木に掴まり、頑張ってしがみついて助かったと言っていた。最後まで皆に逃げろと言っていて、波が来る前に風で車が空中に飛んでいったので、それを見て驚いて走ったが、軽トラックの荷台に乗った所でそのまま流されたようだ。

音部の皆さんは、頼まれなくても助けてくれた。当日から熱いおにぎりも食べさせていただいて本当に有難かった。後日、自宅を見に行くと 2 階だけ形が残っていた。もちろん中は泥だらけだったので箪笥を壊して、中味を持ち帰った。でも、何回洗っても落ちなくて捨てる物も多かった。

会館から仮設住宅の建設が見えたので、完成が待ち遠しかった。6 月 11 日に入居した時には、皆で喜んだ。やはり、部屋数が少ないのは不便だが、音部地区の皆さんには、本当に感謝している。

「これは只事じゃないから逃げろ！」

（音部里　40 代　女性）

自宅に夫、両親と居て地震。夫は、消防で出かけた。まさか、こんな津波が来るとは思わないので、洗濯物を取り込んで、落ちた電話を直したり水道を止めたり、食器棚も片付けていたので 15 分ぐらい経っていたような気がする。

近くで水が噴き出す防火水槽を見て、元分団長の方が「これは只事じゃないから逃げろ！」と言うので、両親を車に乗せた所に 1 波を見た夫から「早く逃げろ！」と電話が来た。防潮堤前の道路を通って笹見内会館に向かった。その後に 2 波 3 波が来た。津波も何も見ないで会館に着いて車を降りて少し高い所から見ようと歩いたら「音部が無いよ」と言われた。その時、会館には数人が集まっていた。見ていると林の方から煙が出ていた。川沿いに車が上がって、火事になったようだ。

日中だったので、子ども達は警報が解除になるまで学校に居ることになり、2 日ぐらい泊まって児童館に移った。学校は蓄熱暖房で寒くなく過ごせたようだ。

訓練のように短時間の避難であれば、いつものように歩いて近くの高台に避難した。まさか自宅が流されるとは思わないし、9 日の地震の時も車で笹見内会館に来て暖をとることが出来たので、もし避難が長くなってしばらく帰れなくなっても会館なら安心だという思いで、車で避難することを選んだ。後日、私達の車が防潮堤前を通過する頃、波が迫ってきている写真を見て驚いた。数分、数秒の違いだったと思う。

「堤防のかさ上げをしていたので安心していた」

（音部里　40 代　女性）

倉庫でワカメの作業中に携帯が鳴ってすぐに地震が来た。歩くのもやっとというほどの揺れだった。娘が免許を取ったばかりで、初めて 1 人で運転して友人とカラオケに宮古市街に行っていた。末広町の駐車場には置けないので、駅前駐車場に置いたので車は無事だった。娘とは、2 日ぐらい連絡が取れずに心配した。

近くの防火水槽が割れてへこんで、水が噴き出していたのを見てこれはただ事じゃないなと思った。家の屋根の瓦が落ちたら大変だと思って、車を広いところに置いた。まさか津波が来るとは思わなかった。運転手が 3 人居るので、皆で 1 台ずつ車に乗って移動すれば助かったが、教習所で車を置いて逃げろと習った事を思い出し、また帰って来れると歩いて逃げようとした。そのため、乗用車、トラックなど 3 台津波で流された。3m の津波が頭にあって、堤防を越えるわけないと思った。歩いてと思ったが、1 台の車に皆で乗って避難した。長男とおじいさんは、津波を見るというので途中で降ろして、私とおばあちゃんは、怖いので笹見内会館に向かった。

2 日ぐらい経ってから、夫と息子が避難所を回ると、娘は西中学校に居た。娘が会館に戻って来た晩は、手を握って寝た。カラオケ店で「避難しろ」と言われ、宮古小学校にも行かれず、常安寺の方に行ったら老夫婦に「少し休め」と言われたそうだ。暗くならないうちに、千徳にある友人の家まで歩き、そこから避難所に向かったようだ。ラジオで音部は全滅だと聞いて心配していたようだ。

何年か前に堤防のかさ上げをしていたので安心していた。堤防は、今度の津波でも倒れず、水門も壊れなかった。

訓練では歩いて上に避難していたが、前年にあった警報の時に車で笹見内会館に来て戻った経緯があったので、また戻るつもりで車で会館に避難した。距離があるので、車でという意識が強かった。まさか、自宅の 2 階まで波が来るとは思わなかった。

「遠くではなく、少しでも高く逃げる」

（重茂石浜　50 代　男性）

石浜の自宅で揺れを感じて外に出た。母にも「外に出ろ！」と呼びかけ、これは津波が来ると思った。

間もなく、長男が幼い孫と 2 人で浜から上がってきた。「津波が来るからもう浜には行けないだろう」と話して母に孫を頼み、私も消防に入っているので、警戒体制のため石浜神社前に行って沖を眺めていた。皆もそこで海を見ていた。

沖に 10 艘程の船が逃げたが、堤防付近に 1 艘残っていたので、何で沖に行かないのかとその船ばかり眺めていた。初めに 7m ぐらいか、その次に 8、9m の波が来た。その船を見ているうちに第 3 波を見逃していた。大きな波は、自分が立っている所の倍ぐらいの高さで、30m 近くあるように見えた。私はそのまま、跳ね上がって上の山に走り上がった。駆け上がっているうちにもう波が来て帰っていった。ほんの 1 分程度か、すぐだった。

もう少し上に上がるように言えば良かったが、寒さもあるし 7、8m の津波なら大丈夫だろうと家に孫と母を置いてきてしまった。家は潰れていたが、一部土壁があったので重くて残っていた。瓦が載ったまま家がたたまれた状態になっていて、中に人がいるのかわからない状態だった。暗くなり、電燈もないので捜すことが出来ずに、沖にいる船のために停留所の辺りで夜 9 時頃まで火を燃やし続けた。

石浜では、山に上がる前に流された方がけっこうあったが、石浜神社近くの 3 本ある杉の木に 2 人が引っ掛かった。1 人の男性は、屯所にある自主防災の担架で高台にある本家に運んで預かってもらうことにした。「痛い、痛い」と言うが、何も出来ない。

県北バスが千鶏と石浜の間に停まっていたので営業無線で、搬送できないか連絡してもらった。自分達でも搬送方法を考え、道路の確認に動いたが、重茂の橋は落ちているし、川代はがれきを取り除いて大沢まで行けても、町はガス爆発、途中の道路も崩壊していて、人を運んで歩くような状態でないとの事だった。何時間生きたのか。午後 8 時ごろ行ってみるともう息を引き取っていた。気の毒だが、どうすることも出来なかった。

もう一人の女性は、骨折のようで自衛隊のヘリで花巻に運ばれ、1ヵ月半後に戻って来た。千鶏でも１人、引き上げられた方があったが、その後搬送出来ずにバスの中で亡くなった。手を尽くしたが、連絡も出来ないし、来られるような状態ではなかった。

石浜では、部落長が亡くなり、私が漁業協同組合に向かった。車は、海洋冷食までは行けたのでそこからは歩いた。妻は、漁協に勤めているのでその晩は戻ってこなかったが、翌日、山道を案内されながら来た妻と再会したので、その足で漁協に行って連絡した。

重茂は藤畑から津軽石に抜けられるようだったが、石浜方面は、歩くよりほかなかった。重茂の里の橋まで道路を確保してもらい、そこから手渡しで物資を運んだりした。2日目ぐらいには、自衛隊のヘリが降りて来て、重病人を搬送するため、症状を聞いたりしていた。やはり、捜せば高齢で透析に通っている人や熱が上がった人、怪我をした人などけっこうあった。

石浜では7人が津波で流された。浜の加工場で稼いでいた男女2人、80歳の男性、部落長、自分の母と孫、骨折した女性の母親。私の母は沖で見つかり、後にDNA鑑定で確認された。他に山田の高齢者施設にいて亡くなった方が１人いる。

地震があった時、津波が来るとは思ったが、まさかそんな30mの津波が来るとは思っていなかった。いつもの津波警戒では、石浜神社前で海を見ていた。放送で「大津波警報、3mの津波、6mの津波」まで聞いたが、停電のためか後は聞こえなかった。孫も側にいれば抱いて逃げただろうが、自分が逃げるだけでせいいっぱいで家には戻れなかった。

何をやるにも伝達方法が無いのが困る。家が流れてしまえば、備蓄も何もあったもんじゃない。着替えもなくて、その日ワカメの作業で着ていた服と消防の半纏とヘルメット、それだけ。後は何も助からない。消防の半纏を着て2カ月以上いた。支援物資も来るが、3LとかLLサイズが無かった。Lまでは来るが大きいサイズがなかなか来ない。あの時は、数キロ痩せたが、合うものが少なかった。

長男も一緒に浜を見ていたが、少し濡れても上に逃げて助かったようだ。自分の船は、親戚が乗って沖に逃げた。船外機なので隠れる所がなかったが、漁船が1艘逃げたので、それに皆で乗って寒さを凌いで一晩越したようだ。いつも地震の時は、船はだいたい沖に逃げる。後から乗

って逃げようとした人もあったが、津波で潮位が上下して乗れなかった。
沖に逃げていた船が見ていると根滝の方から大きい波がバーッと来たそうだ。千鶏に入った波のしぶきで部落が見えなくなったので、「あー、皆亡くなっただろうな」と思ったらしい。先に千鶏に入った波が次に石浜にも入り、「石浜も人が死んだごったな」と言っていたようだ。私が、燃やしていた火を見て、「あー、人が生きていたようだ」と思ったそうだ。船は翌日戻ってきた。
石浜では避難所を作らなかった。流れたのは7軒だったので、親戚や知り合いの家で世話になることにした。自分も倉庫を借りて、2ヶ月ぐらい住み、盆過ぎぐらいに住まいを建ててもらい住んでいる。
2011年の4月頃にDNA鑑定で母が見つかった。薬局で買っていたコルセットから警察が調べたようだ。「鑑定が混んでいるので1ヵ月以上かかるかも」と言われたが、2週間もしないうちに確認されて引き取ってくれと連絡が来た。ちょうど養殖施設の撤去をしている時期だった。家が無いので、お寺に預かってもらうことにして石浜に戻った。まだ、仮設住宅も無いし、倉庫にも置く場所がないので、急いで先に仏壇を買ってお骨を置いた。5月の連休明けに弟も呼んでお寺で葬式を上げてもらい、一晩置いて納骨した。
長男の嫁は11日、千徳の実家に行き地震に遭った。電話も通じなかったので、孫が行方不明な事もすぐに連絡出来なかった。手を尽くしてみても、とても見つけられる状態ではなかった。
消防の2人は、津波が来たので車から降りて逃げたそうだが、1人は波に追いかけられてそのまま屯所に向かい、迎え波にあってそのまま亡くなった。もう一人は、山に1mほど上がって木に掴まり、その波をやり過ごしただけで助かった。ほんの少し高く上がっただけの違いだったようだ。とにかく、横ではなくまっすぐに高い所、高い所に逃げるほうが良い。
後にも先にも3番目の波が一番大きかった。第2波までは、船が上に浮いているだけだったので、後で拾って助けられるなと眺めていたが、第3波が来て蠅たたきで叩いたように1回で船が跡形も無くなった。あそこにいた船が何処に行った？と言う感じ。その一発の波で全部藻屑となり、残ったのは残骸だけ。上屋や3ｔクレーンももちをひねったような形になっていたので、ものすごいエネルギーだと思った。原子爆弾の威

力と同じように感じた。さっきまであったのが一瞬で無くなり、夢を見ているようだった。石浜神社も軒下まで水が被った。夜中にも 10mぐらいの波が来たようだ。津軽石の人達も夜の 10 時ごろに来たと言っていた。

石浜では、1 人で 2，3 艘の船を持っていた。漁師が 30 軒ぐらいなので 100 艘ぐらいはあったが、残ったのは沖に逃げた 10 艘ぐらい。海に沈んでいる船も引き上げ、直して使っている。

2011 年の 5，6 月には、その船を使い、共同でワカメを採った。ワカメも成長していたし、値段も良くて助かった。組合長からも「家で、もやもやって考えていても先に進まない。稼ぐことを考えねぇば、なんぼでも忘れることが出来るから」と言われた。港は崩壊しなかったので、沈下していても使えた。今は、船が 1 人 1 艘半ぐらいになり、6，7 割は戻ってきている。

助かった人が子孫を残し、また下がって流されてを繰り返しているのだろう。考えてみれば昔は、部落に車が 1、2 台程度しか無かった。道路も整備されていないし、浜もコンクリートではなく石の浜から船を引っ張るだけだった。本当に自然そのもの。だから壊れてもすぐに修復できたのだろう。頑丈に作れば作るほど、修復が大変。今だから、車で運ぶが、ワカメ、アワビを採って皆身体で運んだ。便利になって、クレーンや車が無ければ困るようになった。設備も最小限で、乾燥機も無いので、天日干しの昆布は晴れの時しか採らなかった。

400 年に 1 度の大きい津波だからなのだろうが、昭和、明治の津波は今回より小さい津波だったのではないかと思う。津軽石の盛合家でも明治の津波では家まで来なかったが、今度は波を被ったと言っていた。

取り敢えず 1m でもいいから高く逃げる。遠くにではなく真っすぐ上に。高さの差が運命の分かれ道だったと思う。

「半島にぶつかった波が急に入ってきた」

（千徳　50 代　女性）

重茂の千鶏保育所で勤務中に地震が起きた。職員は 2 人、子どもは 13 人で、ちょうどお昼寝から起きる時間だった。子ども達は揺れで驚いてはいたが、泣きはしなかった。地震が来たら崩れそうな建物でも、物が落ちずにガラスも壊れなかった。サイレンが聞こえ、「数十センチの津波」までは分かったが、ラジオも無く情報は得られなかった。

千鶏では、2 日前の地震でも潮位の変化が見られたので、親が車で迎えに来た。この地域は、どこへ行くにも歩く距離ではないので、皆車を使う。そのため、11 日も地震後 5 分ぐらいでお母さん達が来てくれた。

私は「多分これは来る！」という感じがしたので、手伝ってもらい急いで着替えさせていると他のお母さん達も迎えに来たので、「気をつけて帰ってね」と別れた。一番遠い川代のお母さんだけが来られなかったので、その子どもと私達が最後に車に乗って屯所に避難した。波が来たのは、3 時 10 分前後だと思う。

2011 年から保育所では、一番近い高台ということで避難場所を消防の屯所に変更した。それまでは年 1 回、千鶏のバス停近くの空き地でお母さん達への引き渡し訓練をしていたが、トイレも有り雨風も凌げるので消防の屯所を借りることにして 1 回練習をしていた。私達もマニュアルでは、車で逃げてはいけないことになっている。保育所の下に降りれば波が来るので上に逃げるのだが、あの日歩いて逃げなくて良かったなと思った。職員 2 人で子どもを車に乗せて「この子を守ろうね」という感じでパッと屯所に上がった。

車から降りて「もう、大丈夫だよね」と言った所まで波が来た（津波遡上高 20 数メートル）。波が来ているのが見えたので、1m ぐらいの段差に子どもを上げて上に逃げた。私達は足まで、子どもは腰ぐらいまで波を被った。置きっぱなしにしていた車は隣の車に寄ってガシャンと音をたてた。子どもは、顔面蒼白で声も出なかった。親も来ていなかったので、びっくりして不安だったと思う。

外海なので宮古市街より波が早かった。初めの波がジワーッとくる波で、次に来た波がすごかった。信じられないかもしれないが、根滝山（標高 164.7m）のある半島に向かった波がぶつかって、そのしぶきが山の高

さまで上がっていた。その波が急に入ったので早かった。見ていたのは、私ともう１人の先生だが、まさかと思う高さだった。

翌日、子ども達の安否確認で小学校の先生と回っていたら、石浜のおじいちゃんが、「見だごどがない波が千鶏の方に行ったっけ、石浜には入らないで千鶏の方さ行ったっけ」と言っていた。山にぶつかった波が千鶏小学校や屯所に来た。1 波は作業場の所にひたひたと来たくらいだったが、大きい波は千鶏小学校の校庭まで入った。

千鶏の避難所は、小学校と千鶏神社の高台だったが、小学校と屯所の高さを比べた時に屯所が高いので車で向かった。訓練で神社に逃げた事はないが、お散歩コースで行っているので行き方は分かっていた。

今回、一番先に迎えに来てくれた姉吉のお母さんと子どもが亡くなってしまった。千鶏は坂があるので津波が来れば川沿いに波が上がって来る立地。「絶対津波が来る！」ということで帰したが、川を挟んで向かい側に小学校があるために兄弟を迎えに行ったようだ。そのお母さんは、栃木からお嫁に来て津波に縁が無い人だった。私達は、昔のチリ地震などを体験していたので、本当は怖がらせない様に指導されていたが、あの場合は状況が全く違ったので「津波が来るから早くして！帰るよ！」と少しきつい言葉で言った。でも、そのお母さんだけは、「大丈夫だよ、怖くないよ」と優しく声を掛けていた。

浜の人達はパッと帰ったようだが、その親子は、小学校に迎えに行った帰りもゆっくり、ゆっくり歩いて帰ったそうだ。車にランドセルや通園バックが積んであったそうなので、車までは来たんだなと分かった。

波が引いてから、今仮設住宅がある辺りのお墓に向かった。そこでは、デイサービスの送迎中に津波にあった車が道路で立ち往生していた。重茂のバスも石浜に下がろうとしたら波がおかしいため、バックで戻ったそうだ。保育所を出たお母さん達も、連なって石浜に行ったが下りられずに戻ってきた。バスの中で少し待機させてもらい寒さを凌いだ。

連れていた子どもの親は、当日の午後 6 時ぐらいに歩いて迎えに来た。お礼を言われたが、そこの家も川代の海側だったので流されていて、「今までは、津波が来ても大丈夫な場所だった」と言っていた。もう一人の臨時職員は、息子さん達が迎えに来て姉吉に帰り、私は一晩バスの中で過ごした。逃げる時に持った救急バック（おさんぽ用のあめや水が入っていた）とデイサービスで残ったおやつがあったのでそれを分けあって

食べた。建物が無いのでバスがあって本当に助かった。運転手さんは、無線でエンジンを切るように言われたようだが、人がいっぱい乗っているし、寒いからとエンジンをかけて暖をとらせてくれた。

屯所には１階部分まで津波が来て、おじいさんが波に巻き込まれた。一旦ガレージ奥まで押されて、ドアにしがみついて引き波からは逃れたが、「痛い、痛い、胸が痛い」と言って最後には亡くなった。色々な物がぶつかったのだろう。運んで一緒にバスの中にいたが、夜中に亡くなった。おじいさんは秒単位で弱っていき、最後は近くの家から妻や息子ががれきを乗り越えて迎えに来た。その後、屯所が遺体置き場となった。消防団長が無線で一生懸命連絡を取ってヘリの要請もしたが、いろいろ手続きがあるようで「死にそうな人がいるから、早くヘリ寄こせー！」と掛け合っていた。夜だから何も見えないので、声がする所を頼りに怪我人を分団で助けたようだった。

ポンプ車は、先に出て皆に避難を呼び掛けていた途中で津波に遭い、海側の運転手さんが亡くなった。山側の助手席に乗っていた人は、ドアを開けて山に登って助かったそうだ。

3 月なのでワカメ作業で下に居たお年寄りが多く亡くなった。小学生も一旦校庭に出て、津波で引っ張られる近所のお年寄りの「助けてー、助けてー！」という声を聞いていたようなので大変だったと思う。

小学校隣の家族は、保育所からお母さんと帰った後に津波にあった。両親と妹が流され、保育所に行っていた子どもだけ、通園バックが何かにひっかかり助かったそうだ。おばあさんは、たまたま宮古の病院に行っていたので、その 2 人だけ残った。

翌日、学校の先生と一緒に子ども達の安否確認のため、石浜と千鶏を回った。戻った後、何とか車が通れそうだというので昼ぐらいに里まで行った。途中の橋が無くなっていたので、消防の人達が先に怪我人などを布団を敷いたドアに寝かせて落ちないように結んで運んだ。橋が無いので、渡したロープを頼りに靴で泥の中をジャブジャブ入って渡った。

里に下りたら泥だらけですごい状態だった。戦争を知らないが、そんなように感じた。まだ歩いた後が無く、釘などに気をつけて歩いた。重茂漁業協同組合まで行けば救急車がいると言われ、小学校の先生達は、地域の人ではないので消防団らに送られて行った。

重茂支所まで辿り着き話をすると千鶏の情報が全く入っていなかった。

私の知っている部分を話し、車もないので 2 晩ぐらい居た。家族とも連絡が取れなかったので、流されたと思っていたようだ。後で高浜の自宅も水が入っていた事を子ども達から聞いた。

そのうち、役所に戻るように言われ、車に便乗させてもらい、地震から 3 日後の午後 8 時に市役所に着いて状況を報告した。千鶏には、どこの病院が開いているのか、薬がある場所、遺体の引き取り方法など情報が全く入らなかったので、聞き歩いてまた重茂に戻った。保健士さん達が動き出した頃から、情報が入るようになったが、それまで千鶏は孤立した状態だった。

千鶏では亡くなった方が多く、卒園式をするような状態ではなかった。子ども達も怯えているような感じだったので、安否確認などで避難所を回り、何回か通った。そのうち、小学校に入る子どもには、けじめが必要だろうと考え、園長先生に来ていただいてお家を回り卒園式をした。卒園証書は無かったが家族での卒園式。

その後、お母さん達が安心して動けるように、午前中 2 時間だけでも子ども達を預かれればと思い、絵本や折り紙など遊べる物を持って青空保育に通った。やがて、寒かったり、雨が降ったりして困るので、作業場を借りるようになった。お母さん達は、作業場や千鶏集会所で保育所をやってと言ってくれたが、まだ行方不明者も多く、保育所を作る状態ではなかったので、重茂児童館開所に併せて受け入れてもらうことになった。仮設の橋が何とか出来た頃だったが、お母さん達は、そこを通るのが嫌だと気持ちが治まらない時期だったので、それまで 1 ヶ月間車で通った。

青空保育をしているうちに、お母さん達が集まる時間と場所が出来たので、お互いに話をするようになり、皆で 5 月の連休明けから児童館に通うことになった。本当は、石浜地区に 4 月から保育所に入る男の子がいたが、預けていたひいおばあちゃんと一緒に津波に遭い、子どもさんはまだ見つかっていない。家庭訪問で保育所に入るのを本当に楽しみにしていた。

保育所の下に此処まで波が来たという印がある。下に置いている車に行かず、上に上がってねと申し送りがあったが、今回車で逃げて助かった。数日後、保育所の辺りを見にいったら、私の楽譜が落ちていた。バラバラになったアルバムも地域の人が道路脇に取って置いてくれていた。

建物は跡形無く、後に行ったら跡地の真ん中に向日葵の花が咲いていた。前年に咲いた向日葵のたねを取って置いていたので、それらが咲いたんだなと思った。

保育所から帰した親が千鶏小学校に行くとは思わなかった。「学校は学校で逃げるから、寄らないでそのまま逃げて」と言えば良かったのではないかと反省している。親とすれば、手元に置きたくて迎えに行くのだろう。学校にも水が入ったので裏山を越えて上がったようだ。

自分達で卒園準備をしていたのが、中途半端に終わって別の保育所に移ったので、しばらく私も気持ちの区切りをつけられないでいた。青空保育をしている時に「修了式もしようね」とパソコンのデータが無いので、証書を一から作り直した。

今は、子ども達も明るく児童館に通っている。両親を亡くした子どもは、おばあちゃんが頑張って育てている。最後まで一緒に居た子どもも今年卒園式。その子の気持ちが一番心配だったが、明るく過ごしているようだ。

でも、私自身話せる時期が来たのだなと思っている。当時は、一言喋るだけで涙が出て来た。後に保育所の集まりで、「しばらく言えなかったけどやっと言えるようになりました」と話す時期があった。泣いていいんだよといっぱい言われて、それから、話をするようになった。

今、「あれが通勤時間や 1 人勤務時間だったら、大変だったよね」と話している。小学校にも下に 1 回下がってから入る道しかないので、上を通る道を作ってほしいと思う。

「70 年間騙されたという思い」

（重茂姉吉　60 代　男性）

11 日は、大安日で養殖ワカメがちょうど始まった日だった。午前 10 時頃で終わり、昼食後に姉吉海岸で明日の準備をしていた。岸壁で船に乗ろうとした時に揺れを感じた。そこには同じように地区の数人が居た。漁場は隣の千鶏にあるので、船で千鶏漁港へ向かっていた人は、途中の崖から岩が崩れるのを見てびっくりして姉吉に戻ってきた。私は、上の岩が崩れるのではないかと心配で動くにも動けず立っていた。

警報は、「3mの津波」と聞こえた。弟は、揺れが収まるとすぐに津波を見るため千鶏に車で向かった。姉吉では、地形的に上から津波を見ることが出来ない。

私は、トラックで荷物やフォークリフト、大事な物を少し高い所に移動するため、15 分ぐらい行ったり来たりしていた。揺れが収まってから 5 分もしないうちに海が動いていた。水が沢山引くわけではないが、ザワザワ潮が速いなと感じて、津波を見るかと近くの山にある観音様に登った。この高さで大丈夫かなと不安だったが、「これで津波は終わったんじゃないですか」と下を歩いている人も居て、数人が片付ける作業をしていた。

私が家を出る時、妻は宮古に行くと言っていたのを思い出し、「大変だ、呼び戻さなければ」と電話したが通じない。それで自宅の電話から掛けてみようと戻った所で、間もなく何か音がしてびっくりした。津波が来たんだなと思い、少し下に下がった所に津波の痕跡があった。それで、これはすごい津波だと思い、怖くてそれ以上は降りられないので、千鶏がどうなっているかと向かった。行ってみると大きな被害で、怪我人などを運んでいた。捜索もしたが、暗くなってきたので一旦自宅に戻った。

弟は、高台に居たので無事で、妻は重茂で給油して何も考えずに里を通り戻って来た。途中で妻の車を追い越した千鶏の人は津波に遭って流されたという。運なのか、紙一重で助かったり、亡くなったり色々ある。

沖から姉吉に戻った人は、他の漁師と車で千鶏に向かい、海岸に行こうとしたら津波が来て戻ったので助かった。その時の映像を見ると下の方に沢山人が居た。今回亡くなった姉吉の母子 4 人が、小学校から歩いて車まで戻る様子も映っていた。多分、海岸に人が居るので、自分達は

そこより高いし、関係ない所にいると言う気持ちで歩いていたのだろう。学校にバイバイと手を振りながらゆっくり歩いていた。

私は、千鶏に行かなくて良かった。私自身、津波を見た事がないので、見たいと思って山に登っている。もし、妻を呼び戻そうとしなければ、真っ先に千鶏に向かったと思う。弟は県道から見ていたが、私だったらそこではなく、やはり間近で見たいと思って小学校の校庭に行く。だから恐ろしい。もし、小学校に行けば校長先生方から、「大丈夫ですがね、校庭に居れば」と聞かれる。そう聞かれれば、「此処に来る津波はねえ」と私は絶対言うだろう。もしそうしていたら、どうなっていたかと思うと本当に行かなくて良かったと思う。

姉吉地区は、明治 29 年の津波で 71 名、昭和 8 年では 111 名が亡くなっている。家は 11 軒だが、昔はこの辺がイカの漁場に 1 番近いので、千葉、富山、房州、越中さんなどが、季節になれば小屋を建ててイカを乾かして送っていた。そこで亡くなった 60 名を含めて、111 名も亡くなっている。でも、千鶏では、昭和 8 年の死者が 0 名だったので、私達が知る限り、津波と言えば姉吉が怖い所だとなった。おそらく千鶏の人達もそう思っていただろう。だが、資料を見ると千鶏でも明治の津波で家が 17 軒流出し、70 名も亡くなっている。昭和 8 年が 0 名だったので、明治の被害を考えなかったのだろうか。

だから今回、石浜、千鶏にもここまで津波が来たという碑を建てた。今まで明治の津波がこの辺までだという話を聞いてもはっきり何処なのか分からなかった。石碑があれば、皆がその上に逃げると思う。

重茂の南地区自治会では、昭和 8 年から 50 年後の供養で漁港近くの山に観音様を建てた。毎年 6 月 11 日の供養法会には、遠方からも遺族が来て 70 名ぐらい集まっていた。毎年各地区の会長から挨拶があり、30 年以内に 90 数%の確率で津波が来ると言われているので、三度あんな悲惨な目に遭わないようにしようと言っていた。それを話した人達も今回皆流されてしまった。

今回の津波で観音様も無くなったので、少し残っていた維持費と各地区から出し合ったお金で、4 か所に到達地点の石碑を建てた。津波と言えば姉吉で他はあまり関係ないという意識があったかもしれないが、津波が此処まで上がるのかと分かり、明治の津波で 70 名も亡くなっているから、同じように高い所まで上がっていたのではないかと思っている。

千鶏の映像を見ると、あの行為は何なのだろうかと考えさせられる。海岸に何十人も居て、船を引っ張ったりしている異様な光景だ。避難意識が全く無いようで、もうこれで津波は終わりだろうという感じ。

言葉は悪いが、これまで70数年騙されてきたという思いがある。チリ津波でも、十勝沖地震でもこの辺は殆ど波の動きがなかった。3月9日の地震で今度こそ津波だと思っても来ない。70年間、騙されているから、あれで心は変わっていくのだなと思う。

津波が来るとは思っていたかもしれないが、浜辺に片付けに行っていた。自分達の判断で此処までは来ないと思った所にいたのだろう。私もそうだが津波を見た事がないので、山も近いし海からこの距離なら津波を見てからでも逃げられるものだと思っていたかもしれない。ところが、映像を見ると一瞬でプールのようになる。宮古市街とも違い、逃げる事は出来ないものだと感じた。今回初めて昼間の津波の映像が残っているので貴重だと思う。

地震が大きいから津波だと思う方は多かっただろうが、またかと思う人もいただろう。明治の地震は、揺れが長くても小さかったというから地震の大きさだけで判断しても駄目だ。どんな時でも逃げなければならないのだろうが、長年の繰り返しだと心が変わってくる。だからせめて、住宅は過去に津波が届かなかった所に建てて置かなければならないのかなと思う。堤防では防ぎきれないものがある。

姉吉では、明治と昭和の津波で11軒流されて、すぐ11軒が再建された。昔は、1軒の家に子どもが多くても仕事が無かった。木は高く売れ、山は値打ちがあったし、少し畑があれば自給自足出来る。先祖の墓を守るということも大事だったので、すぐ千鶏と石浜から親戚が、お前とお前が一緒になってこの家を起ち上げなさいと11軒が再建された。ここに来れば、すぐ家長になれるから案外簡単に復興できた。ほとんど千鶏、石浜の親戚が来ている。山に値打ちがあった事、ご先祖様を守るという事が大切にされてきたので簡単に再興出来たが、今は難しいだろう。もし流されたら、誰も居なくなるかもしれない。今回、津波に会わなくても2軒も減っている。津波のショックもあるだろう、年寄りが娘の所に移るなど、津波が来なくてもやはり影響がある。

今はクレーンで船を出すが、この地区ではまだ使えない。港が復旧しないと漁業をやる人がいなくなるのではないかと心配だ。マツモやフノ

リを取る時期でも、指をくわえて見ているような状態。港が復旧するまで時間がかかりそうだし、その間に又家が無くならないようにと心配している。漁業で生活しているので海に出ない事にはどうにもならない。

姉吉にある石碑は、昭和 8 年の津波後に建った。朝日新聞社に集まった義捐金を各地区に分けて残った金で建てたと書いてある。重茂地区に全部残っているが、「ここより下に建てるな」という文があるのは姉吉だけで、他はチリ津波記念碑となっている。2 度も全滅したから、昭和 8 年で波が上がった所に観音様を建てたが、その時助かったおばさんは、東京の孤児院に行き、後に戻って重茂で嫁になった。現在 90 歳を過ぎたおばあさんは、当時お産で実家に戻り助かったが、夫や子どもと両親が亡くなった。その時は、以前キャンプ場だった所に家があり、明治には、更に海に近い灯台登り口に家があったそうだ。

現在、石碑の下に建つ家は無いが、姉吉の石の浜も沈下で無くなり、ワカメや昆布を乾かす事も無くなった。

大津浪記念碑

高き住居は
　　児孫の和樂
想へ惨禍の
　　大津浪
此処より下に
　　家を建てるな

明治 29 年にも昭和 8 年にも
津浪は此処まで来て部落は全滅し
生存者僅かに前に 2 人後に 4 人のみ
幾年経るとも要人あれ

「震災時の人工透析」

（新里　50 代　女性）

地区の会計の関係で、和井内を午後 1 時に発つ予定だったが、何故か 2 時に出発した。市街の JA に行って地震。建物がしっかりしているので、中で揺れが落ち着くのを待っていた。その後、末広町や鍬ヶ崎の歯科に行く予定もあったが、そのまま 30 分ぐらい待機した後、新里に引き返したので今の自分があると思っている。

信号のことは覚えていないが、スムーズに通行できた。警報は聞こえた。途中、姉と母のいる田鎖に寄って様子を見たが、花輪橋は混んでいなかった。午後 4 時半前に和井内の職場に着いて施設の点検をした。トイレットペーパーなどは全部落ちていたが、後は大丈夫だった。その後、5 時過ぎに帰宅した。

自宅では、薪ストーブで暖をとった。息子も 12 時ちょっと前に帰宅したが、分団要請があり出かけた。その後、分署から炊き出し要請が来たので、私は和井内地区の婦人消防協力隊員を叩き起こして出動した。夜中なので、なかなか起きなくて時間もかかった。早く行かなければというのがあったので、取り敢えず 2 人を連れて茂市の総合福祉センターに向かった。

夜中からおにぎりを作っていたが、もっと人を集める為、12 日の朝に一旦帰宅して 9 名で出動した。持ち寄ったおにぎりの具が無くなると塩や味噌だけになり、アルミホイルやラップも無くなり、袋にまとめて入れるため、味噌だと食べる方も大変だったと思うが、それが最善を尽くした結果だった。作っている私達も味噌だと手も汚れるだろうし、水も無いのに申し訳ないなと思いながら作っていた。味が無いよりはと思うだけだった。

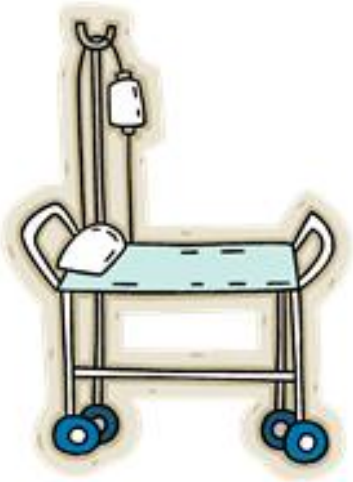
13 日のお昼頃に電気が復旧し、14 日から給食センターに移動して、15 日からは、前日の無線で呼び掛けた一般のボランティアも入っておにぎりを作った。ガソリン不足のため送迎バスも運行していた。

その後、各地でも炊き出しを始めたのか、16 日から地域ごと〈蟇目、茂市、腹帯、刈屋、和井内、川井〉に割り当てで当番制になり、午前中で解散するようになって、約 1 ヵ月、私達は 4 月 6 日まで活動した。

一般の地区民は、13 日の日中に電気が復旧してから、初めて沿岸の様

子が分かった方も多く、地震直後は、地区民は普通に活動していた。私も夢中で炊き出しをしていたので、他の様子が分からなかったが、後日新聞で 3 人でおにぎり 1 個をいただいたという話を知り、本当に大変だったろうと思った。あの時は、市街のコンビニやスーパーの物がほとんど無くなったようだが、和井内地区の雑貨屋さんにも地区住民以外の人が来て買っていったので、ほとんど何も無くなっていた。

新聞に震災時の人工透析の記事が載っていたが、私の息子も後藤医院で透析をしている。息子は大丈夫だったが、和井内にもう 1 人透析が必要な方があって、震災の時道路を通してほしいとお願いしてもどうしても通してもらえなかったそうだ。もう少し、知識を持ってほしいと思った。結局その方は、妹さんを頼って、しばらく盛岡に行ったようだ。知識のある方が検問にいてくれればと感じた。病院に行くまでのルートを個人的に交渉しなければならなくなると大変なので、今後考えていかなければならないことだと思う。



「今日は 8000 食」「今日は 9000 食」

（新里　60 代　女性）

11 日の午前中市役所からシートピアなあどに行き、和井内の自宅に戻った直後に地震。小学生の孫 2 人と外に出た。防災放送は記憶にない。この辺りは、普段からラジオの電波状態が悪いので、情報を得るのが大変だった。カーナビで情報を得ようとすると宮古の事は映らなかったが、他の地域の様子を見て大変な事態だなとわかった。山の方にいると津波が来るという感覚はなかった。

近所の方達と外にいて、夕方家の中に入った。落下物は特に無く、反射式ストーブを出してペットボトルにお湯を入れて暖を取り、孫達と 1 つの部屋に居た。息子は分団に入っていたので、田老の火災現場に行っていたようだ。連絡も取れないので、そのまま待機していた。

その日の夜中、午前零時に分署から炊き出しの要請があったので、車で茂市の総合福祉センターに向かうと既に市職員等が 10 人程度が来ていた。新里婦人消防協力隊として、私もおにぎり作りに加わった。

センターには、発電機がありガスや水もあったので、給食センターの在庫の米や近隣の米屋さんから買い占めたものを使った。3 日間泊まり、3 時間交代などで行った。立ちっぱなしでも、必死だったので疲れは感じなかった。

12 日の日中、休憩中にセンターのテレビで宮古市の大津波状況を知った。前半は、「今日は 8000 食です」、「今日は 9000 食です」と言われ、作るだけで手いっぱいだった。そのおにぎりが何処に行ったのかもわからなかった。おにぎりを途中まで運んでそこからまた搬送してという形だったようだ。新里総合事務所でも、おにぎりが何処にいくつ運ばれたか知らないようだった。中継点まで運ぶのが役目だったようだ。たまたま、NHK の取材があり、新里でも炊き出しをしていたんだなと初めて知った方もあったようだ。それで後から、何人かにお礼を言われた。

最初は、中に入れる具やのりもあったが、最後には何もなくなって塩だけで握った。あるうちは、それぞれで梅や漬物、味噌などを持ち寄って使ったが、すぐに無くなった。ラップやアルミホイルも途中から無くなって、袋に詰め込む感じになった。

センターはもともと避難所になっているので、新里地区でも停電で数名避難して来る人や宮古から働きに来て帰れない方なども来ていたようだ。

新里でも、どこから話が出て来るのかわからないが、色々な噂話やデマが出て、それを信じる人達が大勢詰めかけたりすることもあったようだ。自分の都合の良い部分だけの思いこみがあるのだろう。

数日後に長靴を履いて市役所に行ってみた。市役所もドロドロで、2階に避難者名を掲示していて、それを見に来る人でいっぱいだった。真っ暗な所で見なければならないので大変そうだった。

この地区では、津波を想定しての訓練は無かったが、山での遭難事故など各隊で炊き出し訓練はしていた。普段から大きな釜での炊き出しを経験しているので、しゃべらなくても皆どんどんやってくれた。新里地区では、協力隊も消防団と一緒に活動している。日中に災害や火事が起きると働きに出ている方は、直ぐには来られないので、協力隊もホース訓練をしている。訓練をしていて損はない。今後も協力隊としても様々な想定で炊き出しマニュアルを作っておくことが必要だと感じた。

「帰ってもいいよと言えなかった」

（崎鍬ヶ崎　30 代　女性）

田老第１中学校近くのグループホームで勤務中に地震。職員は女性 3 人だったが、1 人は昼休みで外出していた。入所者は 9 人で、ちょうどおやつ前の時間なため、2 階に 1 人残してほとんどが居間でテレビを見ていた。強い揺れで立っているのも困難だったが、田老出身の方は、三陸大津波の経験があるので外に逃げようとした。皆に「まだ、揺れているからちょっと落ち着いて」と指示した。

本来ならグループホーム母体の介護老人保健施設（崎鍬ヶ崎）に連絡して指示を仰ぎたかったが、連絡手段が無かった。防災無線が近くにあり、ホーム内にもアンテナがあったが停電で聞こえなかった。

初めは津波が来るとは思わなかったが、田老出身の職員から「この揺れは来るよ！」と言われ、近所の人達も避難を始めていたので一応避難しておこうかという軽い感じだった。いつまた余震があってもすぐ外に出られるように職員 3 人で入所者を玄関先に移動させ、中で靴を履かせた。職員の 1 人は、各部屋を回って上着を集め、毛布なども持って歩いて避難した。

車いすの方が 2 名いたが、車いすに乗せてしまうと１人職員が取られてしまい、全員を抱えて避難するのが難しくなる。荷物も持てないので、１人は職員が付いて手引き歩行、もう１人は、支えてどうにか歩いてもらった。

田老第 1 中学校の校庭には、中学生や近所の方、保育園の方達も来ていた。しばらく待機していたが、寒いので第 1 次避難所である田老公民館に向かうと入るか入らないかの時、外で「津波が来たぞ！」という声がした。見ると公民館前の坂を波とがれきが上がって来た。急いで後ろの山に上がり、ぎりぎり助かった。数分遅れていたら危なかったと思う。

常運寺の高台に行くと中学生や近所の方などが数百人いて、夕方お寺に入った。田老診療所から入院患者や医療スタッフも避難していたので体調チェックを行い、病人などは総合事務所に運ばれ、検死も始まっていたようだ。

暖房は、反射式のストーブが 2 台あったが、広い部屋で余震の度に１回ずつ止めたので寒かった。山では、持っていた毛布を被せたりしてい

たが、降りる途中でいつの間にか数枚無くなってしまった。
夜は食事が無く、常運寺は孤立したような感じだった。宮古北高校の方では炊き出しがあると聞いて、線路を越えて移った人達もいたが、私達は長い距離を歩けないのでお寺に残った。翌朝、北高校からおにぎりが届き、さ湯もいただいた。
山火事も発生し、鎮火しなければ宮古北高校に移るように言われたが、入所者を連れて高校まで歩くのは無理で、そうなったらどうしたらいいんだろうと困った。結局、高校への避難は無かったが、翌朝も津波警報が出る度にお寺から高台に上がっては降りてを繰り返していた。
入所者は、認知症がある方達なので、自分達が何故此処にいるのかが理解が出来ない。一晩じゅう「何で此処に居るの？」と聞かれ、「津波が来たんだよ」という問答を繰り返していた。徘徊する方は、お寺から出られないことがストレスになり、興奮状態で薬を飲ませてもすぐ効かなくなるので、常に職員が１人付いて目が離せない状態だった。
環境が変わると悪化するため、近づいた人に暴言を吐き、お腹が空いたと怒りだす人もいた。「部屋に帰って寝たい、こんな所で寝るのは嫌だ」などと言いだすので、なだめながら一晩じゅう過ごしていた。
様々な方が避難しているので理解がある方々ばかりではないし、あんな状況なので、皆イライラしてなかなか理解してもらえず、他の避難者も他人を思いやる余裕が無い状態だった。
寒いのでご飯や水分を取らなくても、１時間置きぐらいにそれぞれがトイレに行くので「すみません、すみません」と避けながら行かなければならない。寒い中、戸を開けたり閉めたりするので周囲も何なんだという感じになった。トイレもすぐにいっぱいになり、お寺の裏の側溝に行くことになった。連れて行くと汚物が見えるので「此処ではやりたくない」と言うのでそのまま戻るが、またここしかないよと裏に連れて行き、「こんな汚い所ではやりたくない」の繰り返し。何回か繰り返してしぶしぶ納得してもらうという感じだった。
余震や警報が鳴る度にもっと上に上がれと言われたが、本来なら車椅子が必要な方がもう限界を迎えていた。徘徊する方も、避難行動がストレスになる。上がる時に下がろうとしたり、下がる時に上がろうとするため、職員が通せんぼすると拒否をされることがまたストレスになり、理解できないのでだんだん怒り興奮するという状態。

ラジオでは、田老の詳細情報が無く、取り敢えず全国的にすごいことになっているということしか分からなかった。岩手県だけじゃないという情報を知った時、私は何時までこの状態、この人達と一緒にいる事になるのだろうと思った。入所者が少しでも落ち着いてそこに居てくれる人達だったら、誰か職員が助けを求めに行く事も出来たかなと思うが、もう手いっぱいだった。

3 月 3 日の津波避難訓練には、歩ける一部の人達だけを連れて参加したことはある。第 1 次避難所までで、その後の山に登る訓練までは参加したことが無い。山道があるなというぐらいは知っていたが、歩いたことはなかった。当日、初めて登った道は、舗装されているのはごく一部でけもの道のような所だった。

職員の義兄が田代からバイクで来て、途中から歩いて線路を渡って様子を見に来てくれた。その方に頼んで、崎鍬ヶ崎の介護老人保健施設に職員、入居者の無事と引き受け依頼を伝えていただいた。施設では、連絡もとれないし、田老は大変なことになっていると聞いて駄目なんだろうと思っていたようだ。

無事が伝わり送迎車を回してくれたが、送迎車が途中までしか来られないので、今度は線路を歩かなければならなかった。ストレッチャーを持ってきてくれたが、線路では使えない。困っていたら自衛隊の方が来て担架で運んでくれた。担架が 1 台だったので、もう一人は職員が支えて歩いた。距離が長いし、線路の石で足場が悪く、所々がれきが来ている場所もあって大変だった。

送迎車には全員が乗れなかったので、先に着いた歩ける入居者だけを乗せて一旦戻った。その間も余震や津波警報があって、残りの歩けない方達と何回も移動しなければならず、迎えを待つ時間が本当に長く感じた。

夕方には、ようやく崎鍬ヶ崎に着き、他のスタッフの顔を見たら涙が止まらなかった。1 日だけだがとても長く感じた。夜が本当に長くて、いつ朝が来るんだろうと思った。申し訳ないが、連れて逃げた事を後悔した時もある。

避難する時は、一生懸命なのでさほど大変という思いは無かったが、避難した後、避難所の中が大変だった。本人達は、誰一人津波が来たことを覚えていないし、理解できない。周りの目があっても 5 分置きぐら

いに「何で此処さいんだっけ？」、「えっ？津波が!?」と一晩じゅう繰り返した。

崎鍬ヶ崎に着いてから、ラジオで入所者の安否情報を流してもらい、遠くの家族は新幹線が開通してから様子を見に来た。皆ダメだと思っていたらしく、「年寄りを連れて逃げなくても職員が助かってくれればと思っていた、どうもありがとう」と感謝された。職員は、ただただ夢中で行動した。なかなか置いては逃げられないと思うし、そういう選択肢はなかった。

震災１年前の大津波警報では、車で崎鍬ヶ崎に避難した。その時寒かったという思いがあり、持てる物（毛布、カルテ、記録、抗菌）は持って避難しようという教訓があった。今回は、全員が乗れる車ではなかったし、少しの間避難しようかなという軽い感じだったので、トイレットペーパーやゴミ袋、替えのリハビリパンツなども適当にかごに詰めて利用者を抱えて避難した。

いつも大津波警報と言いながら来なかったし、普段から津波が来ると言っても 10 ㎝、20 ㎝という感じで、大津波警報に対する不信感があったのも確か。防災無線も聞き流していたのであまり記憶にない。

たまたま、当日はお風呂に入らない日だったので良かったが、通常入浴は午後なので間にあわなかったと思う。もし夜だったら夜勤職員が 1 人なのでどうしようと思っているうちに間に合わなかったかもしれない。私も車で行けなくはないが、行く途中で津波に遭ったかもしれない。色々な幸運が重なって助かった。

結果論だが、職員の車も使い、田代の方に車で逃げればもう少し楽に避難出来たかなとも思ったりもする。渋滞で津波に遭う場合もあるし、災害の予測が出来なかった。

地元の職員の存在は大きかったが、職員 1 人の自宅も被災していた。山火事が迫ってきたので、熊野神社からお寺に避難して来た方達の中にその職員の家族も居た。小さい子どもがいたので本当は帰してやりたかったが、1 人欠けると入所者を見守れない状態だったので、「帰ってもいいよ。」と言えなかった。余震が続く中、お母さんと一緒に居たかっただろうが、帰せなくて子どもさんにも申し訳ないなと思った。

精神的にかなり負担が大きかったが、職員 3 人で協力するしかなかった。投げ出すわけにもいかず、あの日は本当に長い夜だった。

「津波が来る時は別、めいめいこで」

（50 代　女性）

田老のグループホームに勤務していたが、11 日は出勤していなかった。普段から職員に話していたのは、まず津波が来る地域だということ。木造 2 階建ての造りに入居者 9 人、夜勤体制は職員 1 人なので火事の場合は、9 人全員を逃がすことは絶対無理だと思い、まずはそばに居る人を 1 人でも多く連れて一緒に自分の身を守りながら避難するようにとは言っていた。

田老は津波が来る地域だが、旧宮古市から通う職員も多かったので、あまり意識はしていなかった。ただ、夜勤 1 人の時に何かあったら駈けつける事を考えて、田老地区の職員を 2 人配置してもらっていた。

今回勤務していた 2 人が田老の住民で、常に訓練で避難路が頭に入っていたということも幸いし、入所者、職員全員が無事に避難をすることが出来た。

当時、私は連絡が取れないので、田老がどうなっているだろうと考え、不安でたまらなかった。今でも思い出すと鳥肌が立つ。今回、マニュアルが一つも活かされなかったが、職員がマニュアルと正反対の動きをした事が幸いした。当日、3 人の職員が冷静な判断をして、それぞれ無言のままに相手の動きを見て、「私はこれを揃えるよ」と動いた。

火災訓練では、人を逃がすだけで何かを持ち出すというのは一切無い。でも職員達は、衣類や毛布、入居者のファイル、薬などをそれぞれが短時間で動いて集め、銘々に 3 人ずつ連れて逃げている。私は日頃のチームワークが発揮されたのだと思っている。普段の動き方がとっさの時に出たのかなと感じた。

普段は、寒いから今日はホームの外に出るだけの避難にしようという感じで、山の上まで避難したことは無いし、もちろん全員で田老公民館まで行った事は無い。指示が通じない人達を連れて、訓練していない所に逃げて一昼夜。本当に私は頭が下がる思いだ。

地元の職員を配置するようにしたのは、数年前、宮古病院裏の林野火災で国道 45 号線が通行禁止になった事があったから。通行できたとしても崎鍬ヶ崎から車で 15 分ぐらいはかかるので孤立する可能性もある。

以前、運営推進会議に参加された地元の分団の方が、「火事のようなそ

こだけの災害の場合は地域の方も駆けつけてくれるが、津波が来る時は別、めいめいこで逃げてもらわなければ困る」と言った。それで、私達は命を預かっているし、2 年前のように国道を遮断されたら孤立してしまうので、やはり自分達で守らなければならないなと考えてすぐに駆けつけられる地元職員を配置することにした。

後日職員に聞いたら、「おっかなかったけど、この人達と一緒に逃げなければいけないと思った」と言われた。車いすの方も 2 人居たし、指示が通らず逃げない方が 2 階にいたが、引っ張って引きずるようにして連れて逃げたというので、よくそこまでして逃げてくれたなと本当に感謝している。

「救護経験者がいて助かった」

（田老　70 代　男性）

平成 23 年度市民の森造成事業のため、グリーンピア周辺の山林で樹種の調査中に地震。調査結果の原案を作るため、数人でホテルに戻る途中だった。強い揺れなので「これは、只事ではない」と参加者を帰した。

私はグリーンピアに勤めていたので、避難者の受け入れ準備を始めた。体育館やアリーナは寒いので、避難所はホテルしかないという判断をしてロビーに案内した。災害時の避難施設になっているが、ホテル部門は民間委託していたので、先に経営者に了解を求めて受け入れた。

揺れが強いため、直感で「津波が来る、避難者が来るな」と思った。サイレンは聞いたが、放送は覚えていない。グリーンピアには防災放送環境が無いのでラジオで情報を得た。

田老では、防災の町として全世帯に個別無線機があったが、合併後の市役所が被災したため使えなくなった。ホテルは自家発電で非常照明になったが、暖房は止まったのでストーブを出した。屋内にはシャンデリアなど落下物もあり、あれぐらいの強い地震だと建物が安全だという確信もなかったので、余震の度に避難者、宿泊者をすぐ外に出した。

高台各所の避難者が移って来るため、時間が経つごとに増え、夜 9 時になっても人が来た。田老道の駅の防災センターでは、テレビで詳しい情報を得る事が出来たようだ。ホテルでは災害状況が全くわからなかったが、センターから一部移って来た避難者などから時間を追うごとに情報が入ってきた。大きい津波とは感じていたが、詳細を聞くうちに完璧にダメだと判断した。

初日の避難者は、350～400 名。ロビーや廊下に寝かせ、宴会場も一部解放した。ホテルの毛布は、営業用なので使わなかった。津波の常習地帯の経験から、解体する山王閣の寝具を防災のために 400 枚、ホテルの従業員寮に保管していた。小田代温泉や樫内にも置いていた。それを始めは上下布団で提供し、翌日から避難者が 1000 名ぐらいに増えたので、分け合うように指示を出した。

ホテルには食料の備蓄が無いので、お客様用として準備していた食材を 11 日の晩から提供した。数日後に結婚祝賀会や学校のお別れ会などの予約があり、2、300 名分の食材をそろえていたところだった。例年 3 月

はシーズンオフなので、過去にはメンテナンスで1、2週間休むようなこともあった。経営が変わり、年間通して営業するようになった矢先の事だった。

調理スタッフなどがいるので、当日は茶碗で食事を提供した。2日目からは、人数が多いので避難者からも協力を仰いで作った。

田老道の駅に小本から来た県北バスが待機していたので、新田地区の自治会長がピストン輸送をお願いし避難者が運びこまれた。それ以外にも緊急事態なので地域の方が軽トラックで運んだ。歩いてきた方もあり、寒いのでどんどん受け入れた。

ホテルのタンクに水があったが、ポンプがいつ止まるかわからないので、トイレは上下 1 か所ずつに制限して節約した。自家発電の重油も補給したばかりで余裕はあったが、必要最小限で使うようにして毎日点検させた。12 日頃から、施設の点検をしている。炊き出しをするにもガスの点検後でなければ危険なので最小限の設備のみ利用した。一気に人が増えたので、浄化槽のことも心配で余震がある度に点検した。

12 日頃から溺れていた人も運ばれて来て、畳の部屋に高齢者や重症者を休ませた。軽傷者は廊下などにして、重体者は専務室に入った。避難者の中から看護経験者に手当や見守りをお願いした。火災で避難して来たデイサービスの人達は、途中の長内川で溺れている人を戸板で運んで来た。そのスタッフの中に看護士やケアマネージャーもいたので協力を仰いだ。医者は 45 号線が不通で来られなかったので、自分達の判断でやるしかなかった。たまたま、現役ではないが広域消防で救護経験のある方も居たので、救護のまとめ役をしてもらい本当に助かった。

そのうち秋田の広域消防が来て、拠点をグリーンピア体育館とした。秋田の救護隊は、来るのが早くて山岳消火隊まで来ていた。負傷者や妊婦などは岩泉の済生会病院に搬送された。津波に飲まれた人は、初めは大丈夫でも 2 日目ぐらいから吐いたりして具合が悪くなる人もいたので、人命救助の経験者が居た事が一番助かった。

私は、毎朝 6 時半頃に全館放送で「今日は震災から〇日目です、元気を出して身体を動かし、体操しましょう」などと声掛けしていた。食料に限りがあるので 13 日は、食事の時間をずらして 2 食にし、14 日の朝には「食料援助をお願いしているが、今日は子どもと高齢者にしか食事を出せないと思いますので、男性や丈夫な方は我慢してください。」とお願

いした。
　食料も尽きるので、13 日の晩に田老総合事務所に食料支援の要求に向かったが、がれきや火災で辿りつけず、14 日の早朝に携帯電話が通じたので役所の知りあいに SOS を出した。それで、14 日の午後 3 時すぎに山道を廻って炊き出しおにぎりが届いた。一番苦しいのが、3、4 日間だった。
　近所からの食料支援は 14 日に来た。消火活動で道の駅に待機していた岩泉の消防団も、自分達が食べる食料を運んでくれた。被災者からも個々に持って来てくれた方があった。
　対策本部から炊き出しが来るようになってから数日後、はみがきなどの衛生用品を要求したが、食べ物が先と言われてなかなか来なかった。それはそうだが、こういう生活状態では、衛生的、精神的にも快適な環境も大事だと思う。
　避難所では、1 人が風邪をひくと皆咳をし出す。遺体や現地の確認で泥靴だったし、風邪やノロウイルスもあったので途中から土足禁止とした。トイレも土足禁止にして、消毒液を置いた。数日後に市職員が来たが、それまではホテルスタッフだけで凌いだ。
　グリーンピアには、以前から防災基地としてヘリポートもあった。震災の 1 年前ぐらいか、近いうちに 100 年に 1 度の大きい地震が来るという報道があってから間もなく、八戸の自衛隊や東北電力も調査に来た事があった。何か予兆があったのか。屋外ゲートを大型機械が通るか、道路の幅、ヘリの着陸地の確認などをしていた。
　あらかじめ注意していたので、震災 2 日前の 3 月 9 日にも動くことが出来た。年 2 回の消防訓練が義務づけられているが、津波の避難訓練は、3 月 3 日に行うだけだった。避難者の救護訓練などは何もしていない。救護、炊き出し、施設管理などの受け入れ訓練も必要だ。
　遺体安置所となった宮古北高校までの交通手段がないので遺体確認、町の様子確認のためにもシャトルバスを出した。ガソリンの窃盗などもあると聞いて 2 人組みの防犯隊も作った。
　後から様々な医療団が来た時には、すぐ救護班に聞くように指示した。「現地で一生懸命働いている方から指示を受けてください」と言った。拠点がグリーンピアだと聞いて来る団体が多かったが、救護班の拠点は総合事務所から宮古北高校に移っていた。避難者が多いのはグリーンピ

アなので直接来る団体が多く、情報も錯綜しているようだった。
自衛隊は、基本的に野営だったが、スペースがあるし雨雪もあったのでアリーナに泊ってもらった。宮古市街は電波状態が悪いので、ここに情報機関の拠点を作ったようだ。震災後2,3日の間は遺体捜索だったが、後に生活支援隊が炊き出しをするようになったので、ホテル側が汁物関係、自衛隊はご飯作りと分担して協力した。
避難者の人数が多く、昼間出かける方、高台の家に避難しても食料やトイレを遠慮して戻って来る方もあり、毎日人数が掴めなかった。
避難所では、停電時に浴場を洗濯場、洗面所に解放し、スケート場を洗濯干場にした。15日夕方5時ごろ電気が復旧したので、風呂設備の点検後、17日に1つの風呂を時間交代で入浴させた。翌日もう1つの風呂も解放して班ごとに入浴させた。3月30日までは、私がホテルで指揮をとった。
後に田老の避難所を集合させることになった。それまでは、契約上の問題で部屋には避難させていなかったので、宮古市人選で市営、県営住宅などのように高齢者や体の弱い方優先を基準に部屋ごとに振り分けた。
仮設住宅には、現在407戸入居している。5月15日に80戸完成。5月末には、148戸、遅れてテニスコート部分に122世帯建設された。6月には樫内に35戸、追加工事で30戸完成した。
5月から少しずつ仮設住宅に移り、7月末までホテルが使われた。当時の一番の悩みは、ホテル部門が民間の経営だったこと。所有者は市で、運営委託契約は財団だがホテル部門を民間委託し、屋外を財団が管理していた。
震災後、8月1日から復興支援業者や、お盆の帰省客を主体に受け入れて営業再開した。営業再開にあたり雇用について考え、被災者が家の中ばかりにいては良くないと思い、被災者からも募集した。5月15日から商工会議所の支援でたろちゃんテントの営業が始まり、9月には中小企業支援機構で仮設店舗も完成した。ホテルでは、昼の営業をやめ、被災者営業店舗の方に案内することにした。それまでは、ホテルの焼き肉ハウスやクラブハウスも貸し出した。商店の経ち上げの手助けをしなければならないと思った。
乙部の自宅は、津波で全部流されていた。妻は漁協で地震に遭い、上の階に上がれと言われたが、川を越えて自宅に戻った。貴重品などを持ち

出して車に積んでいたら防波堤にバーン!!と波が当たる音がして、波が来たそうだ。慌てて裏の山に這い上がって命からがら助かった。危機一髪だった。以前から「とにかく山に逃げろ！」と言ってあったので、妻は自分の判断で逃げた。山の後ろにあるお墓で、自宅が流されるのが見えたそうだ。持っていたのは、懐中電灯と携帯電話だけだった。

妻と連絡が取れたのは、グリーンピアに来た時。会った時に妻が泣いたが、私は「泣くな！」と言った。事情は分かるが、皆同じだった。今回は、皆が被災者だ。一人一人避難行動も違う。

私が自治会に属している乙部地区では、28 名、22 世帯亡くなった。夫婦で亡くなった方もある。老人クラブが 1 つなので皆顔見知りだった。高台の家に避難して、「ここまでは大丈夫だ」とお茶を飲んでいて一気に流された方もあった。堤防があるので安心していたようだ。

ある方達は、上がっていた山に火事がせまって来たので落ち葉で周りに防火帯を作ると一瞬のうちに火が点いて通り過ぎていったという。それで助かったそうだ。一晩そこにいてグリーンピアに来たらしい。

1 年過ぎた頃から崎山、小掘内方面に新居を構える方も出てきた。街づくり協議会などで若者の意見を聞こうと思うが、仕事もあるしなかなか大変だ。時間とともに気持ちも変化し、構想の検討見直しもあるだろう。

皆それぞれが、震災の記録を持っている。やはり忘れる部分もあるので、子ども達に伝承しなければならないと思う。田老第 1 中学校では、震災当日の行動を書くように紙を渡して集めたそうだ。それは貴重だと思う。災害対応職員の行動も今後の災害対策として、記録する必要があるのではないか。行動を起こす時にそれらが役立つと思う。

グリーンピアのように避難所となっている施設は、消火、誘導訓練だけでなく、津波被害での受け入れ態勢、炊き出し、施設点検などの分担を決めておかなければ駄目だなと思った。今回は何とか自衛組織を作って動いたが、勤務体制などで小人数の場合もあるので、いろいろな想定が必要だったと考えている。

「大砲のような音が 2 回」

（田老第 3 小中学校）

校長室で 1 週間後に控えた第 3 中学校の閉校式（田老第 1 中学校と統合するため）の最終的な段取りをして、準備のため千徳方面にそろそろ出かけようかと思っていた時だった。虫の知らせなのか。何故だか、どうしても行きたくなくて校長室をうろうろしているとドン！と地震が来た。もし、あのまま出かけていたら、津波に遭っていたかもしれない。

真っ先にテレビを点けると画面が出る前に停電で切れた。1 秒くらいか、全く音のない世界。あれは、不気味だった。その後に、木造校舎がメキメキとものすごい音をたててグワーッと大きく揺れた。

非常用放送で子ども達を玄関前に呼び出し、小中学生の人数をすぐに確認した。周りを囲んだ先生達から「早く逃げましょう！」と言う声があがり、全員の気持ちが 1 つになった時間だった。私は「これは、避難訓練ではありません。本物の地震だから、本気になって高台に逃げてほしい」と伝えた。寒いので上着をはおらせ、小中学生を組みにして摂待地区の避難場所である国道下の墓地に向かった。

学校のマニュアルに沿って行動したことは確かだが、とにかく高台に逃げようという本能があったと思う。避難訓練はシンプルに「地震が来たら津波が来る」、「身を守るためには高台に逃げる」、「逃げたら戻らない」、「実際に走らせる」と言う事を 6 年間繰り返し教えている。

子ども達の最後尾にいた私が、三陸鉄道のトンネルをくぐった時に海の方から 2 回大砲のような音がするのを聞いた。昭和 8 年の津波で田老や田野畑、気仙地方などでも大砲のような音が 2 つ聞こえたという記録がある。それを読んでいたので、「あーこれがあの音なんだ！」と思い、まるで背中に津波が追いつくような気がして恐怖を感じた。

学校の避難が一番早かったと思う。子ども達が逃げるのを見て近所の方も逃げたような感じだった。学校に迎えに来る親は 1 人もいなかった。後日、迎えに行きたいけれど学校が子ども達を守るはずだと信頼していたと聞いた時にはうれしかった。

暗くなり雪が降り始めると高台に家があるお母さんが 2 人、墓地まで迎えに来たが、しばらく一緒に避難していた。私が国道に行ってみると小本の方から来た人達が集まっていて、そこで津波が来たんだなと何と

なくわかった。やがて、分団から学校が避難所になっていると言われ、水沢の高台の子ども達を帰すことにした。学校には戻らず、道草をしないですぐ高台の自宅に戻ること、外出しないこと、親の責任で連れ帰ることとした。平地のお母さん達も迎えに来たので約束をして、心配であれば水沢の公民館に行くように指示した。

職員や地域の人達と学校に戻ると毛布や布団、ストーブなどが届いていた。その時点でも、校庭まで津波が来ていたことを知らなかった。バケツに水を入れて、ろうそくを灯し、ストーブ、懐中電灯、乾電池、ラジオなどを集めているうちに分団から「先生、校庭まで波が来ていた！」と初めて聞かされた。それで職員と地区の数人で水沢の公民館に向かった。岩泉、田野畑の職員と私が水沢公民館に残り、他の職員にはグリーンピアからそれぞれの方法で自宅に帰るように指示した。山田や大船渡から来ている先生は、海沿いに自宅があることを言わず、本当にこらえていたと思う。とにかく「自分の責任で行動し、無理をしないこと。行って何かあれば家族を優先しなさい、そして家族が落ち着いたら学校に来る努力をしてほしい」と話して別れた。

11 日の夜、田老が壊滅で火事が起きていると情報が入り、自宅もダメだからあきらめろと言われた。そのうち、摂待の人が船で沖に出ていることが分かった。学校の PTA 会長だった。自分の夫と息子、叔父が 3 人とも船で沖に出ていて、おばあちゃんには誰の言うことも耳に入らない状態だった。会長の妻も一言も言わずに携帯電話で何回も連絡をとるが、全然応答が無いようだった。小学 1 年生の娘が「ママ、お茶飲む？」「校長先生寒くない？」と場を明るくしようとする姿が忘れられない。下摂待で被災した人達も一言も無かった。私もその中で、自分の家族やグリーンピアに避難した職員のこと、学校のことなど色々なことを考えながらも冷静な気持ちでいようとした。沖に居る 3 人のことも心配で眠られず、じっとしていた。

船の 3 人は、転覆してずぶ濡れになったが、たまたま久慈の船が通りかかって助けられたそうだ。貴重な証言なので、その時の体験を話してほしいと思うが、「まだ喋る気になれない、本当におっかなかった、船から摂待に津波が行くのが見えた」と言っていた。時間が必要だがいずれ伝えてほしいと思っている。

水沢の公民館に 1 晩泊り、学校の重要書類を車に乗せてグリーンピア

に行った。そこで大船渡と山田に帰られないでいた職員と合流した。その他の職員は、山越えで帰宅したがほとんどの先生が被災していた。

私は田老町の人間なので、避難所に行くと被災者の一人になる。でもこちらが泣いていられないし、皆を励まさなきゃならないという辛さもあった。田老の人達が私を見ると皆泣き出す。私は泣いてはいけないと皆の話を聞いて偉そうにアドバイスをした。自分も被災者で大変な状況だったが、お世話になった田老の人達の力になりたい、恩返ししたいという責任感もあった。

震災から 3、4 日目に道路がつながったが、がれきで自宅が何処にあるのかわからなかった。ガソリンも無いし、道路がいつ通行禁止になるかわからないので学校に泊まろうと考えたが、余震で大きく揺れる校舎が不安なのでグリーンピアから通うことにした。中学3年生の入試結果や1、2 年生の田老１中統合準備もあった。

今考えている事は、震災を忘れてはいけないという事。そして、それぞれが負っている心の傷やトラウマは、乗り越えなければいけない。スポーツをやる、音楽を聴くなど様々な方法があると思うが、津波に負けずに乗り越えることが大事。それから、伝えるということも大事。記録や現物などを残して色々な方法で伝えて行かなければならないと考えている。

忘れないこと、乗り越えること、伝えることとあるがもう１つ、田老の人達には、津波を乗り越える遺伝子があると思っている。今は愛唱歌として残っている田老町民歌（昭和 29 年）の 4 番の歌詞に「手をとり共に幾度か　津浪の中に起ち上がり　いま楽園を築きたる　世紀の偉業仰ぎみよ　我らは愛す　我が田老」とある。津波太郎と言われ、長い間津波と戦い破壊されては立ち直るという歴史を繰り返している町の子ども達にはそういう遺伝子があると思う。へこたれないという力。震災から 1 年後、田老１中に行ってみたら子ども達の目に力が戻っていた。人間はどん底から這い上がれるエネルギーを持っていると信じたい。

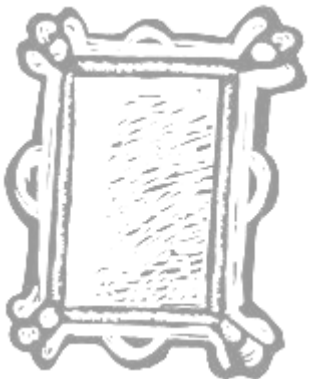
田老１中の校歌にも津波の一説があり、震災後にこの校歌を歌うことを議論したが結論は出なかった。でも私は、歌わせてもかまわないと思った。絶対立ち直る DNA を持っていると思っているから。偉そうに言ったが、私も 1 年ぐらい経ってからこのことに気づいた。それまでは、自分も揺れていた。時間が経ち、落ち着いて色々な事を見たり、聴いたり

しているうちに気づかされた。やはり、人間にはエネルギーがある。
今の子ども達が力になる。学校の先生は思い切って鍛えるべき。たくましく一緒に泣いたり笑ったりして血の通った教育をしてほしい。田老の子ども達には遺伝子があるから、少々の事ではへこたれない。
これからトラウマとの戦いはあるだろう。私も気持ちがバックする時がある。津波の映像を見ると吐き気がしたり、立てなくなることもある。それを自分で分かってコントロールすることが必要。母も 11 歳で津波に遭い、80 年経つがトラウマを持っている。夜中にうなされ、津波だと騒ぐことがある。毎日寝る時に「此処は田老ではないよ、津波の来ない団地だからね」と言うと「あーよかった」と寝る。それが毎晩続いている。そんな事も覚悟していかなければならない。実際に津波を見たり、被ったりした子ども達には、これからが戦いだと私は言っている。「数年後に何かおかしな状態になったら、その時はちゃんと親に言いなさい」親には、「子どもがおかしかったら、黙って抱きしめてあげなさい、タダですよ」と話している。
避難所に居る時はいろんな噂が飛び交い、それが本当に聞こえて来る。不思議だが、時間が経つとデマだとわかる。だから子どもは、地震が来たら津波が来るので山に逃げるということを正しく覚え、津波のメカニズムを理解することが必要。きちんと考えられる基本的な学力も必要だ。
被災した下摂待の方達の仮設住宅を校庭に建設したいと話が来た。校庭は広いので支障がないし、子ども達に震災を覚えさせる一つの学習の場となるので大歓迎だった。それに仮設住宅に入っている人達の親は、田老第３小学校を作る時にものすごく協力してくれた方達だった。田老第３小学校として独立したのは昭和 32 年。その時の初代校長は私の父で 12 年間在職し、私は摂待で育ったようなものだった。それで個人的にも恩返しがしたかった。下摂待の人達は学校に建てると迷惑がかかるだろうと悩んでいたが、皆ありがたいと言って泣いていた。
仮設住宅が 7 月に完成した時、偶然 2 重の虹がかかり、写真に撮って希望の虹と名付けている。ここで学校のチャイムを聞き、子どもの姿が見えると心が励まされるが、夜になると何で津波に遭わなければならなかったのかと落ち込むらしい。でもお互いに励まし合ってきた。
私は、時期を見計らい「いつまでもここに居るのではない、いずれ家を建てなければならないので、支援金や貯金などありとあらゆる方法で

家を建ててもらいたい」と話した。ある家族は新築して 1 週間前に引っ越し、もう 1 軒も着々と進めている。子ども達は、学校案内状や支援物資などを仮設住宅に運んだり、年末には住民から御菓子を頂いたりと交流しているので良かったなと思っている。

震災からあっという間の 2 年間。私は震災後、2 年間を静かに過ごそうと思っていたが、取材、執筆、支援物資の配布など激動の 2 年間となった。色々な人と出会い、皆繋がっているのだなと感じた。震災前は、退職したら町を離れることも考えたが、今は田老に残ろうと思っている。自分の故郷、人生を見つめ直す 2 年間でもあり、生き方まで変わった。

前任校は鵜磯小学校。多分私の写真も流されただろう。母校である田老第 1 小学校に居ても大変だった。本当に不思議だ。あの時間、行きたくなかったのは何だったのか。ジャーナリスト森健氏は、著書「「つなみ」の子どもたち」で、そのことを 逡巡(しゅんじゅん) と著した。今も校長室には、強い揺れでも 1 枚も落ちなかった歴代校長の写真とともに、初代校長であった父の写真が並んでいる。



～私の両親と津波～

私の自宅は田老の町中にあり、91 歳の母と世話に通ってくれる姉がいる。本当ならその日は、母と姉 2 人とも自宅にいるような時間だったが、その日に限ってデイサービスに行っていた。「命のカレンダーだね」と名付けた人がいるが、ここに 1 ヵ月前から介護日程を書き入れたカレンダーがある。金曜日は、たいてい外出せずに自宅に居る日になっていたが、たまたま 11 日だけデイサービスの予定が入っていた。この日、いつものように 2 人で自宅に居たらだめだったと思う。何故か前日に姉から電話で「明日、私が行く日だよね」と確認されたので、「何言っているの、デイサービスに行く日でしょ」と伝えていた。それを考えると本当に頂いた命だと思う。亡くなった方々が代わりになってくれたのかなと思っている。

自宅は外観だけ残った。両親は、昭和 8 年の津波で家族を亡くしている。吉村昭氏著「三陸海岸大津波」に掲載された作文を書いた 6 年生の女の子が私の母。7 人家族で 1 人生き残り、11 歳で孤児となった。吉村氏は、この作文を講演会などで紹介し、森健氏も母の作文を本に掲載している。森氏は、今回の津波で母が助かったとすれば 90 歳、もしかしたら生きているんじゃないかなと思い、ネットで捜して会いに来てくれた。父親も昭和 8 年の津波で親を亡くしているので、両親は津波に負けない家を作ろうと鉄筋コンクリートの頑丈な家を建てた。たしかに家は残った。

私達は、小さい頃よく望楼堤で遊んでいた。「望楼堤があるから、津波が来ても大丈夫だ」と話していると、父は「望楼堤を越えてきたらどうする？」と話した。想像させる、考えさせるようなしつけ、教えをしてくれたのだと思う。それが今回役にたった。

波は 2 階まで来ていて、1 階の箪笥が 2 階にあって驚いた。最初は、この家を残したかったが、残すことで田老町の復興が遅れるし、管理するには莫大な費用がかかり個人の力では無理だと考えた。ギリギリ 7 月頃までそのまま置いたが余震のたびに窓が落ちるのではと心配になった。それにもう一度ここに住めるかというと住めない。今でも自宅周辺に行くと震える。恐怖で足がすくんだり鳥肌がたったりすることもあるので、トラウマを抱えたのだろう。あきらめて 7 月に解体した。基礎には鉄筋

が多く入っていて頑丈に出来ていた。両親の津波に負けないぞという気持ちが表れていた。6 人きょうだい共に、母だけは津波で亡くしたくないという気持ちを持っている。

田老に生まれた人間は、一生のうちに 2 回津波を経験する。そのくらい津波の来る町だという。母も 2 回経験した。私も 30 年後は 90 歳。1 人では逃げられないだろう。そうなれば高台に住むしか選択肢はない。

震災後、母親を預かっていた姉が具合を悪くした。夫婦で一生懸命お世話しているうちに疲れてしまったらしい。私も仕事を辞めようかと思ったが、義兄から 3 人で母親の面倒を見て行こうと提案され、ガソリンも落ち着いてきたので姉の家から通うことになった。いつまでもそこに居るわけにはいかないので、土地を捜して家を建てる準備をした。新築して去年の 11 月に引っ越している。でも私は、いずれ田老の高台が整備されたら戻るつもりでいる。退職したら、田老町で身体が動く限り復興のお手伝いをしたいと考えている。

現在、田老では高台を造成しているが、何処を掘っても遺跡が出て来るらしい。昔の人達は皆、高台に住んでいたのだろう。人間の心理で徐々に下に降り、津波に遭ってまた上がる、これを繰り返しているのではないか。重茂の方にこれより下に家を建てるなと言う石碑があるが、同じようなものを田老にも作らなければまた同じことを繰り返すと思う。

田老でも震災後に元の場所に家を建てたいと言う人が 6 割いた。時間が経ち今は住みたくないという人が 7 割になった。高台移転の話が具体的になり、ほとんどが納得しているようだ。場所は変わるが元の町並になるのに 30 年はかかると思う。私は復興した田老を見られるかわからない。昭和 8 年の津波の爪痕が、昭和 40 年前後にまだ田老にあったことを考えると 30 年、それ以上かかるかもしれない。ぜひ、復興した町を見たいなと思っている。

※田老第３小学校の校長先生としてのお話と
御両親のお話を分けて掲載しました。

手記「忘れられない日々」

（50 代　女性）

あの時、担当していた味噌作り教室が終わって講師も参加者もお帰りになり、ほっと一息ついて大鍋を洗っていた。

父が亡くなった忌引き明けの午後、借りた鍋の返却は後にして時間休を取って市役所へ手続きに行った方がいいかと迷いながら。

揺れ始めてすぐ、こどもの頃の十勝沖地震と、いつも遊んだ遊具が思い出された。強い縦揺れは震源に近くて建物が倒壊しやすいと擦り込まれた記憶と、地震の揺れには程遠い遊動木（ゆうどうぼく）を思わせる振り幅の長さだった。

同時に、これも聞いたことのない「大津波警報発令」との緊迫した防災無線の声と空襲を思わせるサイレン。味噌を仕込んで元気に帰った方々の住所を懸命に思い起こしながら、併設の体育館利用者の帰路を確認し、無理に進まないよう念を押して送り出した。

これはもう炊き出しが必要になるから早く鍋を返そうと思った時、機材が壊れて危険だからと、三陸病院の入院患者さんが全員避難して来た。余震がひどく 2 階大広間は使えず、非常口を開け放したままの体育館にゴザやシートを敷き、ありったけの座布団を敷くしか手立てがなかった。病院からは布団や毛布が持ち込まれたが、病院の中を一部片付けて患者さんが引き上げるまでの時間が長く感じられた。

引き上げられると同時に、応援に来ていた同僚に留守を頼み、鍋を返しに山口公民館へ向かった。駅のあたりまで津波が来ているらしいと聞いたので西よりに進んだ。地区のみなさんがすでに炊き出しをしていた調理室に鍋を返却し、同僚と 2、3 分の情報交換の後、茶色く増水した山口川を見ながら戻った。

途中、通り道から 2 分の実家に寄り、祭壇から特大のローソクをつかみ、袋に入っていた 2 kg程の米を持って千徳公民館に戻った。冷静に行動しているつもりだったが、いつ警報やサイレンが止まったか覚えていない。

余震が続くなか、当館で 11 日の夜を明かした避難者は 3 名。駐車場の車に待機している方々に、反射式ストーブがあるから休むように声を掛けたが車から降りる方はいなかった。

ありったけ着込み、車に積んであった薄い毛布にくるまり、音のない白

くて寒い朝を向かえた。
上司は3日経っても来れず､情報は錯綜し身動きもとれないことから、人を探してみえる方々へも確実な情報を提供できないことにやり場のない憤りを感じた。
免許証の受取予定だった14日に駅前の派出所に聞きに行ったが宮古警察署にと言われた。宮古警察署もめちゃくちゃになっており、どこで誰に聞いても確かな返事はなく、このまま運転しても捕まらないかを必死に聞いた。後で考えるとさもないことだが、あの時「確実」であることに固執したのは何一つ確かなことがない現実に耐えられずしがみつける確実が欲しかったのだと思う。
津波発生から 4 日目、併設の体育館は遺体安置所となり、それに伴い公民館の各室は10日や2週間スパンで各地から派遣される警察の応援部隊の宿泊所となった。
14 日昼に、宮古の親戚に物資を届けに来たという若者が公民館に寄った。盛岡駅で知らない方から避難所へと食料を預かった彼は避難所で渡しそびれてきたからと弁当をひとつ置いて行った。なぜ弁当が私に届いたのだろう？と考え、ご遺体が運び込まれたことに思い当たった。
勝手には入られないから、事務室の隣の部屋から寝息が聞こえた頃２階のギャラリーの戸を開けて弁当を広げて一晩供えた。毛布に包まれトラックの荷台に重なるようにして運ばれてきた方々に、どうしても家庭の味の弁当を食べてほしいと思ったから。
まだ夜の明けぬうちにそっと下げて冷たい弁当をいただいた。一緒に食べたかったねと思いながら涙とともにのみこんだ。
あの日から遺体安置所が閉鎖になった10月末まで安置所が空っぽになることはほとんどなかった。
多くの方の悲しみを垣間見、見守ることしかできない日々に悶々としながら、家族を待つ方々に手向ける花を絶やさないことと働く方が気持ちよく過ごせるよう心掛けることが私達公民館スタッフにできる唯一のことだった。大阪から週 2 回、南の方から順に安置所にドライアイスを降ろしながら宮古まで来る保冷車の彼にも、入れ替えの派遣部隊にも毎回手を振り道中の安全を祈ることが元気につながるように思った。
連日の30度を超えた真夏日にも、津波の匂いと腐敗臭とお線香の匂いの入り混じった体育館の中で黙々と働いていた警察官の方々のことは心に焼き付いている。

手記「東日本大震災“巨大津波”体験記」

（磯鶏老人福祉センター）

平成 23 年 3 月 11 日(金)午後 2 時 46 分、それは大きな地鳴を伴い、これまでに体験したことのない強烈な揺れで始まった。終わりそうで収まらない長い激震、裏山が崩れるのではないかとの恐怖感、木々や電柱の振動と不気味な音、大・小はともかく必ず津波が来ると直感した。

「その時、自分は何を考え、どう行動したのか」

宮古市市老連の事務局は、藤原埠頭の南西側、磯鶏老人福祉センター内に置かれ、背後に小高い山、向かいは、製材工場が稼働する埠頭、工場の広場に積まれた製材原木の先に宮古湾が見え、立地の良さから利用が好まれる施設でした。

当日は、夕方から気温が下がり雪の予報、積雪があると駐車場に降りる砂利道の車輪掘れで利用者の車が立ち往生すると思い、昼食後、長靴に履き替えツルハシとスコップを持ち修復作業、終わって用具を片付け、靴を履き替えに車に、「と同時に地響き」。地震が来ると思いドアを片手で掴んだ時、大きな揺れが始まりすぐに強烈な振動、ドアに掴まりながら車と一緒に揺れていた。

センターには、趣味活動を楽しむ高齢者 25 名と職員 3 名が居た。揺れながら大声で「戸を開けて～収まるまで外に出ないで」と叫び、戸を開けるのを確認しながら、建物に異変がないかを目視、長い揺れの中で絶対に津波が来ると実感した。近い年月の間に、宮城県沖を震源とする大きな地震が起きる可能性が高いと以前から報道されていたので、仮に宮城県沖が震源とすれば、距離的に 30 分前後の到達時間と勝手に想定、「時間があまりない」「皆を避難させなければ」との強い思いが脳裏を走った。

高齢者のほとんどが自家用車、「車で避難させて良いものか」「裏山に避難させるとしても急勾配、しかも薄着でサンダル履き、職員が前後について 1 人ずつ避難させるのには時間が無い」「気温が下がり雪の予報」津波が来れば長時間避難場所に留まることになる。「寒さの山中で大丈夫か」など、対応判断で心の葛藤、「決断をしないと」と思い、揺れが収まってすぐに、「30 分以内に絶対に津波が来るから急いで避難して」と大声で避難指示の言葉を発した。

数日前にやや強い地震があった時にも津波が無かった、今回も来ないだろうとの思い込み、施設にとどまって趣味活動を続けたい様子の方も居たが、強く避難を促し施設から離れてもらった。

避難を促したものの「停電で信号機が動かない」「交通渋滞で津波に巻き込まれるのではないか」「自宅や高台への避難が間に合うのか」など不安な気持ち、「地震・津波の避難は、車を使用しないこと」が鉄則なことは承知していたが、交通量が少なく渋滞が起きにくい時間帯であったこと、施設から 3 方向に避難が可能な事、時間的に 30 分あれば、高台避難や自宅に戻れることなど、状況を見極め高齢者全員の避難を完了したのが午後 3 時 5 分、職員は施設の見回り、火の元確認、戸締りを終え、海の変化を注視しながら、公用車・私用車を小高い駐車場に移動、身の回りの物を持ち、津波に備えて裏山に避難する体制を整えていた。

施設から潮位の変化を確認することは出来なかったが、やがて遠く宮古湾口に見える水平線が青から灰色に変わった。職員に津波が来た事を伝え裏山に避難を指示、玄関に鍵をかけ、海を見ながら移動、閉伊崎の岩場に津波が当たって白波が立つのを見て、坂道を裏山に駆け上り避難、度々襲う強い余震に怯えながら、刻々と変化する海の動きを職員と見ていた。

やがて、藤原埠頭の堤防に白波を打ち立て、大きく逆立って越えた津波は、見る見る水位を増しながら、凄い速さと勢いで原木丸太を浮かせ、製材工場の壁を突き破り、山際で行き場を失った津波は、斜面に当たってさらに勢いを増し、何と表現してよいのか、「奮い立つ津波の猛威と恐怖」「怒涛の如く押し寄せる黒い波」「夢や映画であってほしい」と願わずにいられない光景を目の当たりにして、身の毛が逆立つ感覚に襲われながら、「施設まで到達しないで」との祈りもむなしく、波は大きく盛り上がりセンター全体を飲み込んだ。「この場所では津波に巻き込まれる」と恐怖を感じ、職員に急いでもっと高いところに避難するよう促し移動、直後にもと居た場所を越えたどす黒い津波は、丸太と職員の車を裏山に運び、電柱をなぎ倒し、隣接する民家を破壊、磯鶏地区には想像を絶する大量の海水とゴミが流入、津波の威力で破壊された多くの民家、散乱する瓦礫、流されて重なり合う車、建物に突き刺さった丸太、冠水して静まり返った国道など、引き波後の変わり果てた信じがたい現実の光景、津波の恐ろしさを初めて体験した職員は、通信手段も途切れた中で、言

葉もなくただ茫然と夕闇が迫る裏山で寒さに耐えながら、自宅や家族の安否を気遣い不安を訴えていた。

荒れ狂う波の猛威で市街地を変貌させ、「寄せては返す」を繰り返していた津波は、時間の経過とともにしだいにセンターまで到達しなくなり落ち着きの様相、さてこれから「職員とともにどう行動したら良いのか」雪の降る裏山で一夜を過ごすことは無理、センターは全壊し、丸太や瓦礫の散乱で近寄ることも出来ない状態、取り敢えず社協本部に「職員の無事と高齢者全員の避難」を知らせなくてはと思い、3 キロ以上離れた社協に「徒歩で向かうことを決断」街頭や民家の灯りが全く無い真っ暗闇の中、携帯電話の僅かな灯りを頼りに、冠水した場所を避け、散乱する瓦礫の通れるところを探しながら、津波の到達しない山際の地区を迂回、雪の降りしきる寒い中を、1 時間以上かけて本部に到着、「全員の避難と職員の無事」を報告、「老人福祉センターの利用者と職員が行方不明になっている」と報道があったことを聞き、災害時の通信手段の確保と情報伝達のあり方が大切なことを再認識させられました。

仮眠の深夜、外に出て空を仰げば、震災などなかったように美しく輝く満天の星空、社協本部で眠れない一夜を過ごし、職員を帰宅させ、被災したと思われる自宅や家族の安否確認も出来ないままに、通行止めの国道から山道を迂回し、徒歩で山を越え、もう一つの管理施設である金浜老人福祉センターに向かった。道すがら見える金浜地区の惨憺たる姿は、集落の形が消えるほどの被害、高いところに設置されたセンターには幸い影響が無く、地域の避難所として被災された高浜・金浜地区の方々を受け入れ、社協が運営に当たり、磯鶏老人福祉センターの職員と支援職員が昼夜交代で勤務、仮設住宅への転居が終わるまで、115 日間、述べ 6,790 人が避難所生活、この方々を支える為に一丸となって対応に奮闘しました。

この間、様々な出来事や訪問者への対応など、自らも被災した中で、避難所の運営は大変激務でしたが、これまでにない貴重な体験をし、色々な場面でそれぞれの人間模様があることも実感しました。また、避難所には、全国各地から寄せられた支援物資の提供や心身ともに元気を取り戻すことが出来る交流イベントの開催など、皆さんの心温まる厚意に感謝しながら、支え合いの大切さを痛感し、避難所運営の経験が自分をさらに成長させてくれたものと確信しています。

震災から 8 ヵ月が経過して、被災地域は復旧から復興に向けて動き出し、被災者は一応生活の場が確保され落ち着きを取り戻していますが、内情は今後の生活への不安が根強く、元気を出して活動したくても気力が伴わないなど、厳しい現実が依然として続いており、震災による街並みや施設の壊滅的な被害に匹敵する強い「心のダメージ」があったものと感じています。

「天災は忘れた頃にやってくる」と言われていますが、小規模な漁業被害をもたらす程度の津波は、十数年に 1 回襲来している実態でもあり、「忘れた頃に・・・」は考えを改めるべきもの、チリ地震津波の襲来から 51 年、世界的に見れば一生に 1、2 回は来るものと認識し、防災・避難の見地から生命と財産を守るために、自らが対策を講じておく必要があると感じています。

子供の頃、「強い地震が来たら高いところに逃げろ」と親から言われていたのと、10 歳の時にチリ地震津波に遭遇し、屋根の上に乗って流される人、打ち上げられる船、冠水し瓦礫に覆われた田畑など、多くの物を飲み込み、人々の心までも押し流し、一瞬にして街を消してしまう「津波は恐ろしいものだ」と自覚していたからこそ避難を迅速に行えたと思います。

今回、幸いにも車で避難させた高齢者が巻き込まれることは無く安心いたしましたが、自宅に戻って避難せずに巻き込まれ、亡くなられた方が居たと聞き残念でなりませんでした。

市老連でも、亡くなられた会員や家屋を流出した方も多く、また、壊滅的な打撃を受け運営が困難な単位老人クラブもある中で、事業活動や組織基盤の強化など、多くの課題を抱えておりますが、県内市町村老連のサポート支援を頂きながら、課題の解決に向けて一歩一歩前進したいと考えております。

長々と体験の一端を記述しましたが、お読み下さった方々に何かのお役にたてて頂ければ幸いでございます。結びに、県内の市町村老連をはじめ、全国から多大なるご支援と激励を賜り、この場をお借りして厚くお礼申しあげます。安定した元の生活に戻るのは、まだまだ先のことと思いますが、皆様のご厚意を励みに頑張って参りますので、今後におかれましても引き続きご支援いただきたく切にお願い申し上げ、感謝しながら体験記を閉じさせて頂きます。

手記「3.11」あの日 その時

（向町 70 代 男性）

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分、その時の私は自宅に隣接する事務所で、2 日後に迫るアウトドア活動の最終打ち合せをしていた。話を進めて間もなく机の下を、ドドーンという近くへの落雷か、ジェット戦闘機が低空飛行のような乾いた衝撃音的な地鳴の響きを感じた。比較的浅い地中を海側の南南東方向から北上山地に抜けて行った。同時に地面が鈍く揺れ出した。この時私の胸中は“その内に治まるだろう！”という感覚で揺れに任せて話を進めていた、のだが・・・　1 分、これは長い！変だ！と「異常」に気付いた。これまでに体験したことのない感覚だ。走行中のバスや電車内を移動する足取りで外へ出た。事務所の外壁に寄りかかりながらも相手と打合せを続け、要点を確認してお客も急いで帰った。

まだ揺れている！私は自宅に戻って倒れそうに動く食器棚を左手で抑え、その一方の手で地震情報を得るべくテレビをつけた。NHK 地震情報の画面が出て男性アナウンサーの声がした、と同時に画面が消えた。 停電かな？　その時揺れが止まった。しかし私の心中は、ちぐはぐで理由のないイライラ感だ。「時」が　刻一刻と過ぎて行く。何か？あせり？の中に「津波が来る！」が一瞬のイメージだ。

妻が 2 階から走り降りてきた。“さあどうする？”2 人が同時に「逃げよう！」と、即！合意。その後自宅からの脱出には時間との戦いを意識した。ＰＣなど資料を部屋の中で少しでも高いテーブル上へ集めた。5 分が過ぎ 15 分が過ぎた。（揺れは約 3 分間程。私には地震津波に関わる情報は何もない。津波は揺れの停止後 30 分で到達した。）

目指すは山間の常安寺。車で 3 分程のところ。自宅を出る際に私の「宝もの」を持ち出さなければという思いと、一方で“直ぐに戻ってくるさ！”（だから何も持たない）という楽観的な思いも秘めていた。結果的には楽観説に期待をして行動したこともあってか、家を出る時にはセーター一枚と洗面具だけにした。この考えが身軽で素早く家から離れることができた。通りの混雑状況を確認して、それ行け！と車で逃げ出た。それにしてもまだ「大切なものを持ち出していない」という心残りを抱きながらの走行だった。

途中の街の様子は、信号機 2 ヵ所が点灯不能によりスムーズに通り抜けた。道筋には立ち話をしている人もいて自動車の往来も道行く人も普

段と変らない。(我々の通過直後、この通りは激しい渋滞になったと聞く。車は回転し流されて水没したと聞く)

境内には人影もなく静かだ。樹木の梢に残る雪に反射する陽も陰り、凍てつく冷気に包まれている。私共は車の中で先程の地鳴りや揺れの緊張からの解放された、安ど感。思わず、フゥーッ！と息が出た。その時こちらに気づいた住職さんが寄って来て「大変な事が起きているようだ。炊き出しの準備をしてほしい」と・・・・。

私たちは町場の現状をまだ知り得ないまま、妻は灯りのない厨房で大量のコメを研いでいた。私は境内に出た。薄暮の境内に人影が多くなり人声はざわめきに変ってきた。何に興奮しているのか？話声に聞き耳を立てた。どうやら家族や知人の安否を気遣う話声だ。私にはその意味と状況には全く理解が出来ていない。複数の人の話の内容から、この境内の下の状況のようだと分かりそれを確かめる為、先ほど車で登って来た坂道を私１人で下った。

直ぐに押し寄せる水に遮られた。ここは町中なはず、しかし家々は水没している。なぜ？どうして？この異様な光景の原因が理解出来ていない。我が家の方角に目を転じ背伸びして見渡すと、これまた街並みは軒先が見えない程の水位に商店街は沈んでいた。こんな風景見た事がない。（私共が境内に到着して直に、市街地は津波に飲み込まれたものと推測）

夜になっても激しい余震に悩まされた。本堂の向こうから近づく振動音を感じると、太いローソクの燭台を持ち上げる動作が一晩中続いた。

3/12 日（震災翌日）6/－4℃

頻繁に揺れる余震の中、我が家の状況を確認するため水の引いたばかりのヘドロ道（20 ㎝程のぬかるみ）を自宅方向へ進んだ。店舗の窓ガラスはメチャメチャで 2 階建ての住宅の半分が車道に押し出されている。横転した消防車が無残だ。切れて垂れ下がった電線が余震に揺れている。四つ角の信号機は倒れ 10～20t 程の漁船が流れ着いていた。私と妻は倒れかけのブロック塀をよじ登り、またいで船底をくぐっての帰宅だった。

遠回りしてたどりついた我が家の情景は、東側の壁がぶち抜かれて、南側の掃出しサッシは飛び出していた。半分引きちぎられたカーテンが風になびいている。平屋建ての事務所は大切な資料と共に跡形無く流失していた。庭先にあった径 25cm 程の山桜も、高さ 4m のヤブ椿やサルスベリも、つるバラの垣根も根こそぎない。

物音一つない。聞こえるのは自身の衣擦れの音だけで、常識的な静けさではない。一体この空間は何なんだろう？　気分は妙にイラツク。これまで体験した自然との対話での静寂さではない。「やすらぎ」の 1/f の静けさでもない。全てを失って時間が止まった世界か？あの世でもなければこの世でもなく、その狭間にいるような感覚だ。澄んだ青空に真綿のような積雲がポッカリ浮いていた。

ここはまるで無声映画のスクリーンの中、不気味なゴーストタウン。私たちは無残に変容した自宅を眺めていた。いつどこから現れたのか人の気配を感じて現実に戻った。すると近くに日本テレビ系富山テレビのクルーの 3 人が立っていた。そこで取材を受けることになり、この状況が次の日、全国ネットで放映されたという。私共の消息はこうして伝わった。

3/13 日、12/0℃

寒さが身にしみて、陽がまぶしい朝。自宅の片付け作業にはお寺から通うことにした。荒れた我家で、さあどこから手を付ける?! 2 人は無言で自分の出来る事から始めた。

20 数年前にこの家を建てるとき基礎と天井を高くしてあった。その何かの予想通りに 2 階まで 5 ㎝下のところで水は引いていた。冷蔵庫が波で跳ね上がり天井の垂木をぶち抜き、破壊痕がその形通りに残っていた。もしその時私がここに居たならば水死ではなく即死だったと考えながら・・・。　食器棚は窓から流れ出たのか？影も形もない。浴室には車のナンバープレートと車輪が 1 つ入っていた。玄関先のヘドロの中に動くものを見つけた。手のひらにのる小さい蟹とチカだった。作業での履物はトレーニング用として車に積んであった冬山の登山靴を使った。しかし皮の靴は 1 週間も使うとヘドロからの水を吸い込んで、靴の重さは 3.8kg にもなった。足を引きずっての重労働。体重は夏までに 5kg も減った。

近所での遺体や行方不明者の捜索は 1 週間も手付かずだった。収容には柱や壁の奥深くに圧迫されて困難を極めていた。遺体がまた 1 体、戸板で運ばれていった。

私共の被災生活はお寺で 30 日間余り、着の身着のままの生活が続いた。ここでの被災生活者は 100 人程、本堂で食事。日を追って増える遺骨の数々が悲しい・・・。

犠牲者の多い我が町内では隣の奥さん、その隣の奥さんとその姉さん。そして又裏のご老人夫妻、そこにいた若いヘルパーさん 2 人も津波に呑まれた。この地域での犠牲者は 30 数人と聞く。宮古市内での死者と不明者を合せて 769 人、岩手県内では 7,413 人となった。(現時点での数値)

西風の冷たい昼下り。ミゾレや小雪が舞うガレキの中で家族や知人の安否を気遣い探す人が、セッセと動きまわる私たちを見つけて寄って来た。胸に下げた段ボールのプレートには、奥さんの名前と写真が貼り付けてあった。テルモスの白湯を振る舞うと、張りつめていた緊張がほぐれてかホッとした様子で、奥さんとの楽しかった旅行の話をする老人が 1 人。次の日も、その次の日も立ち寄って手がかりを求めていた。今どうしているのかな？あの人は。 奥さんは見つかったのかな？

我が家の被害程度は「全壊」と判定された。4m余りの津波に襲われたこの地域には新築の家はない。基礎石だけの隣近所が空しい。今後私たちの生活はこの家に住むのか否かだ。考えは自宅の惨状を「現実」と受け止めて、今後の生活設計にはリスク（津波の再襲来等）をも「覚悟」とした。その上で再建するという 2 人の結論には時間はかからなかった。

5 月になっても寒い日々が続いた。電気も水道もガスも電話もない生活で、テント生活の方がまだ増しだと想像する毎日だ。塩水とヘドロに汚れた衣類等の洗濯は外での手洗いで、家の中の洗浄は床も壁も衣類や書籍も 1 回の処理ではヘドロによるザラザラ（0.1 ㍉以下）は消えない。同じ作業を 3～4 回も手をかける。あの命の次に大事だったフィルムは日毎に処理不能へと進む。水をかぶって 20 日間位までは何とか処理出来る事は知っていた。が、このフィルム処理だけに手をかける事は出来ない。先ずは「生き抜かなければ」ならない。

被災直後、家屋の修繕工事の事情は仮設住宅の建設が優先とされ、建材も大工も不足していた。そのために個人住宅への再建修理には後仕事になった。寒風の吹き抜ける窓枠のない家での暮らしは 3 ヵ月を越した。その時の生活は〝死んでも大変、生きても大変“という難儀な日々が続いた。春もない、夏も秋も季節感のない無我夢中の日々は「時」が止まっていた。そんな生活が 1 年余り、一瞬の内に過ぎ去ってしまった。

～考察；災害から身を守るために～

自然災害から我が身を守る危機意識は、①普段の自然現象の観察 ②いつもとは違う？という感覚　③逃げるという考えと判断　が生死を分けた。

1、情報提供の信頼度

3.11 津波の情報は、初めの津波の高さは 3m と発表された。防潮堤を信頼して家に留まった人も多かった。その後に情報は「6m」と変更され、その又後に「大津波」と訂正されたが実際には 10m を超える「巨大津波」の襲来となった。地震直後に新しい情報を得たとしても変更された情報を知らない人には、結果的に最初の情報は「デマ」情報になる。岩手県の犠牲者年代別割合では、60 歳以上が全体の 70%も亡くなった。年齢を増すと敏速な行動が取り難い。よって新しい情報を得たとしても間に合わない。

私には当時関連する情報を知り得なかった。変更される不確実な情報を知る事よりも情報の無い事の方が、これまでに培った自分の感覚を信じて迷いなく行動が出来た。

2、「避難する」のか「逃げる」のか!（自然災害時での「退避」の考え方）

・「避難」は、災害の発生源が把握され、規模等が確認され理解できる際の退避行動　（町民の指定避難場所や小学校の校庭への避難で、多数の犠牲者が出た例も有る）

・「逃げる」（呑み込まれる）は緊急時。自然の力は「計り知れないもの」想定を超える現象

自然災害での状況判断と行動は、「避難」ではなく「逃げる」という知恵と行動が必要だ。

3、津波襲来のシグナルとその異変の感知。

①地下での現象「地鳴り」

南南東海の方角。彼方から突然の衝撃音と振動。乾いた響きが足元を北上山地へ抜けていった（近くへの落雷の様な地鳴り）。

②地上での現象「揺れの度合い」

日頃経験する揺れ時間は 15 秒前後。この揺れは 3 分間程で超異常

「東北地方太平洋沖地震」宮城県沖 200 km を起点に幅約 250km、北側へ 500km。

断層破壊・地すべり？余りにも大規模な現象の説明は今出来ていない。今後の研究へ。

③日常生活現象「停電」

以前には地震直後に停電があった。しかし直ぐに回復した。今回の停電は揺れが止まって 3 分以上経過しても回復しない。発電所・変電所・送電線等に重大な異常発生か？（発電・送電・変電各システムに異変を感知すれば、送・配電は緊急停止する。によって当時の停電は、サイレンやスピーカーによる広報活動も停止された）

4、津波防潮堤の信頼度

田老地区を囲む人工防潮堤は、30 年以上の年月と巨費を投じて建設された。しかし今回の津波の高さは 16m(場所により 39.7m)で、防潮堤は一瞬にして破壊され粉々に散乱した。東洋一と自負した構築物の過信の結果が犠牲者数を拡大させた。

・入念に準備した計画の中でも私たちの生活環境では、「準備を超えるトラブルが起る」という認識を常に持つ必要がある。幾ら防備や準備をしたとしても「何かが、起こる！」事を念頭におけば、事前にそのトラブルは察知出来る。不幸にして不意の災難に巻き込まれたとしても、そのトラブルは「これだったのか」と知る事で、心身に余裕が出来る。そしてそのショックやパニックは半減し、状況に対して速やかに適切な処置行動が導き出せる。

・アクシデントの状況判断

① 危険なこと；自分が（人間が）処理又はコントロール「出来ない」状況と理解する。

② 困難なこと；自分や仲間の協力などで処理「出来る」状況。によって①②は知識や経験によって異なり個人差もある。東京電力の原発事故問題は「危険」なものになる。

5、津波の襲来

我家が 4m もの津波に襲われるということを事前に知っていたなら、私たちは逃げ遅れたに違いない。大津波により自宅が「全壊」という事が予測されたら大事な「もの」を持ち出す事を意識する。津波の到達時を予測する場合、自分の都合に合わせて設定する。によって当時津波到達時刻「15 時 20 分」までに私達 2 人は自宅を離れる事は出来なかった。

6、津波と雪崩

若い頃私は、北アルプスの穂高岳・涸沢で雪崩に巻き込まれて九死に一生を得た事を思い考えた。雪崩の遭遇直前に何かよく分からないのだ

が「異様な気分」になった事を。生死に関わる危機状況に遭遇する時には、理由のない一瞬の「イラダチ」があった事を覚えている。今回の津波寸前の気持にも同じ様な感覚にあった。雪崩でも津波にでも、心の隅のモヤモヤには「何か」が隠されていると、私は信じている。今の科学を持っても解き明かす事の難しいだろうこの感覚は、動物的本能が危険を察知しているのでは？とも考える。今後もこの危機感覚を、危険が迫る前ぶれの「シグナル」として大切にしたい。

7、原発事故災害

「原発事故問題」の悲劇を私たちはどのように考えたらよいのだろうか？事故によって引き起された目に見えない恐怖を。住民の生活や人生を変えた放射能汚染が今後とも永遠に続く。その引き起こした関係者には「危険」という意味が理解できていないようだ。

現在世界にある原発の使用済み核燃料は、最終的な処理方法はまだ確立されていない。我が国では青森県六ヶ所村で「取あえずの保管」が現状だ。この保管施設も満杯に近い。

今年初めスウェーデンで、使用済核燃料の処理を地下深く埋めると発表した。世界初の処理？はこれが最善なのだろうか？　使用済み核燃料棒を野外に放置して生物に影響がなくなるまでに10万年もかかるという。過去 10 万年前とはネアンデルダール人の頃だ。

日本にある原発の建設や防潮堤建設等の津波対策基準は、100 年程度のデータを基に想定されたものという。我々が津波災害を考える年数は、1000 年以上のデータを基に考えたい。

科学の進歩は「造る技術と処理する技術」が「一対」であってこそ、安心して発展した技術の恩恵を受ける事が出来る。何百年もの先の話であっても我慢したい。

8、「天災は忘れたころに来る」

・この言葉は、地球物理学者であり随筆家の寺田虎彦の言葉として伝えられている。関東大震災を経験し、自ら被害状況の調査研究を第一線で指揮した寺田虎彦の経験が、この格言となったという。しかし最近はこの言葉を聞く事がない。人工構造物に囲まれての安心感から無防備になり、自然の脅威を無視した生活が今回の災害結果として現れた。

・宮澤賢治の生まれた明治 29 年は三陸大津波の襲来した年で 21,959 人が犠牲となる。その 37 年後の昭和 8 年 3 月 3 日には三陸の大津波で死者

行方不明合わせて 3,064 人を出した。この年の 9 月 20 日に賢治は亡くなった。賢治は大津波の年に生まれて大津波の年に世を去った。この生涯の間にも岩手には、冷害や干ばつなどによる多くの災害が発生した。自然の観察とボランティア精神はこのような環境の影響もあったのだろうか？「雨ニモマケズ、風ニモマケズ、雪ニモ夏ノ暑サニモマケズ、丈夫ナカラダヲモチ・・・東ニ病気ノコドモアレバ、行ッテ看病シテヤリ・・・」

・地震や津波という自然現象の脅威から逃れるには、私たちが自然界で生きて行く知恵を身に付けておく事に限る。自分は「人間」の前に「動物」であるということを認識して、日頃から自然に親しみ、自然を観察し五感を磨くよう努める。そして自然の中では謙虚で、憧憬の心を持ち共存するよう心掛ける。これが自然の威力から「我が身を守る」ことにつながると私は考えている。

今回、私にとっての津波というイメージは「計り知れない脅威の襲来」としてとらえたことが、私共 2 人に「無事」という「計り知れない幸運」を与えてくれた。

友人や知人そして各団体の方々から私たちの為に、心温まるお手伝いやご支援を戴いた。また書籍などのヘドロ処理には、国内外から述べ約 400 人ものボランティアの皆さんのご協力を得た。本当に皆様には助けて戴いた事に感謝、感謝・・するばかりだ。

この震災後を振り返ると、私たちは余りにも「生き抜く」ための明け暮れだった。しかしこの大きな歴史的節目の出来事は、自分たちの目的や価値観を見直して今後どんな道を歩むかを教えてくれた機会でもあった。過去の事は終わった。一つの終わりは一つの始まりであるという事も知り得た。

2011 年 7 月 7 日、私の誕生日に津波をくぐり抜けて伸びてきた庭先の笹、ホテイチク（布袋竹）の枝につるした短冊には、「あと 30 年分の仕事が出来ますように」と願った。

皆様方のご支援が私たちの生きる事へのきっかけとなった事を改めてありがたく感謝しております。　本当にありがとうございました。

2012 年　秋